



「学校のお母さん」 としての養護教諭

● 東京成徳大学教授・付設心理・教育相談センター長
深谷 和子

学校不適応児の増加する中で——

最近の小・中学校の保健室には様々な問題を抱えた子どもが来室し、養護教諭には本来のケアや病気の手当て以外に、心のケアワーカーとしての役割が増加してきていると聞く。

文部省は「いじめ」や不登校などの子どもの学校不適応問題を解決する方策の1つとして、現在一部にしか配置されていない中学校のスクールカウンセラーを、2005年までに全中学校にゆきわたらせる計画を発表した。しかしスクールカウンセラーは現在週に2日程度のパートタイム勤務であり、当分常勤化は無理といわれている。相談の専門家として教員に対する助言機能は果たしても、子どもの学校適応に果たす意味はどうだろうか。

かつての日本には、子どもが外から帰るといつも家で針仕事をしながら子どもを待っている母親の姿があった。その存在が、子どもの情緒的な安定や日々の小さな心の傷からの回復にどれほど大きな役割を果たしていたか、今になると思い当たる気がする。友だちとけ

んかして泣きながら帰ってきた子どもが、母親のそばで5分も過ぐすとまた外に遊びに出ようとする。「また行くの？ 少しは家にいたら」と母の呆れたような声が、多くの人の耳の中に残っているに違いない。「今泣いたカラスがもう笑った」は、当時の子どもの心の復元力の強さを示す言葉であろうが、それは家にいていつも自分を待っていてくれる母親の存在に支えられてのことだったのかもしれない。

改めて、母親不在がもたらすもの——

しかし最近、家庭や家族のあり方、親たちのライフスタイルが少しずつ変わり始めている。収入を得るため、おけいこ、ボランティア、自分の楽しみなど理由は様々だが、「家にいない母親」が増えてきており、そうしたこともあってか、精神的に不安定で、友だちと長時間接触する学校に心理的な抵抗を感じる子どもが増えている。最近の不登校等の学校不適応問題の増加は、そうしたことに一因があるのかもしれない。

最近NHK「特報首都圏」で放映された「愛し方がわからない」の番組には、幼児期に自分の母親から虐待されて、それから親になってもまだ抜け出せないでいる母親の姿が映し出されていた。仮に子ども時代に親から不適切な扱いを受けたとしても、もう10年も20年も前のことなのだから、過去のこととして封印し、自分が愛されなかった分までわが子を愛せないものかという感想を抱いた人もあったに違いない。しかしこの番組の中にあった親の姿は、全部が全部とはいえないまでも、子ども時代の安定感を欠いた成長が、後々まで長く尾を引いてしまう不幸なケースがあることを示している。

とすれば、現代の家庭の趨勢である「母親不在」から生まれる子どもの不安定感を補うには、どうすればいいか。子どもにとって家庭の延長線上にある「学校」にも、家庭と同じようにいつもいてくれる「お母さん」が必要な時代になったのではなかろうか。

パートタイムのスクールカウンセラーは「たまに来る人」

文部省は学校不適応問題への解決策として、スクールカウンセラーの配置を急ぐという。しかしパートタイムのスクールカウンセラーでは、それが全中学校に、また仮に全小学校に配置されたとしても、それは相談の専門家であって、子どもにとっては「たまに学校に来る人」でしかない。学校には、子どもがつまりいたときに受けとめてくれる「お母さん」のような存在が必要になってきていることを感じる。

最近聞いた話によると、富山県ではもう数年前前から県独自の措置として教諭対象にカウンセリング研修を実施し、定員枠の中で「カウンセリング指導員」の制度を発足させたそうである。枠の関係で24人以上は配置できないのが残念だというのが、この制度は、スク

ールカウンセラーの配置された学校よりも学校不適応（不登校等）の防止に大きな効果を上げているそうである。

かつて母性原理に支えられていた小学校にも次第に競争原理が導入されるようになって、いわば学校の父性性が強まりつつある。スクールカウンセラーを常勤化するかまたは養護教諭を複数配置して、学校を子どもにとって「母親」のいる場にすることが、これからの学校の課題の1つではなかろうか。

問題はまだ残るが

しかし、仮に養護教諭が複数配置された場合には、新たに＜2人の養護教諭のチームワーク＞という難しい問題も生まれそうである。日本人は連携が苦手な国民といわれる。個の確立がされておらず社会性も乏しいことから、チームを組むと、両雄がうまく並び立たない。一方が他方の支配下に入って主従の関係でやっていくか、でなければ対立してしまう。世は連携ばやりだが、よき連携ほど難しいものはない。養護教諭と中学校のスクールカウンセラーや心の教室相談員等の連携も、しばしばで失敗していると聞く。

学校をどの子にとっても安定感の持てる場にするためには、まずそれぞれのクラスを子どもの心の居場所にしようとする努力が必要である。しかし40人もの子どもが暮らす場では、当然その雰囲気や学級文化についていけない子も出てくる。そうした子にとって一時的な逃げ場にもなる保健室の意味は大きく、また、不安定な環境にあって、いわば「学校のお母さん」としての養護教諭の存在の意味も重要性を増している。こうした新たな保健室と養護教諭の役割に対して、行政、学校、親をも含む周囲の大きな理解と支援が必要であろう。

〔調査レポート〕

心のケアワーカーとしての 養護教諭

— 10年後の全国調査 —

東京成徳大学教授	深谷 和子	(第Ⅰ部3章-2)
国立音楽大学教授	斎藤 浩子	(第Ⅱ部)
東京学芸大学講師	及川 研	(まとめと提言)
中央区立京橋築地小学校教諭	岡村 克志	(第Ⅰ部3章-1)
東京学芸大学大学院生	吉野 真弓	(第Ⅰ部1・2章)
東京成徳大学大学院生	鈴木 綾子	(第Ⅰ部4章)



『モノグラフ・小学生ナウ』Vol. 20-3

調査レポート

心のケアワーカーとしての養護教諭
— 10年後の全国調査 —

要 約

● 調査概要

1. **調査テーマ** 心のケアワーカーとしての養護教諭
2. **調査視点** 養護教諭は保健室で、今、どんな役割を果たしているか、また果たそうとしているか。そして、養護教諭に持ちこまれる相談の内容は10年前と比べてどう変わったのか。また、子どもや親の中にある問題点は？
3. **調査項目** 養護教師の一日、子どもが保健室に来る理由、どんな子が保健室に来るか、保健室に来る子の相談内容、ふだん学校にいて感じる事、保健の授業に取り組みたいか、今後の研修希望、保健室登校児への対応、被虐待児に気づいたこと、一般教諭と比較したときの自己イメージ、スクールカウンセラーの配置希望、など。
4. **調査時期** 2000年5月～6月
5. **調査対象** 全国の小学校に勤務する養護教諭
6. **調査方法** 全国の小学校の中から10分の1を無作為に抽出（2,400校）し、用紙を郵送して、養護教諭から直接返送された。
7. **サンプル数** 全国の小学校の養護教諭581名（回収率24.2%）

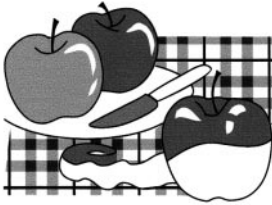
1. 調査概要とサンプルの属性

- ① 全国の小学校を対象に10分の1のランダムサンプリングを行って2,400校を抽出し、学校通して調査票を郵送し581部を回収した。回収率は24.2%、調査時期は2000年5月～6月であった。
- ② 養護教諭の年齢は40代が最も多く（表1-2）、経験年数も21年以上の者が37.4%となっている（表1-3）。
- ③ 学歴は、4年制大学（養護教諭養成課程）卒が約2割である（表1-4）。



2. 保健室の現状と10年の変化

① 学校に着いた時刻は10年前よりやや早く、学校を出た時刻は遅くなっており、学校にいる時間が長くなっている（表2-1、表2-2）。



② 養護教諭に保健関係以外の校務分掌を担当する者が増えており（表2-5）、小規模校ほどその傾向がある（表2-6）。また、「教育相談係」に所属する者は66.2%にも上っている（図2-1）。養護教諭としての経験年数の多い者（24年以上）と、経験年数の少ない者（8年以下）を比較すると、経験年数の多い者では7割の者が「教育相談係」に所属している（表2-7）。ベテランの養護教諭が相談教諭の役割をも果たしていることがわかる。



③ 保健室に来る子どもは、低学年は病気やケガで来る子が多く、高学年では遊びや相談に来る子が多い（表2-9）。

④ 最近の来室児童は身体の弱い子よりも、「何の問題も持たない子」「情緒の不安定な子」「授業に耐えられない子」などが上位を占める（表2-10）。また経験年数の多い養護教諭、大規模校の養護教諭の方が、問題を持つ子と接している（表2-11、表2-12）。

3. 心のケアもする養護教諭

① 養護教諭が子どもから受ける相談は、友だちのことが多いが、10年前と比べると、友だち、先生、家族など人間関係に関して相談される場合が増えている。勉強のことについての相談は少ないし、変化もしていない（表2-13、図2-2）。また大規模校の方がよく相談を受けている（表2-14）。

② 養護教諭は担任や親から子どもの身体や心について相談を受けることがある。担任は子どもの身体や心の両方について相談するが、親は身体のことの方をよく相談している。担任の方が養護教諭を心のケアをする専門家としてみていることがわかる（表2-15）。なお経験年数の多い養護教諭（表2-16）、大規模校の養護教諭（表2-17）の方が担任や親から相談を受けている。大規模校の養護教諭の仕事の厳しさが推察される。

③ 学校にいて養護教諭が感じることはない、「保健室の仕事が多すぎてゆとりがない」「校外での研修の機会がもっとほしい」などが多いが、養護教諭の悩みの数値は10年間でほとんど変化していない（表2-18）。また大規模校では「保健室の仕事が多すぎてゆとりがない」「今の子どもが何を考えているのかわからない」「保健室に来る子が多すぎて1人1人に対応できない」と考える者が多い（表2-19）。

④ 今後の研修希望は、「カウンセリング」が6割と圧倒的に多いほか、「児童心理学」45.3%、「臨床心理学」36.1%（複数回答）と心のケアワーカーとして必要な研修内容が多く、「小児医学」「小児保健」「看護技術」を圧している（表2-28）。

4. 養護教諭の新しい役割 （保健室登校の受け入れと 被虐待児の発見）

① 現在、保健室登校児のいる保健室はサンプル全体の約6%だが（図3-1）、過去に保健室登校児がいたを合わせると44.6%になる。学年別では5年生から急増しており（図3-4）、在室期間は1年以上が約4割、4年以上の長期在室者も7%いる（表3-2）。

② 自由記述によれば、保健室の利用の仕方は多様だが、授業中は教科の学習などカリキュラムを組んで実施したり、自由活動や遊びなどを中心にしたりするなど、子どもの状態で扱いは様々である。休み時間には保健活動の手伝いや、教室に戻ったり、教室をのぞいたり、友だちと話したりなど、学級との交流を図る場合もある。

③ 養護教諭によって、子どもの受け入れを主とした＜カウンセラー的役割を果たそうとしている者＞と、より決まりなどを重視し、教室の環境と近い設定をしている＜一般教諭的な役割を果たそうとしている者＞に分かれるようである。

④ 身体の手当てで来室者があるときは、保健室登校児よりその対応を優先させている。

⑤ 保健室登校児がいる場合、そのケアに追われて、保健活動に支障が出てきているとする者は、「とても・わりと」を合わせると3分の1、「少し」を合わせると全体の7割となる（表3-5）。



⑥ 虐待されている子に気づいた経験のある養護教諭は27.3%に上る（図3-6）。そのきっかけは、身体の傷や衣服などの外見からの発見以外にも、情緒不安定や不自然な言動など、専門家としての目が働いての結果もある。年齢の高い者（表3-7）、研究会に所属している者（表3-8）、担任などとよく接触している者（表3-9）ほどより多く被虐待児を発見している。



⑦ 発見した後の対応は、他の問題同様に、保健室内、学級内、学校内で対応しようとする傾向がみられ、外部機関（児童相談所）への通告などをためらうケースもあり、対応のノウハウが今一つ徹底していないかに思われる。また、「家庭の問題には立ち入れない、親がいちばんの養育者」という認識を持つ者もいるようである。

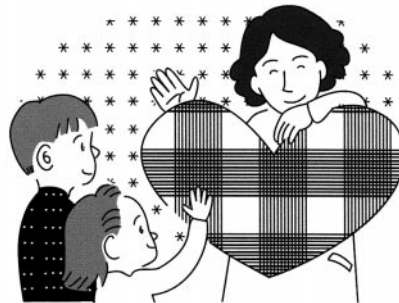
⑧ 親の育児放棄など、いわば虐待傾向の一般化を憂う声もある。

5. 心のケアワーカーとしての養護教諭

① 10年前の調査と比べると、養護教諭の自己評価は高まっている（表4-1）。

② 養護教諭が保健室を教室と違った方針（子どもの受け入れ方に関して）で運営しているかをみると、子どもに与える自由度には幅がある（表4-2）。わりと自由にさせている方針、教室とあまり変わらない方針で接する者は、半々である。教室とくまたくく変わらない扱いをしている教護教諭も6%いて、心のケアをする役割にそれほど関心のない者もみられる。しかしさらに具体的な扱いの内容（注意の厳しさ）をみると、教室のルールを比較的崩していない者が多い（表4-3）。

③ その方針の理由をみると、ここでも＜一般教諭と違う独自のカウンセラー的役割をとろうとしている者＞と、できるだけ＜一般教諭と同じ態度をとろうとする者＞がいることがわかる。



④ 担任との関係は守秘義務を守るより連携が第一で（表 4-4）、その結果担任から不適切な指導をされて困ったことが「ときどきある」者は3分の1もいる（表 4-5）。

⑤ こうした現状から、今、養護教諭の多くはカウンセラー的役割を担おうとしているが、むしろカウンセラーそのものではない。したがって、自分たちと違った役割を持つスクールカウンセラー（相談員）を希望する声は5割に達するが（表 4-6）、スクールカウンセラーの待遇には「非常勤で週何日かの勤務形態」を望み、常勤のスタッフで配置する希望が弱いのはなぜだろうか（図 4-1）。

に来るし、その相談内容も、周囲の人間関係についての悩みの相談が増えるなど、子どもの心のケアワーカーの役割を担うようになってきている。また、とりわけ経験年数の多いベテラン養護教諭は、担任からも子どもの身体ばかりでなく、その心や問題行動についての相談も受けるようになってきている。



6. まとめと提言

① 養護教諭はこの10年間でいっそう（心身にわたる）相談教諭としての性格を強め、校内では他の校務分掌をも担うなど、多忙さを増している。とりわけ大規模校では、多岐にわたる子ども問題への対応を余儀なくされている。保健室に来る子は、低学年では病気やケガの手当てが主だが、高学年になるほど遊びや相談

② また保健室登校のケアや被虐待児の発見と対応など、まだ数はそれほど多くはないが、従来にはなかった新しい役割を担うようになってきている。養護教諭は、いわば「学校のお母さん」の役割を果たしている人々であり、子どもたちが母親を求めて集まってくる。そうした状況の下で、今後さらに子どもの心理やカウンセリングに関する研修を望む養護教諭も多い。



③ しかしそうした役割を積極的に果たそうとする層だけでなく、他方では一般教諭に近い役割を果たそうとするかのような層もあり、カウンセラー的役割への志向は様々である。

④ いじめ自殺をきっかけに、文部省は1995年から中学校にスクールカウンセラー事業をスタートさせ、1998年からは心の教室相談員の配置も始まった。しかし自由記述の分析から現在養護教諭が果たしている心のケアワーカーとしての仕事をみると、パートタイム勤務者で果たせる役割もあるが、常勤で教諭資格を持つ心のケアワーカーの配置が必須であることを痛感する。とりわけ大規模校では様々な問題を抱える子が多い。現行のスクールカウンセラーは、いわば病院に働くサイコロジストを想定して養成された臨床心理士資格の所有者で占められているが、学校の子どもをめぐる問題解決の技法により精通した、スクールサイコロジストが、これからの学校には必要ではないか。それらは子どもにとっての「学校のお母さん」の役割を期待される存在であり、いつも校内にいる養護教諭の複数配置の形、または常勤のサイコロジストとの組み合わせがふさわしいかに思われる。

⑤ 以上の結果をふまえながら、最後に本来の役割の他に、「学校のお母さん」としても重要な役割を果たしはじめている養護教諭を支援するために、いくつかの提言を試みた。

- 1) 保護者の養育責任の自覚をうながす手だてがほしい
- 2) 保健室登校児の支援のための校内の連携と協力体制を一層強化してほしい
- 3) 養護教諭により研修機会を設けてほしい
- 4) 中規模校以上の全ての学校に、2人の(常勤)養護教諭の制度の実現を望みたい

前回の調査でも指摘したが、スクールカウンセラーの配置は別にして、子どもの心身両面にわたるケアスキルを持った力量ある養護教諭の育成と、大規模校を中心にその複数配置の制度の整備こそが今後望まれる方向ではなかろうか。



第Ⅰ部

心のケアワーカーとしての 養護教諭





はじめに

子どもがわからなくなった、見えにくくなったという声を聞く一方で、学校の中で子どもたちの身体ばかりでなく心の状態もいちばんよく知っているのは養護教諭だという管理職の声を聞いたことがある。今、養護教諭は学校でどのように心と身体のケアワーカーの役割を果たしているのだろうか。

われわれは1991年に全国の養護教諭を対象に、養護教諭の置かれている状況や保健室での仕事の内容、仕事上の悩み、養護教諭がこうありたいと考えている役割についての調査を行った（『モノグラフ・小学生ナウ』

vol.11－9「養護教諭」1991）。そして今回、再び同様の全国調査を行って、保健室の現状の10年間の変化を追うと共に、保健室が新しく担うようになった「保健室登校」について、その実態や養護教諭が果たしている役割、また新たに社会問題化している「児童虐待」の発見の役割などを明らかにすることとした。この調査によって、心のケアワーカーとして、現在養護教諭が果たしている役割と意義を検証し、今後の課題を見いだしたいと考えた。

1

方法とサンプルの属性



●方法)))

今回の調査も前回同様に、全国の小学校を対象に10分の1のランダムサンプリングを行って2,400校を抽出し、学校に調査用紙を郵送した。養護教諭から直接、郵送で調査票

を回収した。回収された部数は581部、回収率は24.2%。調査時期は2000年5月から6月にかけてである。

●サンプルの属性)))

以下、1991年調査と比較するために、適宜両調査のサンプルの属性を比較していく。

まず**表1-1**はサンプルの勤務する小学校の規模で、平均児童数は268.4人、教員数18.2人。調査対象となった養護教諭の年齢(**表1-2**)は、10年前と比べてやや高くなっている。最も多かった年齢層が10年前は30代(41.3%)であったが、今回は40代が最も多い(33.9%)。平均年齢の上昇は、経験年数(**表1-3**)にもあらわれている。

1991年調査では21年以上が19.6%だったが今回は37.4%と、ベテランが増えている。

サンプルの学歴(**表1-4**)は、10年前は4年制大学(養護教諭養成課程)卒が12.5%、今回は20.1%に増えている。養護教諭が身体のケアと心のケアにかかわる専門職として資質の向上が求められている現在、この数値は今後もっと上がっていくことが期待される。また、看護婦免許の所有率は27.4%(**表1-5**)であった。

表1-1 学校規模

	平均
児童数	268.4
教員数	18.2

(人)

表1-2 養護教諭の年齢(1991年との比較)

	20代	30代	40代	50代	N.A
1991年	31.9	41.3	17.3	7.7	1.8
2000年	21.0	31.7	33.9	11.9	1.5

(%)

表1-3 経験年数(1991年との比較)

	1年	2～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年以上
1991年	3.9	6.7	25.6	44.2	15.4	4.2
2000年	3.2	4.7	21.8	32.9	32.3	5.1

(%)

2000年：平均16.6年目

養護教諭の仕事が学校規模に影響されると予想されるため、学校の規模を表1-6に示したように、3分割した。教員数25人以上の学校を大規模校、教員数11人以下の学校

を小規模校、その中間を中規模校とした。また養護教諭の経験年数でも、表1-7のような3分割を行った。

表1-4 学歴（1991年との比較）

(%)

	短大、専門学校の 養護教諭養成課程	4年制大学の 養護教諭養成課程	看護学校卒業後、 養護教諭養成課程	その他
1991年	52.1	12.5	27.1	8.3
2000年	50.6	20.1	22.9	6.4

表1-5 看護婦免許の有無

(%)

ある	ない
27.4	72.6

表1-6 学校規模の設定

(%)

	教 員 数			
	11人以下	12～15人	16～24人	25人以上
割合	24.2	23.6	26.7	25.5
学校規模	小規模校	中規模校		大規模校

表1-7 経験年数の設定

(%)

	経 験 年 数			
	8年以下	9～16年	17～23年	24年以上
割合	24.0	24.9	24.9	26.2
経験	経験少	――		経験多

2

養護教諭の日常－10年前との比較



●養護教諭の日常)))

1) 出勤と退勤

不登校をはじめ子どもの問題行動が多発している中で、家庭や学校での子どもの心のケアの必要性が増してきており、養護教諭の果たす役割への期待も大きくなってきている。そうした中で、養護教諭の日常は10年前と比較して変化しているか。

養護教諭の日常をみるために、10年前と同様に「昨日の一日」を尋ねてみた。まず学校に着いた時刻だが、10年前は8時前の出勤が53.4%、今回は63.5%と、出勤が早くなって

いる（表2-1）。また学校を出た時刻は、10年前は夕方6時以降が16.5%、今回は25.1%と遅くなり（表2-2）、学校にいる時間が長くなっている。表2-3は「学校の仕事を家に持ち帰ってするか」の結果だが、10年前より仕事を家に持ち帰ることがやや少なくなっている。しかし表2-4にみられるように、大規模校の養護教諭は仕事を家に持ち帰ってする割合が高い。学校規模が拡大するにしたい、養護教諭が負担する仕事が大きくなっていくのであろう。なお経験年数による差はみられなかった。

表２－１ 学校に着いた時刻（1991年との比較）

(%)

	～7:30	7:31～7:45	7:46～8:00	8:01～8:15	8:16～
1991年	5.0	12.4	36.0	30.2	16.4
2000年	4.7	12.5	46.3	27.9	8.6

表２－２ 学校を出た時刻（1991年との比較）

(%)

	～16:00	16:01～16:30	16:31～17:00	17:01～17:30	17:31～18:00	18:01～18:30	18:31～
1991年	4.7	7.5	19.3	31.9	20.1	8.4	8.1
2000年	4.0	3.5	13.2	32.8	21.4	11.7	13.4

表２－３ 学校の仕事を家に持ち帰ってするか（1991年との比較）

(%)

	よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない
1991年	16.4	30.3	39.9	13.4
2000年	12.8	30.4	34.6	22.2

表２－４ 学校の仕事を家に持ち帰ってするか × 学校規模

(%)

	よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない
小規模校	7.5	23.1	36.6	32.8
中規模校	11.8	31.2	36.9	20.1
大規模校	19.1	34.8	29.1	17.0

**

** p<0.01

2) 他の校務分掌

養護教諭の仕事は、保健室の管理運営にはじまり、定期健康診断の実施、学校の保健活動や相談活動など多岐にわたる。その上に学校では、保健関係以外の校務分掌も担当している。表2-5によれば、他の校務分掌の担当は、10年前には58.4%だったが、今回は75.7%と増えている。保健関係以外の校務分掌からも、養護教諭の負担が増えている様子がわかる。表2-6をみると、それらは小規模

校での方が多い。小規模校では93.3%が担当している。

また養護教諭は身体のケアだけでなく、子どもたちの様々な相談にもものっており、相談教諭の役割も果たしていると考えられる。教育相談係にも全体の66.2%が所属している(図2-1)。これは経験年数と関連していて、表2-7をみると、経験多群では70.1%、経験少群では55.4%となっている。学校で養護教諭が、教育相談などもするカウンセラー的な役割を期待されていることがわかる。

表2-5 保健関係以外の校務分掌を担当しているか (1991年との比較)
(%)

	はい	いいえ
1991年	58.4	41.6
2000年	75.7	24.3

表2-6 保健関係以外の校務分掌を担当しているか × 学校規模
(%)

	はい	いいえ
小規模校	93.3	6.7
中規模校	77.0	23.0
大規模校	57.9	42.1

*** p<0.001

図2-1 教育相談係に所属しているか
(%)

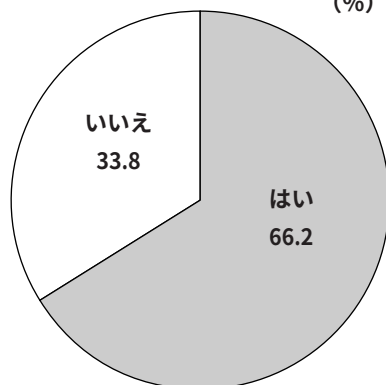


表2-7 教育相談係に所属しているか × 経験年数
(%)

	はい	いいえ
経験少	55.4	44.6
経験多	70.1	29.9

*

* p<0.05

*はt検定の結果を表す。t検定とは、標本の母集団分布が正規型であることを前提として、2つの平均値の間に有意な差があるかどうかの検定。ふつうは $p < 0.05$ 以下の場合に有意差があるとみなし、 p (数値)が小さければ小さいほど有意となる。

●保健室に来る子ども)))

1) 全体の利用状況

最近の保健室には、身体の手当てを受ける以外に様々な目的で子どもたちが来室すると聞く。ここでも「昨日はどうだったか」という聞き方で、できるだけ実態に近い数字を拾い上げ、10年前との比較を行った。

表2-8で「昨日保健室に来た子どもの数と理由」を10年前と比較してみると、保健室を利用した子どもの数は大差がない。1校当たり前は30人、今回26.4人だが、児童数の減

少（学校の小規模化）も考え合わせると、利用者の減少とはいえないであろう。病気でも、ケガでもない「その他の理由」で来室した子どもが増えている。

次に表2-9をみると、病気やケガなどで来室する子は低学年が多く（65.6％）、遊びや相談で来室する子は高学年に多い（58.7％）ことがわかる。高学年になるにつれて心や身体の悩みが増え、話し相手や相談相手を求めて、または教室からの逃げ場を求めて保健室を利用する子が増えている。

表2-8 保健室への来室理由（平均人数）（1991年との比較）

(人)

	1991年	2000年
病気で	4.5	3.5
ケガで	6.6	7.5
遊びやただの話だけで	8.2	8.2
相談で	—	0.8
その他	9.9	14.4
合計	30.0	26.4

表2-9 保健室に来る理由 × 学年

(%)

	低学年	中学年	高学年
病気やケガ	65.6	22.0	12.4
よく遊びや相談に来る	17.6	23.7	58.7

2) 何の問題も持たない子が 利用する保健室

よくいわれることだが、子どもにとっての養護教諭は、先生ではあるが成績をつけない先生である。保健室はそうした意味で、評価や競争に疲れた子どもにとって緊急避難の場にもなりうる。この点を来室理由からみてみ

よう。

表2-10は身体の問題を持つ子以外に、どんな子が保健室に来るかをみたものである。「たくさん・少し来る」を合わせた数値をみると、特定の問題を持つ子より「何の問題も持たない子」「情緒の不安定な子」「授業に耐えられない子」が5割を超えている。

「身体の弱い子(虚弱な子)」「不登校傾向

表2-10 保健室にはケガや病気以外にどんな子が来るか

(%)

	たくさん 来る	少し 来る	あまり 来ない	ほとんど 来たことがない
1. 何の問題も持たない子	32.2	38.6	14.4	14.8
2. 情緒の不安定な子	19.9	52.4	11.0	16.7
3. 授業に耐えられない子	13.5	42.7	15.1	28.7
4. 身体の弱い子(虚弱な子)	13.2	51.1	15.0	20.7
5. 不登校傾向のある子	8.6	40.8	18.6	32.0
6. 学習障害・注意欠陥多動性障害の子	7.3	24.6	22.9	45.2
7. キレやすい子	4.2	29.1	30.0	36.7
8. いじめにあっている子	3.3	38.2	27.4	31.1
9. 非行化傾向のある子	2.9	21.0	23.0	53.1
10. 親から虐待されている子	1.0	13.6	15.2	70.2

のある子」「いじめにあっている子」の割合も多い。「学習障害・注意欠陥多動性障害の子」「キレやすい子」「非行化傾向のある子」「親から虐待されている子」なども無視できない割合である。

また表2-11は経験年数との関連で、「たくさん・少し来る」の数値でみると、経験年数24年以上の者は経験年数の少ない者より、

「情緒の不安定な子」「授業に耐えられない子」「身体の弱い子(虚弱な子)」「不登校傾向のある子」「学習障害・注意欠陥多動性障害の子」「キレやすい子」のいずれでも、数値が高い。ベテランの方が子どもを注意深くみているのか、または、ベテランの下にそうした子どもがより多く集まってくるのだろうか。

表2-11 保健室にはケガや病気以外にどんな子が来るか × 経験年数

(%)

		たくさん来る	少し来る	あまり来ない	ほとんど来たことがない	
1. 何の問題も持たない子	経験少	40.6	37.6	11.3	10.5	*
	経験多	23.1	40.4	16.4	20.1	
2. 情緒の不安定な子	経験少	21.5	37.8	14.8	25.9	*
	経験多	19.9	56.0	9.9	14.2	
3. 授業に耐えられない子	経験少	11.8	36.0	10.3	41.9	**
	経験多	12.1	51.7	12.1	24.1	
4. 身体の弱い子(虚弱な子)	経験少	14.0	41.9	14.7	29.4	*
	経験多	10.9	62.1	10.2	16.8	
5. 不登校傾向のある子	経験少	4.5	31.8	18.2	45.5	**
	経験多	10.9	43.9	17.5	27.7	
6. 学習障害・注意欠陥多動性障害の子	経験少	6.8	15.2	16.7	61.3	**
	経験多	7.2	28.1	29.5	35.2	
7. キレやすい子	経験少	3.0	19.4	29.1	48.5	*
	経験多	4.3	36.7	28.1	30.9	
8. いじめにあっている子	経験少	1.5	30.5	27.5	40.5	
	経験多	4.3	41.4	26.8	27.5	
9. 非行化傾向のある子	経験少	2.3	18.3	19.1	60.3	
	経験多	3.2	24.6	20.6	51.6	
10. 親から虐待されている子	経験少	0.8	11.8	9.4	78.0	
	経験多	1.6	19.0	20.6	58.8	

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

さらに学校の規模との関連を表2-12で見ると、どの項目も小規模校より大規模校の方が「何の問題も持たない子」をはじめ、気がかりな子どもたちが多く来室していることがわかる。「たくさん・少し来る」を合わせた数値が60%を超えるのは、大規模校で「情緒の不安定な子」「身体の弱い子（虚弱な子）」

「授業に耐えられない子」「何の問題も持たない子」「不登校傾向のある子」などである。

関西など一部のエリアを除いて、養護教諭はふつう学校規模にかかわらず各校に1人の配置であるため、心身両面で多岐にわたる問題をかかえた子どものケアに直面する、大規模校の養護教諭の仕事の厳しさが推察される。

表2-12 保健室にはケガや病気以外にどんな子が来るか × 学校規模

(%)

		たくさん 来る	少し 来る	あまり 来ない	ほとんど 来たことがない	
1. 何の問題も持たない子	小規模校	22.4	37.6	12.8	27.2	**
	中規模校	37.0	41.1	12.1	9.8	
	大規模校	33.3	35.6	18.2	12.9	
2. 情緒の不安定な子	小規模校	6.3	47.6	9.4	36.7	***
	中規模校	21.7	52.6	13.2	12.5	
	大規模校	27.0	58.4	8.8	5.8	
3. 授業に耐えられない子	小規模校	4.7	23.6	13.4	58.3	***
	中規模校	13.4	45.2	15.7	25.7	
	大規模校	22.8	52.2	16.2	8.8	
4. 身体の弱い子(虚弱な子)	小規模校	4.8	36.0	12.8	46.4	***
	中規模校	14.9	53.2	16.7	15.2	
	大規模校	16.3	62.3	13.3	8.1	
5. 不登校傾向のある子	小規模校	0.8	24.8	9.1	65.3	***
	中規模校	10.0	40.9	21.5	27.6	
	大規模校	12.3	55.1	21.0	11.6	
6. 学習障害・注意欠陥多動性障害の子	小規模校	2.4	13.0	12.2	72.4	***
	中規模校	9.1	24.3	24.0	42.6	
	大規模校	7.5	33.6	33.6	25.3	
7. キレやすい子	小規模校	2.4	20.2	16.9	60.5	***
	中規模校	4.5	31.0	31.0	33.5	
	大規模校	4.4	33.3	40.1	22.2	
8. いじめにあっている子	小規模校	1.6	26.8	16.3	55.3	***
	中規模校	3.9	39.1	28.3	28.7	
	大規模校	3.7	45.6	37.5	13.2	
9. 非行化傾向のある子	小規模校	1.7	4.2	12.6	81.5	***
	中規模校	2.8	21.5	23.5	52.2	
	大規模校	4.6	34.7	31.5	29.2	
10. 親から虐待されている子	小規模校	0.0	4.3	2.6	93.1	***
	中規模校	1.6	13.3	16.1	69.0	
	大規模校	0.0	22.4	25.6	52.0	

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

3) 人間関係の相談が増える

こうした子どもの抱える問題の内容は、10年間でどのように変化したか。子どもの悩みの中で代表的な7つの項目について、その内容をみたのが表2-13、図2-2である。

図2-2によれば、相談内容は「友だちのこと」が36.6％から60.2％へ、「先生のこと」が16.7％から42.7％へ、「家族のこと」が9.8％から29.6％へといずれも大きく増加している。この10年間に、各種の人間関係で悩む子どもたちが増えていることがわかる。また「性格のこと」についての相談も13.1％から24.0％へと増加しており、あまり変化がみられなかったのは「勉強のこと」（19.1％から22.7％）だけであった。

と」が16.7％から42.7％へ、「家族のこと」が9.8％から29.6％へといずれも大きく増加している。この10年間に、各種の人間関係で悩む子どもたちが増えていることがわかる。また「性格のこと」についての相談も13.1％から24.0％へと増加しており、あまり変化がみられなかったのは「勉強のこと」（19.1％から22.7％）だけであった。

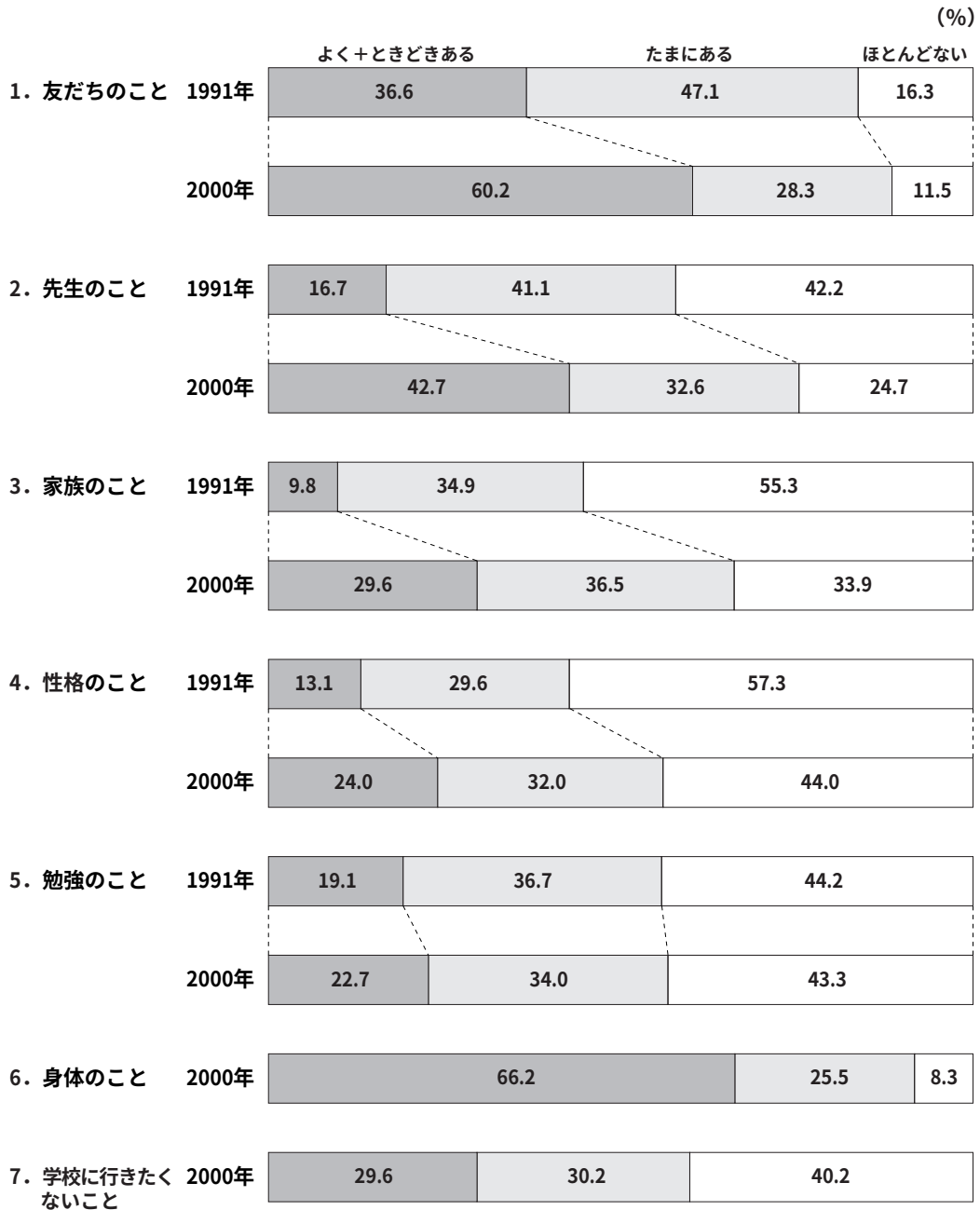
表2-13 子どもの相談内容（1991年との比較）

(%)

		よくある	ときどきある	よく+ときどきある	たまにある	ほとんどない	
1. 友だちのこと	1991年 2000年	7.7 23.1	28.9 37.1	36.6 60.2	47.1 28.3	16.3 11.5	***
2. 先生のこと	1991年 2000年	3.7 14.2	13.0 28.5	16.7 42.7	41.1 32.6	42.2 24.7	***
3. 家族のこと	1991年 2000年	0.8 4.5	9.0 25.1	9.8 29.6	34.9 36.5	55.3 33.9	***
4. 性格のこと	1991年 2000年	1.1 3.3	12.0 20.7	13.1 24.0	29.6 32.0	57.3 44.0	***
5. 勉強のこと	1991年 2000年	3.6 2.5	15.5 20.2	19.1 22.7	36.7 34.0	44.2 43.3	
6. 身体のこと	1991年 2000年	— 28.6	— 37.6	— 66.2	— 25.5	— 8.3	
7. 学校に行きたくないこと	1991年 2000年	— 6.3	— 23.3	— 29.6	— 30.2	— 40.2	

*** P<0.001

図２－２ 子どもの相談内容（1991年との比較）



4) 学校規模との関連

表2-14は子どもの相談内容を学校の規模別にみたものだが、「よく・ときどきある」と答えている割合は小規模校より中規模校や大規模校の方が高く、大規模校の方が小規模

校より、相談を受けている養護教諭が多いことがわかる。学校規模が大きい方が相談件数が多くなるのは、児童数の問題以外に大規模校は大都市部にあり、そうした大都市環境で家庭崩壊などの状況が進んで、子どもの成長環境に問題が生じていることも推察される。

表2-14 子どもの相談内容 × 学校規模

(%)

		よくある	ときどきある	よく+ときどきある	たまにある	ほとんどない	
1. 友だちのこと	小規模校	16.0	28.2	44.2	31.4	24.4	***
	中規模校	24.4	38.3	62.7	28.0	9.3	
	大規模校	26.1	42.8	68.9	26.8	4.3	
2. 先生のこと	小規模校	6.2	21.5	27.7	31.5	40.8	***
	中規模校	15.8	30.8	46.6	30.8	22.6	
	大規模校	17.6	30.9	48.5	38.3	13.2	
3. 家族のこと	小規模校	3.8	16.8	20.6	32.1	47.3	**
	中規模校	3.6	26.3	29.9	37.4	32.7	
	大規模校	5.8	29.9	35.7	40.2	24.1	
4. 性格のこと	小規模校	3.1	19.1	22.2	22.9	54.9	
	中規模校	4.0	19.1	23.1	36.1	40.8	
	大規模校	2.2	25.0	27.2	30.9	41.9	
5. 勉強のこと	小規模校	1.5	15.3	16.8	26.0	57.2	*
	中規模校	2.9	22.9	25.8	34.9	39.3	
	大規模校	3.0	20.0	23.0	39.2	37.8	
6. 身体のこと	小規模校	18.2	39.4	57.6	28.0	14.4	*
	中規模校	33.0	36.1	69.1	23.7	7.2	
	大規模校	29.5	37.4	66.9	28.1	5.0	
7. 学校に行きたくないこと	小規模校	1.5	15.4	16.9	20.8	62.3	***
	中規模校	7.6	23.8	31.4	33.2	35.4	
	大規模校	7.4	27.9	35.3	35.3	29.4	

*** P<0.001 ** P<0.01 * P<0.05

●養護教諭を取り巻く状況)))

以上みてきたように、養護教諭を取り巻く状況は、10年前と比べ精神的にも肉体的に厳しいものになっていると推測される。多様な役割が期待されるようになった養護教諭は、今、学校でどのような立場にあるのだろうか。

1) 周囲からの信頼

まず担任や子どもの親たちが、養護教諭という存在をどう評価しているか。表2-15は養護教諭が担任や親から受ける相談の内容である。担任は養護教諭に身体だけでなく心の問題もよく相談しているが、親は身体のことについての相談相手と考えている様子である。

また表2-16はこの点を経験年数で比較したもので、養護教諭歴24年以上の経験を積ん

だベテランは、担任からも親からも、子どもの身体のことだけでなく、心についても相談を受けている。養護教諭に寄せられる信頼の高まりは、やはりその力量（経験年数）に比例することがわかる。

また、表2-17はこれを学校規模別にみたもので、大規模校の方が小規模校より子どもの心も身体の問題にも、担任からより多く相談を受けている。

以上のように、養護教諭が親よりも同僚である担任から、心のケアをする専門家とみられている様子がわかる。10年前よりも、担任が養護教諭を頼りにしている姿が、ここからみえてくる。

表2-15 相談を受けるか

(%)

		よくある	ときどきある	ほとんどない
担任から	1. 子どもの身体のことについて	38.8	56.7	4.5
	2. 子どもの心や問題行動について	37.0	54.9	8.1
親から	1. 子どもの身体のことについて	17.5	70.4	12.1
	2. 子どもの心や問題行動について	10.4	57.4	32.2

表2-16 相談を受けるか × 経験年数

(%)

			よくある	ときどきある	ほとんどない	
担任から	1. 子どもの身体のことについて	経験少 経験多	26.5 43.5	62.5 55.1	11.0 1.4	***
	2. 子どもの心や問題行動について	経験少 経験多	26.5 41.5	61.0 52.4	12.5 6.1	*
親から	1. 子どもの身体のことについて	経験少 経験多	10.4 25.9	66.6 65.9	23.0 8.2	***
	2. 子どもの心や問題行動について	経験少 経験多	2.2 20.4	50.4 53.7	47.4 25.9	***

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表2-17 相談を受けるか × 学校規模

(%)

			よくある	ときどきある	ほとんどない	
担任から	1. 子どもの身体のことについて	小規模校	28.4	62.6	9.0	***
		中規模校	38.6	57.4	4.0	
		大規模校	49.3	49.3	1.4	
親から	2. 子どもの心や問題行動について	小規模校	27.6	59.0	13.4	**
		中規模校	35.7	57.1	7.2	
		大規模校	46.4	47.9	5.7	
担任から	1. 子どもの身体のことについて	小規模校	13.5	70.0	16.5	***
		中規模校	15.5	71.9	12.6	
		大規模校	22.9	69.2	7.9	
親から	2. 子どもの心や問題行動について	小規模校	5.3	53.3	41.4	***
		中規模校	8.4	58.1	33.5	
		大規模校	17.1	62.9	20.0	

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

2) 学校でふだん感じていること

表2-18は、養護教諭が学校にいて感じていることを1991年調査と比較したものである。全体としては、兩年度ともほぼ同じような傾向で、「とても・わりと・少しそう思う」を合わせると、7割前後の養護教諭が「保健室の仕事が多すぎてゆとりがない」と感じており、4割以上が「保健室に来る子が多すぎて1人1人に対応できない」と感じている。また、7割以上が「校外での研修の機会がもっとほしい」と答えている。

先の結果にもみられたように、「何の問題も持たない子」をはじめ、まだ問題を起していないものの、様々な悩みを抱えている子どもたちが保健室に来て、養護教諭に話を聞いてもらっている様子がある一方、それを「養護教諭が子どもを甘やかすからだめだ」として快く思わない雰囲気の一部にあるともいわれる。その点を質問したところ、「そう思わない」が7割と多い。しかし、31.4%の養護教諭が「あまり快く思わない」雰囲気が校内にあると感じていることもわかる。

すでにみてきたように、養護教諭の忙しさは学校規模によって異なる。表2-19で「とても・わりと・少しそう思う」を合計した数値でみると、小規模校勤務の養護教諭と大規模校勤務の養護教諭で最も差があるのが、「保健室に来る子が多すぎて1人1人に対応できない」という点で、小規模校では10.5%、中規模校36.9%であるのに対して、大規模校では75.7%と、大規模校は小規模校の実に7.2倍になっている。また、「保健室の仕事が多すぎてゆとりがない」と感じる者も小規模校で40.2%、中規模校で70.4%、大規模校で92.1%となっており、大規模校の養護教諭が小規模校の2.3倍となっている。大規模校の過剰負担がはっきりと出ている。

3) 保健室の外で

養護教諭の保健室内の忙しさがわかったところで、保健室以外での養護教諭が、子どもたちや担任の先生、職員会議などにどうかかわっているかをみよう。

表2-20は、「子どもから話しかけられること」だが、「しょっちゅう・わりと話しかけ

表2-18 ふだん学校にいて感じること（1991年との比較）

		(%)				
		とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 保健室の仕事が多すぎてゆとりがない	1991年	19.9	24.7	27.7	24.8	2.9
	2000年	17.4	26.0	25.4	24.9	6.3
2. 校外での研修の機会がもっとほしい	1991年	17.7	20.4	33.7	25.9	2.3
	2000年	14.6	23.0	37.2	22.4	2.8
3. 今の子どもが何を考えているのかわからない	1991年	1.7	4.7	32.0	52.3	9.3
	2000年	1.6	8.3	36.2	47.2	6.7
4. 保健室に来る子が多すぎて1人1人に対応できない	1991年	7.3	15.0	24.3	38.9	14.5
	2000年	9.0	11.6	20.3	37.1	22.0
5. 保健室に子どもがおしゃべりなどに来るのを快く思わない雰囲気が校内にある	1991年	—	—	—	—	—
	2000年	1.9	8.0	21.5	41.1	27.5

られる」を合わせると8割強となって、養護教諭は子どもから親しまれ、保健室外でもよきかわりあいを持たれている様子がみられる。

表2-21は、保健室内で子どもから得た情

報を担当に伝えるかどうかであるが、「小さなことでも伝える」と答えた割合は小規模校や中規模校より大規模校の方が低く、大規模校より小規模校の方が担任とのつながりが大きいことがわかる。

表2-19 ふだん学校にいて感じる事 × 学校規模

		(%)				
		とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 保健室の仕事が多すぎてゆとりがない	小規模校	6.1	11.4	22.7	44.6	15.2
	中規模校	14.1	25.3	31.0	24.5	5.1
	大規模校	35.3	41.7	15.1	7.9	0.0
2. 校外での研修の機会がもっとほしい	小規模校	12.8	21.8	36.8	24.8	3.8
	中規模校	17.0	20.2	41.5	18.8	2.5
	大規模校	12.3	26.1	31.9	28.3	1.4
3. 今の子どもが何を考えているのかわからない	小規模校	0.7	3.0	31.3	55.3	9.7
	中規模校	1.4	8.3	37.8	46.4	6.1
	大規模校	2.9	12.9	40.4	38.8	5.0
4. 保健室に来る子が多すぎて1人1人に対応できない	小規模校	1.5	3.0	6.0	40.6	48.9
	中規模校	5.8	10.1	21.0	44.3	18.8
	大規模校	23.6	20.7	31.4	21.4	2.9
5. 保健室に子どもがおしゃべりなどに来るのを快く思わない雰囲気校内にある	小規模校	1.5	6.0	10.4	43.3	38.8
	中規模校	2.2	9.7	23.0	42.8	22.3
	大規模校	2.2	5.8	26.6	37.3	28.1

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

表2-20 子どもから話しかけられることがあるか

(%)				
しょっちゅう 話しかけられる	わりと 話しかけられる	あまり 話しかけられない	ほとんど 話しかけられない	まったく 話しかけられない
25.2	61.6	11.4	1.6	0.2

表2-21 子どもからの情報を担任に伝えるか × 学校規模

(%)				
	小さなことでも 伝える	参考になりそうな ことだけ伝える	なるべく 伝えない	まったく 伝えない
小規模校	39.4	60.6	0.0	0.0
中規模校	39.7	59.6	0.7	0.0
大規模校	29.5	69.8	0.7	0.0

また、保健室を出て、校内での養護教諭の活躍や立場はどうか。職員会議での養護教諭の発言状況を表2-22でみると、「あなたは職員会議などで、職務以外でもよく発言する方か」に、「よく発言する」と答えた者は7.4%にすぎない。「ときどき発言する」を合わせても約半数でしかない。職員会議ではやや蚊帳の外的な状況がみえる。しかし表2-23でみると、経験年数が多い養護教諭は職員室での発言が多く、表2-24では、学校規模

が小さい方が発言が多い。経験が多く力量を持った養護教諭が校内で信頼を勝ち得ている状況と、学校規模が小さくなると養護教諭であろうと担任であろうと、教員の1人として学校運営にかかわりを持たざるを得なくなる状況がみえてくる。

また養護にかかわりの深い教科として「保健の授業に積極的に取り組みたいか」を聞いたのが表2-25である。「積極的に取り組みたい」と答えた者は約2割でしかないが、

表2-22 職員会議で発言するか

(%)

よく発言する	ときどき発言する	あまり発言しない	ほとんど発言しない
7.4	40.5	36.6	15.5

表2-23 職員会議で発言するか × 経験年数

(%)

	よく発言する	ときどき発言する	あまり発言しない	ほとんど発言しない
経験少	2.2	19.0	52.5	26.3
経験多	14.9	51.3	25.0	8.8

*** p<0.001

表2-24 職員会議で発言するか × 学校規模

(%)

	よく発言する	ときどき発言する	あまり発言しない	ほとんど発言しない
小規模校	9.0	47.7	36.6	6.7
中規模校	7.2	38.5	37.8	16.5
大規模校	5.7	37.8	33.6	22.9

** p<0.01

表2-25 保健の授業に積極的に取り組みたいか

(%)

積極的に取り組みたい	できるだけ取り組みたい	あまり取り組みたくない	取り組みたくない
19.7	60.7	16.6	3.0

「できるだけ取り組みたい」と答えた者は約6割と多くが意欲を持っていることがわかる。なお経験年数とこうした意欲とは関連がなかった（表2-26）が、表2-27をみると、大規模校よりも小規模校の養護教諭の方が、積極的に取り組みたい傾向がある。大規模校では来室する子どもの対応に追われて、教科にまでの意欲が起きないのかもしれない。

今後の研修希望は、「カウンセリング」が6割と圧倒的に多いほか、「児童心理学」

45.3%、「臨床心理学」36.1%（複数回答）と心のケアワーカーとして必要な研修内容が多く、「小児医学」「小児保健」「看護技術」を圧している（表2-28）。

以上のような保健室をめぐる状況の推移から、今、養護教諭の周辺にはどんな課題が生まれているのだろうか。それを考察するためにも、次章では最近新たに養護教諭が担うようになった新しい役割をみてみよう。

表2-26 保健の授業に積極的に取り組みたいか × 経験年数

(%)

	積極的に 取り組みたい	できるだけ 取り組みたい	あまり 取り組みたくない	取り組みたくない
経験少	19.1	62.6	15.4	2.9
経験多	18.4	57.1	19.7	4.8

表2-27 保健の授業に積極的に取り組みたいか × 学校規模

(%)

	積極的に 取り組みたい	できるだけ 取り組みたい	あまり 取り組みたくない	取り組みたくない
小規模校	21.6	61.3	13.4	3.7
中規模校	20.3	60.8	16.7	2.2
大規模校	13.0	63.8	19.6	3.6

表2-28 今後の研修希望（1991年との比較）

(%)

	1991年	2000年
1. カウンセリング	60.5	59.9
2. 児童心理学	43.8	45.3
3. 臨床心理学	11.3	36.1
4. 小児医学	32.8	28.7
5. 看護技術	13.6	20.8
6. 小児保健	26.6	20.5

1991年（2つ回答）、2000年（複数回答）

3

保健室の新しい役割



●保健室登校をめぐる)))

不登校の数が年々増加している。1999年度の文部省調査では、年間に30日以上欠席した子どもは小・中学校を合わせて13万208人と前年よりさらに増えている。全国の小・中学校は合わせて35,315校だから、義務教育段階では実に1校当たり3.7人の不登校児がいることになる。このような状況の下で、教室で生活することができず保健室で学校生活を送る子ども（以下、保健室登校児）がますます増えているといわれる。この子どもたちを支える機関としては、各地域の教育センター等の相談室や適応指導学級などがあるものの、子どもにとっていちばん身近な学校の保健室が最も重要な役割を担っていると推察される。

保健室登校児には、「不登校が始まり、保健室ならなんとか行ける子ども」もいれば、

「不登校から復帰し、ようやく保健室登校が可能になった子ども」もいる。保健室で過ごす子どもたちは、「心理的・情緒的不安定」や「学力不振」「体調不良」などの子ども自身の問題以外に、「学校での対人関係」や「家庭内の人間関係」など、「環境への不適応問題」を抱えている子どもも多い。

このように様々な問題を抱える子どもたちにとって、養護教諭が子どもの心身のケアワーカーとしての役割を果たしている様子は前章でみてきた。

この章では、保健室が子どもの問題に近年新たに果たすようになった役割、保健室登校児の現状と養護教諭の対応、および親から虐待されている子の発見に果たしている役割を探ってみたい。

1) 保健室登校児の現状

①その割合

保健室登校児は、今どのくらいの保健室にいるのだろうか。

図3-1によれば、現在、保健室登校児を抱えている養護教諭は全体の約6%である。6%は少ない数字のように思えるが、不登校で保健室にさえ来られない子、また適応指導教室など他機関に通う子どももいることを考えると決して少ないとはいえないであろう。しかし過去に保健室登校児がいたケースを含めると約45%の養護教諭が経験を持っている。この数値を全国的な規模で考えると、事態はかなり深刻であるといえそうである。養

護教諭に心のケアワーカーとしての役割が求められる理由が裏づけられる結果であろう。

また学校規模と保健室登校児とのかかわりをみると、表3-1に示したように関連が顕著である。

表でみると、教員数が11人以下の小規模校では過去と現在を合わせて、保健室登校児は23.8%、中規模校では45.2%、教員数が25人を超える大規模校ではその数字が62.2%となる。大規模校の方が小規模校に比べて保健室登校児の人数が多いのは、児童数との関連以外にも、2章でみた学校規模と問題の内容との関連で明らかにされたように、大都市環境にある大規模校での子どもの成長環境の悪化が推測される。

図3-1 保健室登校児の有無

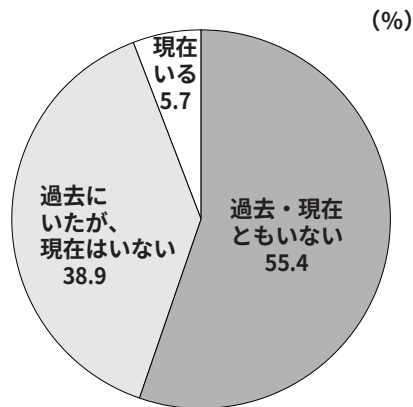


表3-1 保健室登校児の人数 × 学校規模

(%)

	過去にいたが、 現在はいない	現在いる	過去・現在とも いない
小規模校	22.3	1.5	76.2
中規模校	40.7	4.5	54.8
大規模校	48.9	13.3	37.8

図3-2は、現在の保健室登校児の人数だが、養護教諭が現時点で受け入れている保健室登校児の割合は、1人が74.9%、2人が18.8%、3人が6.3%となり、複数の子どもとかがかかわっている養護教諭は25.1%になって、その大変さが推測される。なお保健室登校児の性別は、図3-3にあるように、女子の割合がやや多い。

②思春期での増加

保健室登校児を学年別にみてみよう。図3-4では、3年生の突出を除いて、学年が上がるにつれて保健室登校が増加する傾向にある。中・高学年の変わり目に数値が増えている原因としては、学級編成が影響していることが考えられる。いわゆるクラス替えがあ

り、学級担任も替わる時期である。新しい人間関係や生活環境の変化にうまく適応できない子どもや、今まで無理をして登校していた子どもが進級と学級編成を機に登校できなくなってしまうケースを推測させる。

全体でみると、低学年が9.0%、中学年が27.3%、高学年が63.7%と急増する。高学年の割合が高いのは、低・中学年の子どものようにおとなの力で教室に連れていくような強制的な手段や、なだめたり、言い聞かせたりして説得する手法が通用しなくなっていることも考えられる。また思春期を迎え、心と体の成長・発達のバランスが保たれず、不安や悩みが多くなってくる時期であることも考えられる。これは中学校の不登校生徒の増加につながるものであろう。

図3-2 現在の保健室登校児の人数

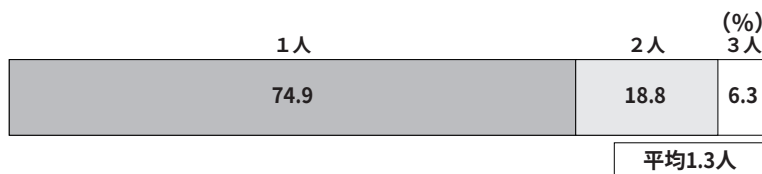
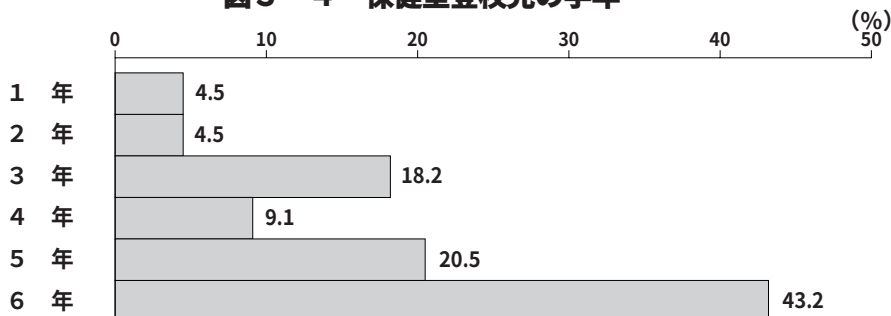


図3-3 保健室登校児の性



図3-4 保健室登校児の学年



③来室状況

次に日数、および平均在室時間についてみてみよう。

表3-2で保健室登校児の在室期間をみると、在室期間の短い子もいるが、1年以上が約4割、長期にわたる子どもでは4年以上が7.0%いる。保健室登校が恒常化したまま、改善のみられないケースがあることを示している。なお1か月以上保健室で過ごした子どもは8割を超える。この子どもたちは、保健室登校をしていなければ「不登校」として扱われることになる。この結果は保健室の新たな役割と重要性を認識させるものであろう。

ここでは保健室登校以外の調査はしていないが、学級に復帰した子ども、他の施設に通っている子ども、あるいは完全不登校に陥っ

てしまった子どもなど、様々なタイプが予想される。それにしても保健室登校が6か月を超える子どもが53.5%であり、平均在室期間が1年5か月であるということから、長期にわたって子どもにかかわらざるを得ない養護教諭の立場と、養護教諭の学校内の役割を改めて見直す必要を示唆するものであろう。

図3-5は、保健室登校児の週の平均来室日数である。毎日（土曜日を含む）保健室登校をする子どもは56.7%で、全体の半数を超える。あとは週2日から4日がほとんどを占めている。

平均来室日数は3.2日であることから、学級に適応できない子どもや不登校傾向にある子どもにとって、保健室は貴重な救いの場になっていることがわかる。

表3-2 保健室登校児の在室期間

(%)						
1か月未満	1～3か月	3～6か月	6か月～1年	1～2年	2～4年	4年以上
14.3	10.7	21.5	14.3	17.9	14.3	7.0

平均在室期間 1年5か月

図3-5 保健室登校児の平均来室日数（週単位）

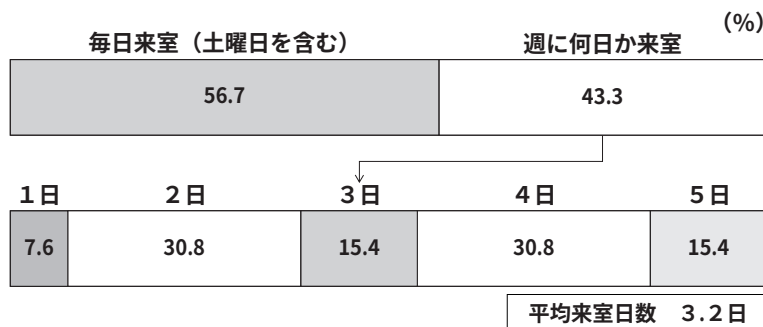


表3-3は1週間単位の平均在室時間である。**表3-4**では、1週間の保健室在室時間を基にして、1日平均の保健室在室時間を算出している。

全体の平均は1週間12時間で、1日2時間の在室時間となる。一般の子どもたちの学校滞在時間を6時間(8:30～14:30)としたときに、保健室登校児の1日の保健室平均在室時間である2時間は、その3分の1にあたることになる。また保健室登校児が始業時から下校時まで保健室にいることは少なく、いたとしても1週間のうちの何日かであり、または半日のケースが多いことは、自由記述からも推測される。

こうした結果から、養護教諭が保健室登校

の影響で日常の保健活動に支障が生じていると感じているかを尋ねたのが、**表3-5**である。「とても・わりとある」は31.4%で、それに「少しある」を加えると70.7%になる。少しでも支障があると感じている、あるいは、実際に支障をきたしている者が全体の7割を超えている。「支障がない」と回答している者は3割である。保健室登校児への学校組織としての対応が充実し、養護教諭が十分にサポートされていることもあるかもしれない。また養護教諭自身の、子どもに対する考え方や接し方の個人差によるものも関係していそうである。いずれにせよ、養護教諭をサポートする学校体制の確立が望まれる結果である。

表3-3 保健室登校児の平均在室時間（週単位）

(%)					
1～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21～25時間	26時間以上
27.6	28.6	19.8	9.6	4.8	9.6
平均在室時間 12時間					

表3-4 1週間の保健室在室時間から算出した1日平均の保健室在室時間

1週間平均	1日平均	割合 (%)
1～5時間	10～50分	27.6
6～10時間	1時間～1時間40分	28.6
11～15時間	1時間50分～2時間30分	19.8
16～20時間	2時間40分～3時間20分	9.6
21～25時間	3時間30分～4時間10分	4.8
26時間以上	4時間20分以上	9.6

表3-5 保健室登校児の対応に追われ、それ以外の保健活動に支障があるか

(%)			
とてもある	わりとある	少しある	ほとんど・まったくない
13.5	17.9	39.3	29.3

2) 養護教諭の自由記述から

前回の1991年調査では、欄外まではみ出すほどの熱心な書き込みが特徴であった。自分たちの声が届かず、あふれる思いを抱えていたのだろう。そのため今回の調査では、自由記述欄を大きく増加させて、保健室の状況に質的に迫ってみた。

①保健室の利用の様子

◆活用の仕方

- ・しばらく保健室で過ごしたら、教室へ行けるようになる
- ・午前中だけ来室して帰宅する
- ・午後から来室する
- ・保健室に母親と一緒にいる
- ・保健室は人の出入りがあるので、母親と放送室に来る
- ・教科（音楽、図工、体育、家庭）によって学級に戻っている

◆教室と違って

- ・保健室での態度とその他の場所での態度（静かでおとなしい）が違う
- ・学習用具以外のものをたくさん持ち込んでくる
- ・保健室の電話を勝手に使うことがある

◆おとなしい

- ・荷物は保健室に置いてあるが、無理をして保健室にいる様子がある
- ・気がなくあまり動かない
- ・何もしないで過ごしている
- ・静かにすわっていることが多い
- ・ベッドに寝たり、椅子にすわっていたりするだけ
- ・ボーっとしている

②保健室で養護教諭は子どもに何をさせているか

1. 授業時間にさせていること

●教科の学習

◆教室と場所を変えた学習

- ・担任が空いているとき（音楽、図工の時間）に保健室で国語と算数を学習している
- ・空いている教員（決まっている教員数名の交替制）と共に国語と算数を学習している
- ・担任の他2名の教員が保健室登校児用のカリキュラムで学習を進めている
- ・空いている教員が交替で、学級の時間割（1日2～3時間）とほぼ同じ学習を担当し学習している
- ・特別な時間割を作成して学習している
- ・担任の依頼により、主にドリルやプリントを使って国語と算数の学習をしている
- ・担任が用意した学習プリントや漢字ドリル、計算ドリルをやっている
- ・担任と相談して課題を決めて実施している
- ・ときどき算数の学習をしているが、今後は、国語や社会の学習も予定している

◆わりと気ままな学習

- ・ドリルを中心に毎日、1時間ほど学習して帰宅する
- ・宿題をやっている
- ・1学年前の学習の復習をしている
- ・今までの算数の復習をしている
- ・漢字の練習をしている
- ・ときどき詩を書いている
- ・短歌や俳句を書いている
- ・図工の作品を作っている

- ・本人がやりたい勉強を持参して学習している
- ・子どもの希望により、ときどき学習することもある
- ・本人の気が向いたときに、一緒にドリルをやったり、リコーダーの練習をしたりする
- ・国語と算数をやることがあるが、本人にその気がない
- ・プリント類を準備しているが、あまりやらない
- ・本人がやる気になったときに、本人がやりたい学習をする

●遊びや自由行動を中心に

◆やや積極的な活動

- ・手伝い（清掃、掲示、保健学習用の教材作成）をしている
- ・校庭の花壇の世話をしている
- ・他の保健室登校児と話をしている

◆気ままな活動

- ・話（雑談）をしている
- ・ブランコや馬跳び、キャッチボールをしている
- ・トランプやカルタをしている
- ・読書をしている
- ・コンピュータで遊んでいる
- ・ワープロを打っている
- ・ビデオを見ている
- ・絵を描いている
- ・折り紙をしている
- ・人形遊びをしている
- ・ゲームを作っている
- ・工作や手芸をしている
- ・掲示や展示できる作品を作っている
- ・自由に好きなことをしている
- ・箱庭を使っている

- ・給食を食べている
- ・外で遊んでいる
- ・外に出て歩き回っている
- ・外に出て1人でボールを使って遊んでいる
- ・小動物（昆虫、爬虫類）をつかまえている

2. 休み時間にしていること

◆クラスや友人とのかかわり

- ・来室者の世話（ケガ治療の手伝い）をしている
- ・学級の友だちと話をしている
- ・学級以外の友だちと話をしている
- ・担任と話したり、学習したりしている
- ・担任以外の教員と話をしている
- ・学級の友だちと遊ぶこともある
- ・主事室や給食室をのぞいている
- ・教室に戻ることもある

◆静かにしている

- ・校庭で遊ぶ他の子どもの様子を眺めている
- ・トイレや屋上など、他の子どもの少ない場所で過ごしている
- ・とくに何かをすることもなく静かにしている
- ・保健室でじっとしている
- ・ベッドで寝ている

3. ここまでのまとめ

●授業時間は学習と自由行動

以上をみると、授業時間には保健室で担任が、音楽や図工などの専科担当の空き時間を使って、主に国語と算数の学習を指導しているケースがみられる。また学校の組織的な取り組みとしては、決まった時間に決められた

教員が学習指導にあたっている事例も多くみられる。これらは保健室登校児が在籍する学級の時間割に準じたものや、保健室登校児のために作成された特別な時間割にしたがって学習が進められている場合もある。

その他、学級担任の依頼で、養護教諭が子どもと一緒に、準備された学習プリントやドリルを使って学習するスタイルもある。それ以外の時間には、子どもの希望や興味・関心に応じた学習をとりいれるなどしている。しかし全体としては、とくに決められた学習が準備されず、子どものやりたい学習に養護教諭がつきあっているという報告が最も多かった。それにしても、学習につきあう養護教諭の負担が想像できる。

また学習以外の活動は多種多様である。遊びやゲームを中心に養護教諭と共に活動する場合もあれば、子どもが単独で活動する場合もある。子どもの希望や自由意志で、好きなことをして気ままに過ごしている様子がみられる。養護教諭の手伝いやコンピュータの活用、工作や手芸などもみられる。

保健室登校児が複数いる場合には、子ども同士でかかわり合っているケースもある。学習以外の活動の大部分は、子どもに任されていることが多いようである。

●休み時間には、クラスとのかかわりも

休み時間には、学級の子どもたちなどとかかわりを持つように養護教諭が取り計らっているケースが目立つ。中にはケガした子どもの手当てを手伝う保健室登校児もいるようだ。

友だちとかかわっている子どもや、教員と接している子どもがいる一方、休み時間になると保健室の利用者が増えるため、他の子どもとの接触を避けて人の少ない場所で過ごしたり、ベッドで寝ていたりする子どももいる。その他、休み時間をきっかけに教室に戻ることができる子どもがいるという報告も1ケースあった。これらの過ごし方は、教室への復帰にどのように影響してくるのだろう。

③保健室内で養護教諭は子どもにどんな配慮をしているか

1. 子どもとのかかわり方

◆とにかく受け入れる

- ・来室したら声をかける
- ・帰りは玄関まで見送り、明日の再会を約束して帰宅させている
- ・スキンシップを図っている
- ・一緒に遊ぶようにしている
- ・話をよく聞くようにしている（聞き役になる）
- ・よき話し相手（相談相手）になれるように心がけている
- ・ふだんから話しかけるようにしている
- ・なるべく一緒にいるようにしている
- ・言い分をしっかりと受けとめるようにしている
- ・悩みの相談に応じられるように心がけている
- ・精神面のケアを心がけている
- ・1日のはじめに、毎日15分程度の会話の時間（話を聞く）を設定している
- ・できるだけ本人の希望（意志の尊重）することができるようにしている
- ・身近な話題をみつけて会話をするようにしている
- ・明るく楽しく、ときには本音でつきあう
- ・笑顔で対応し、楽しく過ごせるようにしている
- ・つきあっているという意識を持つようにしている
- ・子どもの緊張を和らげ、気持ちを楽にして過ごせるように考えている
- ・できるだけ自然な感じで接するように気をつけている
- ・その子どもの性格や傾向を把握して、適切なかかわりができるように努めている
- ・カウンセリングマインドを心がけて、

- 子どもの気持ちに添うようにしている
- 本人の心情を理解して、支援するように努めている
- 内面の理解に努め、何がしたいのかを本人に気づかせるように配慮している

◆成長支援的なかわり

- 自分で考えて決定することができるように、なるべく本人にやりたいことを決めさせている
- 何をしたいのか、何をすべきなのかを自己決定できるようにかかわっている
- 自分で決めたことは、しっかりとやらせるようにしている
- 自分から、「〇〇したい」と言えるようになったので、できる限り一緒に取り組むようにしている
- 自分でできるようになったら、1人でやらせている
- 1日の生活のスケジュールを立てさせている
- 交換日記をして、自分の気持ちを書き表すようにさせている
- 1日のできごとを記録させて、自己を振り返り、今後のことを考えることができるように支援している
- 動植物の世話を一緒にして、それが続けられるようにし、自分もできるといふ思いを持たせたい
- 自分のよさを知ったり、自信を持たせたりする接し方をするようにしている
- 保健委員会の仕事をすることで、皆の役に立っていることを実感させ、自信を高めるようにしている
- やりたいことを思いきりやらせて、充実感を味わえるようにしている
- 学習面は教員に頼んで、養護教諭としては、本人が落ち着いて生活できるようにする

◆やや専門的なかわり

- 情緒の安定を図りながら、様子をみて意図的にグループ交流を実施している
- ときどき箱庭や心理テストをして子どもの内面を理解する手がかりを探っている
- 場面緘黙の子どものため、行動を観察しながら、ゆったりとかかわろうと思っている
- 場面緘黙児なので、一方的に話しかけ、目や首をふるサインで対応している
- 情緒が不安定なときは、本人の思い通りにさせて様子をみてかかわっている

2. 学級との関係での配慮

◆学級とのつながりを図る

- ときどき学級的话题を持ちだすようにしている
- 一緒に学級の様子を見に行ったりしている
- 教室に行くように声をかけている
- 学級の気の合う友だちに保健室に来てもらっている
- 本人の気持ちを尊重しながら、友だちとのつながりを持たせるようにしている
- 担任と協力して、学級の子どものかわりが持てる活動を工夫している
- 授業内容や教科によって、教室に行かないことがあるので、そのときにはなるべく教室に行かせるようにしている

3. けじめを大事にする養護教諭も

- 基本的な決まりを守らせるようにしている
- 許せることと、許せないことをはっきりとさせている
- けじめのある行動ができるように、必要に応じて注意する

- ・生活態度がルーズにならないように、計画的に生活させている
- ・自由な時間と学習中のけじめをつけるようにしている
- ・チャイムの合図を守らせたり、授業中に勝手に保健室から出ないことを守らせたりしている
- ・基本的な生活習慣を身につけさせるように指導している
- ・登下校のあいさつをしっかりとさせている
- ・特別扱いをしないようにしている

◆折り合いが難しい

- ・来室者の対応に追われて、十分に対応できないでいる
- ・保健の仕事が多忙で、どちらも中途半端になってしまっている
- ・仕事が多いときは、対応できないことがある
- ・保健室登校児とできるだけ一緒に過ごすようにしているが、日常の仕事と重なり思うようにできないでいる

4. 保健指導をしながら

- ・常に健康状態に注意して、無理のないようにする
- ・身体症状に留意しながら、心情面の安定を図っている
- ・規則正しい生活や栄養の摂取について考えさせている
- ・運動不足にならないように声をかけている
- ・体調について聞いている
- ・体温が上がることがあるので、無理をしないようにさせている

◆悩み

- ・養護教諭が家庭教師と同じようなことがある
- ・養護教諭が保健室登校児のお世話係になっていることがある

◆家庭との連絡も

- ・母親や家族との信頼関係を築くようにしている
- ・母親から話を聞くようにしている
- ・家庭の様子を聞いてみたりしている

5. 保健活動とカウンセラー役割との折り合い

◆保健活動を優先する

- ・来室者があるときには、そちらを優先している
- ・健康診断で忙しいときには、言葉をかけるだけである
- ・一緒に活動できないときには、そのことをはっきりと伝えている
- ・共にいることができないときには、可能な日時を知らせている

6. ここまでのまとめ

●まず受け入れる

「子どもの話をよく聞くこと」「スキンシップを図ること」「明るい雰囲気で接し、リラックスさせること」など、まず子どもを受け入れてやり、情緒の安定や養護教諭との関係作りを主眼においた接し方が多くの場合に配慮されている。いわばカウンセラー的な、「心情を受容すること、楽な気持ちで過ごせるようにすること」が心がけられているが、これはその後の全ての対応の基本ともいえる。また、子どもの自主的な活動を支援し、

自立心を養う成長支援的な働きかけとして、「自己決定する機会を意図的に設定すること」「生活の計画を立てさせ、その成果を振り返らせること」などもみられる。

子どもの気持ちに寄り添い、心情を理解することを心がけ、適切なかかわりを実現することに努めている養護教諭は、カウンセラーと限りなく近い存在であろう。またグループ・カウンセリングの手法を生かした取り組みや、心理テストを活用した実践を展開するなどの専門的な働きかけをしているケースもみられる。

●学級とのつながりをつける

子どもが不登校のどの回復段階にあるかは別として、学級との交流を図って教室へ戻そうとする試みがみられる。

学級へ戻すことをねらいに、学級的话题を出したり、学級へ一緒に行ったりなどの働きかけがみられる。不登校状態が回復する中でどう登校のきっかけを作るかは、回復期のカウンセラーの苦心するところだが、養護教諭もこうしたきっかけ作りや学級との絆の保持に苦心しているようである。「学級のことを話したり、学級の様子を見に行ったりするなど段階を追ってかかわっているケース」や「学級の子どもたちに働きかけて、保健室登校児とかかわる場面を設定しているケース」が報告されている。

保健室登校児の最終目的を「教室への復帰」とすると、無理のない範囲で徐々に教室へ戻れるように促すことは、保健室登校児にかかわる養護教諭が担う重要な役割であろう。

●けじめを大事にする養護教諭も

こうしたカウンセラー的な役割をとる養護教諭の中にも、けじめを守らせる形で、やや担任的な行動の仕方をとる人もいる。むろん回復期の子どもにとって、そうした状況が必要な場合もあるが、一律では教室との温度差がなくなってしまうので、その辺のさじ加減は大事であろう。ある程度の許容範囲の中で、

決まりやけじめなどの基本的なことを守らせる指導を学級生活と同じく行っているという報告もあった。ここでは、教室に近い雰囲気をつくり、カウンセラーというよりも、保健室で担任の役割を果たそうとしている養護教諭の姿がみられる。

子どもの回復過程にそって、なるべく自由に拘束がなく過ごせ、穏やかに生活できる環境を整えること、並びに子どもが自己の感情や態度をコントロールして、学校・学級に適応する力を培うことをねらいとして必要最低限のルールやマナーを身につけさせることの両面のかかわりが大切ではあるものの、現実にはその見極めとバランスの保ち方は難しそうな課題であろう。

●保健指導をしながら

養護教諭本来の職務である、保健室登校児の健康面に留意してかかわっている。また、不安や悩み、心の葛藤から無意識に生じる身体症状の変化に配慮してかかわっている様子もみられる。

●折り合いのつけかた

しかし本来の保健活動の多忙さから、子どもと十分にかかわることができないという反省と、保健室登校児とかかわることの負担についても、多数の記述がみられた。

保健室登校児に対するかかわりと、ケガや病気の手当てを求めて来室する子どもへの対応の折り合いの難しさが指摘されているが、まず保健活動を優先させながら、保健室登校児に配慮をしている様子がうかがえる。また親との接触も図られている。

●保健室登校児の指導・支援のために何が必要か―望まれる連携と協力

保健室登校を効果的に進めるために、どんな連携のシステムや協力体制が担任との間や学校全体で必要か。管理職（校長先生・教頭先生）に望むことも多々みられた。

＊学級担任にしてほしいこと

学級担任に希望することは、子どもに対応する際の基本方針を明確にし、共通の理解を形成した上で、連携を図っていきたいとする声が多かった。また、子どもについての情報の提供を希望する声や、学級の他の子どもたちが保健室登校児に対する理解を深めるための指導や、復帰への受け入れ体制の整備を望む声も多かった。

「保健室での学習の補助はするが、学習指導を行うことは養護教諭の役目ではないのでは」との疑問の声もあった。学級担任への苦情としては、「保健室に任せっきりにせず、子どもに声をかけてほしい」という声もあった。

保健室登校児のよりよい成長を支えるためには、学級担任と養護教諭のチームワークが大切だが、それが難しい現状が少なくないようである。何事によらず適切な連携の苦手な日本人の場合に、この点が最も難しい課題であるかもしれない。

＊学級担任との連携を深めるために

学級担任と養護教諭のコミュニケーションの重要性と望ましい連携のあり方、および子どもの対応に関する教員の意識の変革の必要性が指摘されている。こうした連携を深めるために大切な条件としては、

- ・情報をオープンにすること

- ・学級担任と養護教諭が互いの思いや考えを理解し合うこと
- などがあげられている。

＊学校組織としての取り組みで望むこと

担任以外の教員に、それぞれの学級に保健室登校児がいなくても、保健室登校の現状を把握して、学級担任と養護教諭を助けてほしいという願いがある。これに関連して、学校組織としての取り組みに関して、次のような声があがっている。

＜学級担任と養護教諭のサポートがほしい＞

- ・学級担任の負担を軽減すると共に、養護教諭を助けるシステムの構築を望む
- ・管理職のリーダーシップに期待する

＜問題を持つ子どもへの理解と関心、支援体制を学校全体で＞

- ・校内で情報をオープンにし、共通の認識を形成して、全教員で対応策を講じて取り組むことを望む
- ・子どもの抱える問題を検討する委員会を設置し、保健室登校児を支援する体制の確立を望む

などのように、保健室に対する学校全体のサポートと子どもの問題に関して全校的な協力体制が望まれている。

●虐待を受けている子の発見)))

子どもの虐待に関するニュースが頻繁に報道されている。全国の小・中学校には虐待を受けている子の発見や対応に関する情報として、虐待防止マニュアルなどの冊子が送付されている。子どもの身体に直接ふれる機会を持つ養護教諭は、医師と共に被虐待児の第1発見者になりやすく、虐待問題の発見の鍵を握っている。ここでは、養護教諭が担う新しい役割として、虐待の発見に関する機能と対応を自由記述を交えて探してみる。

1) 虐待に関する相談と発見

①相談された経験

養護教諭がこの数年間で虐待について相談

を受けた件数が表3-6である。平均すると、養護教諭が「子どもから」直接相談を受けた経験は0.2人、「他の親などから」は0.1人と非常に少ない。しかし「担任から」相談された経験は平均で0.6人とやや多くなっており、中には5人もの担任や子どもから虐待に関する相談を受けた者もいる。よくいわれるように、当事者からの相談や訴えという形で虐待が発見されることは少なく、虐待されている不幸な子の発見には第3者からの通報が第1であることが、ここにも現れている。

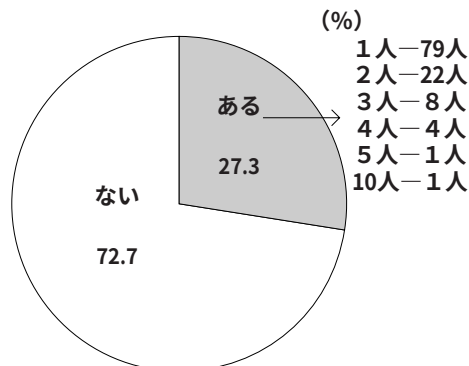
②虐待に気づいた経験

そうした意味で、虐待されている子に養護

表3-6 この数年間に受けた虐待についての相談件数

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	平均
1. 子どもから	288	42	12	2	1	2	0.2
2. 担任から	253	107	32	15	2	2	0.6
3. 他の親などから	295	15	6	1	0	0	0.1

図3-6 被虐待児に気づいたこと・その内訳



教諭が気づいたことがあると答えたのは27.3%、実数に換算すると、527人中144人もの養護教諭であった（図3-6）。

むろん虐待には様々なタイプがあり、身体的な暴力のようにわかりやすいものばかりではない。世話の怠慢や放棄であるネグレクトはまだしも、性的虐待、精神的虐待となると、よほど専門家としての目がなければ発見が難しい。本調査の「気づいた経験」の件数も、おそらくはわかりやすい虐待のタイプであろうが、しかしその数字の1つ1つが胸に迫る。

なお虐待を受けている子に気づきやすい属性を検討してみたのが、表3-7、表3-8、表3-9である。表3-7によれば、養護教諭の年齢が高いほど被虐待児に気づく割合が多くなっているが、むろんこれは子どもと接触した機会の長さによるものであろう。しかしかにかに長期間子どもと接触していても、虐待の知識がなければ、目の前に虐待を受けて

いる子がいても見逃してしまう。専門家としての視線や子どもへの関心、表面的でないかわりが、重要な鍵と考えられる。

この点を示唆するのが表3-8で、養護教諭が研究会に所属しているかどうかとの関係をみている。研究会に所属しているグループと、所属していないグループとの間には有意な差がみられる（ $p < 0.01$ ）。研究会に所属している養護教諭ほど深い知識を持っている専門家であり、被虐待児に気づきやすいと思われる。

また表3-9は、一般教諭との接触の指標として、「1日で会話した先生の人数（あいさつのような簡単なものや会議の討論は除く）」との関連をみている。1日で会話した先生の人数が多いほど、虐待されている子に気づく率が高まっている。保健室の中だけでなく、教室で子どもと毎日顔を合わせる一般教諭からの情報の重要性が示唆されている。

**表3-7 被虐待児に気づいたこと
× 養護教諭の年代**

(%)

	ある	ない
20代	21.6	78.4
30代	23.2	76.8
40代	31.1	68.9
50代	37.9	62.1

**表3-8 被虐待児に気づいたこと
× 研究会への所属**

(%)

	ある	ない
所属している	32.7	67.3
所属していない	22.0	78.0

**表3-9 被虐待児に気づいたこと
× 1日に会話した先生の人数**

(%)

	ある	ない
0～6人	25.1	74.9
7～9人	25.8	74.2
10人以上	29.1	70.9

2) 虐待に気づいたきっかけ —自由記述をもとに

◆身体の傷から

- 30代：体にあざが数か所あったり、頭や顔に大きな傷（あるいは出血している）を見つけた。
- 40代：体重測定時、体に内出血が多くみられる。円形脱毛症がみられた。
- 50代：殴られて鼻血。目のまわりの打撲。タバコでの火傷。本人の話では義父からの性虐待。
- 40代：手の甲の火傷のひどさ。10円玉大の大きさで溝ができていた（実の母親が2回目の父親に、タバコの火を手につけるよう指示し、その父親が実行した）。

別粗末で、不潔にしていたり体の発育も悪かったので、変だと思った。

◆子どもの不自然な態度から

- 40代：ケガの理由をはっきり言わない（言い訳や嘘を重ねる）。隠そうとする。本人が言う理由ではそういう部位にそのようなケガをするはずがないと思う。
- 50代：親に話をするのを嫌がり、親を悪いとは言わずに、自分が悪いからと言っている。
- 40代：手当てをしてほしいと来室した。話をしているうちに涙ぐみ始めたことで、何か心にわだかまりがあるのではと思い話を続けた。だが本人は自分でやっただけと言いつづける。

◆身体の発育の悪さから

- 40代：貧血傾向が強く、体格・成長もよい方ではなく、体重の増加がみられない。朝から眠りたがる（眠そう）。

◆情緒的な不安定さから

- 20代：言葉遣いや友人に対する乱暴な態度。
- 30代：情緒不安定（ときどきヒステリックになる）。おびえた目。相手の目を見て話ができない。すぐに「すみません」とぺこぺこした動作をする。

◆世話をされていない様子から

- 30代：尿検査を持ってこない。親がやってくれない。
- 20代：疾病治療を何度お願いしてもほったらかしている。
- 50代：髪や服装の汚れ。食べていない。元気がなく動かない。季節に合った服装をしていない。目が鋭く暗い。よくキレル。
- 50代：毎日10時頃になると、低血糖のような症状を訴え、朝ご飯を与えられていないことがわかった。
- 50代：きょうだいが3人学校に来ていたが、そのうちの1人だけ身なりが特

◆精神的な症状から

- 30代：チックが出る。吃る。いつもおどおどしている。
- 20代：ケガと家でだけ現れる喘息。

◆親の様子から

- 40代：虐待とはいえないまでも、暴力でしつけられていると感じることがあった。友だちに対してすぐに手が出たり、

足が出たりして、友だちを傷つけることがよくあった。

- 20代：親が病院（ケガをして連れて行ったとき）で、子どもを殴った。「痛くないと言え」と言っていたのを聞いた。
- 50代：親が子どもや家庭のあり方を認められず、自分の気のすむような嘘の言い訳をいうまで子どもを責めるため、子どもは常に嘘の言い訳をいう習慣になっている。親が学校に連絡を取るとき、責任を取りたくないため、子ども本人に電話をかけさせたりするが、子ども本人の気持ちは無視されていることがよくわかる。親も本人も共に心がものすごく傷つきやすく、被害妄想が強い。

3) 発見した後で、どう対応したか

①まず子どもから話を聞く・受け入れる・逃げ方を教える

- 30代：子どもが話せる話を十分に聞き、友だち同士の声かけなどで孤立しないよう配慮しながら、経過観察。何度も十分に時間をかけて、子どもから話を聞く。
- 20代：話をよく聞いてやる。（体を触られるのが好きなので）手をつないだり、スキンシップを多くしている。
- 20代：本人に、「学校が味方になるよ」と安心感を持てるよう声をかけ、接触を図る。
- 30代：子どもに、虐待が起こりそうなときに外に飛び出すことや、電話で助けを求めやすい手法を伝えた。

②その後適切な対応をした例ー児童相談所など外部との連携が必須、校内だけで解決しようとしてはいけない

- 40代：担任、校長、教務等と連携を取り、親をあまり刺激しないよう話し合いをした。児童相談所の人にも間に入ってもらったりした。
- 50代：虐待防止マニュアルにそって、地区の民生委員、児童委員、福祉課（生活保護受給だった）、児童相談所と連携を取り、話し合いをした。
- 40代：校長、担任へ連絡し、福祉課と相談した結果、ケースワーカーが家に入るようになった。
- 30代：少しずつ、子どもより話を聞き、担任に連絡。担任と共に校長へ。校長より民生委員や地区親子会長と連絡。また、校長が出向いて親（父親）と話した。
- 40代：担任、管理職にも実態を説明し、本人と話をする機会を増やし、信頼関係を作って実態をつかんだ。祖母がその家では信頼できるようなので、管理職と共に話す機会を作った。祖母、本人も家を出る決断がつくまでは、学校全体で見守り、最終的には施設に入った（本人が助けを求めてきたので）。
- 50代：すでに児童相談所も動いているので、家庭への働きかけはしなかったが、本人へは、話したいことがあったら来室するよう伝え、「いつでも待っているよ」と口添えした。その件以降、とても親しみを込めた表情をするようになった。卒業後も、ときどき学校帰りに保健室に立ち寄っている。

③まずい対応の例－誤った問題認識から事態を解決できなかった

◆親へ連絡して警戒され、実態がつかめなくなった

- 50代：校内で話題にし、担任から保護者に注意してもらった。保護者はその事実を認めず、子どもに口止めた様子で、その後、子どもはそのことを言わなくなった。今でもときどき同様の症状は起こすが、回数はかなり減少した。現在静観している。

◆誤った理解からのミスジャッジ

- 30代：担任に伝えたが、家庭内のことなのであまり立ち入れないということで、そのままになってしまった。
- 20代：虐待を発見した場合に通告義務があるが「親と離れて幸せか？」ということを考え、通告はしないでいる。全職員が気づいていることなので、毎日のように話し合っている。とくに担任、校長、教頭、養護教諭は保護者と何度も話をしている。
- 50代：できるだけ担任や教務、教頭、校長と話し合い、関連の資料を全職員に配布して、その子の理解が深まるように務めているが、学校全体としても、私自身としても、無力感でいっぱいである（手の出しようがなく、学校での指導も大変）。

4) まとめ

このようにみえてくると、虐待されている子どもの発見には、養護教諭の専門的で愛情に支えられた注意深い観察力が極めて大きな働きをすることがわかる。また、誤った家庭や親への観念から外部機関と連携をとらず、校内だけで処理しようとするなど、対応への知識が不十分なことも問題の解決を阻んでいることがわかる。虐待を受けている子の増加というゆゆしき事態に、専門家の持つ注意深い目と子どもへの愛情、こうした問題への専門的知識が、心の問題をも扱う養護教諭により強く求められるようになってきている。

またそれ以外の問題として、（現状では典型的な「虐待」とみなされるケースは少ないが）親の育児放棄が広がりつつあることを憂える声があった。

- 50代：お母さんが夜中に2～3時間しかいなくて、食べるものもあまりなくて、朝食は食べてこない、衣服もめちゃくちゃで寒さに震えている子もいた。直接虐待する親は少ないと思うが、育児放棄の親がどんどん増加していると思う。普通の子の多くが親とのスキンシップが少なすぎて（赤ちゃんのとき、まったく抱かないお母さんもいる）、学校で甘えるため、指導の時間の多くを母親・父親役で取られているのが実状である。

狭い意味での虐待ではなく、子どものよりよい成育環境としての親や家庭が整えられるように、社会的支援が必要なことも示唆される。

4

心のケアワーカーとしての養護教諭



これまでの章でわれわれは、養護教諭が保健室登校児の扱いや虐待されている子の発見、またその後の対応にどのようにかかわっているかを数字の上でも、また自由記述という質的なデータからもつぶさにみてきた。

これらのデータが物語るのは、養護教諭がいかに子どもたちの心身両面にわたるケアに心血を注いでいるかの現状であろう。よく知られているように、文部省はいじめ自殺の多発をきっかけに、1995年度から、小中高校へのスクールカウンセラー派遣を始めた。そのため、スクールカウンセラーの配置が少しずつ増加してきており、2001年度からは5か年計画で、3学級以上のすべての中学校に配置される予定と聞く。しかしこの制度は週何日かのパートタイム制で、学校に〈いつもいる人〉ではない。またその大部分は臨床心理士で、サイコクリニックの医師の下で、心理査定やカウンセリングがよりよく果たせるように訓練を受けてきた人々である。学校現場でのスクールカウンセラーの受け入れが難

しいことや、それが必ずしも有効に機能していない現状を学校の排他性に求める声もあるが、それは必ずしも学校の体質の問題ではなさそうである。これまでの自由記述の資料をみると、〈いつも学校にいて〉、身体の手当てや心の手当てをしてくれる〈学校のお母さん〉の役割を、養護教諭が担おうとしている姿が浮かび上がってくる。しかし現在の制度の中で、養護教諭はどの程度までカウンセラーでありえるのか、どこまで先生でなければならないのか、その問題をも明らかにしておくべきであろう。現状では中学校よりは平穏に見える日本の小学校だが、一部の自治体ではスクールカウンセラーや心の教室相談員などを手配している。しかしこの制度を国が全ての小学校に導入すべきなのか、それとも養護教諭の努力や研修ですむ問題なのか。この章ではそうした問題を考えるためにも、養護教諭はカウンセラーか教員かというテーマを追ってみたいと考える。

●養護教諭の自己評価)))

まず表4-1は、10年前と比べて養護教諭の自己評価がどう変化したかをみている。「同じくらいの年齢の担任一般と比較して自分は」とする自己評価は、不等号が示すように、「悩みなどを話しやすい」「子どもにやさしい」の項目では有意にポジティブな自己評

価が増加しており、逆に「人間の幅が狭い」では、それを肯定する割合が減っている。「教育問題への知識が不足している」でもその傾向がみられる。養護教諭が、10年間に次第に専門家として自信をつけてきたことがわかる。

表4-1 一般教諭と比べたときの自己評価（1991年との比較）

(%)

		とても+どちらか といえばそう	どちらとも いえない	どちらかといえば +まったく違う
1. 悩みなどを話しやすい	1991年	59.1	37.1	3.8
	2000年	△ 66.0	30.1	3.9
2. 子どもにやさしい	1991年	56.2	38.4	5.4
	2000年	△ 63.8	30.2	6.0
3. 子どもから人気がある	1991年	40.2	55.6	4.2
	2000年	41.5	53.4	5.1
4. 教育問題への知識が 不足している	1991年	42.2	43.0	14.8
	2000年	▽ 39.9	42.4	17.7
5. 人間の幅が狭い	1991年	26.8	49.2	24.0
	2000年	▽ 21.3	51.1	27.6

●子どもの逸脱行動への許容度)))

保健室がカウンセリングルームや相談室の性格を持った場なら、その風土は教室とかなり違ったものになっていなければならない。中学校に例をとると、保健室はそこにいる養護教諭の運営姿勢によって、極めてオープンで生徒があふれんばかりに集まってくる保健室から、人の出入りが少なく、平常は鍵をかけて無人に近い保健室まで差が大きいといわれる。また養護教諭の下に生徒が集まると、「甘やかすから」と冷たい視線を他の教員から浴びることもあるという報告もある。本調査でこの点を聞いてみると、すでに2章でみてきたように(p.30表2-18)、「ぜんぜんそう思わない」という全面否定は27.5%にすぎず、校内全体ではなくても一部の教員、またはかなりの教員からそうした視線を感じる様子がみられる。

では養護教諭はどの程度カウンセラーとして行動しているのか、しようとしているのかをみてみよう。表4-2は「教室なら注意すべき行為も、養護教諭だから注意しないで自由にさせていることがあるか」と、子どもの行動の許容度をみたものである。カウンセラーは担任とは違った役割を果たす人々であるから、比較的「自由にさせている」と答えるであろう。しかし結果は「まったく自由にさせている」者はほとんどいないが、「わりと自由にさせている」が49.1%で、許容度は決して高くない。逆に「教室とあまり変わらない扱いをしている」が44.5%、「教室とまったく同じ扱いをしている」が6.0%で、カウンセラーであろうとしている者と一般教諭であろうとしている者が半々という感じである。

表4-2 養護教諭だから注意せず自由にさせていること

(%)

まったく自由にさせている	わりと自由にさせている	教室とあまり変わらない扱いをしている	教室とまったく同じ扱いをしている
0.4	49.1	44.5	6.0

さらに具体的な行為をあげて、「どの程度注意するか」を表4-3でみると、子どもが＜親や担任の悪口＞を言う場合は、「注意しない」が3分の1前後で、逆に「しっかり注意する」と厳しく臨む者は1割から2割い

る。これに対して逸脱性の高い1.～6.の6つの項目では、「しっかり注意する」が7割前後に大きく跳ね上がり、思ったより保健室と教室での温度差は少ないようである。

表4-3 子どもが保健室で次のような話をしたり態度をとったら

(%)

	しっかり 注意する	軽く 注意する	注意しない
1. 「この間友だちとスーパーで万引きした」とあなたに話す	78.0	17.0	5.0
2. 「きのう、友だちとタバコをすった(お酒を飲んだ)」とあなたに話す	73.1	22.6	4.3
3. 仲間をひどくいじめている様子をあなたに話す	65.4	27.8	6.8
4. 保健室にクラスには持ち込んではいけないものを持ってきた	64.7	33.9	1.4
5. 仲間をいじめている様子を保健室に来た友だちと話している	64.3	27.4	8.3
6. 保健室でひどく行儀が悪い	63.2	33.1	3.7
7. 担任の悪口を保健室に来た友だちと盛んに話している	20.4	57.0	22.6
8. 担任のことをあなたにとても悪く言う	14.1	52.2	33.7
9. 親の悪口をあなたに言う	10.7	55.3	34.0

●保健室内で逸脱を許容する・しないについての理由)))

それぞれが保健室内の行動の許容性に関して、自分なりの運営をしている理由を自由記述から拾ってみよう。

1) 保健室内で比較的自由にさせている理由

これには教室や学校のルール適用よりも、＜子どもの行動の奥にあるものを大事にしたい＞など、カウンセラー的な構えを持つ者の姿が浮かび上がる。

①＜保健室は教室と違う場であり、養護教諭は担任と違う役割がある＞とする者である

- ・30代：保健室はリラックスできて、何でも話せる場所にしてあげたい。注意したいことがまんして、後から担任などから注意してもらうようにしている。
- ・40代：保健室は集団ではなく個人を対象に接することが多いので、個人を尊重したルールの守らせ方を配慮する。
- ・50代：担任は父親の役割。目標に向かって努力させる、厳しく注意する、やるべきことはやるなど。養護教諭は母親の役割。まず受け入れてよく聞いてあげる。一方的に注意すると心を開かなくなる。子どもには子どもなりの見方、言い分がある。話してくれる雰囲気があることが大切と思うので、叱るよりほめることで子どもを変えたい。
- ・30代：子どもの行為の内容にもよるが、周りが全員非難していると、その子へのフォローの場がなくなってしまう。
- ・50代：子どもが心の中にためていることなど、誰かに聞いてもらえたら次のステップに移れることがある。また、

教室で精一杯がんばって疲れ切っている子どもが、保健室で自分を出して、バランスを取れることもある。

- ・40代：基本的に保健室には、エネルギーの減退した子どもが来室してくる傾向があるため、そういう子どもにはどちらかというと、安らぎ感を重視する。するとどうしても、教室と同様というわけにはいかないことがある。
- ・50代：教室にいるのが苦痛なとき、教室では想いを伝えられないとき、何気なく来室する子がいるので、受け入れについては自由になっている。
- ・20代：保健室に来室してまで叱られると、行き場を失うかもしれないので。
- ・40代：精神的に元気をなくしている子どもで、さらに落ち込むと判断した場合は、元気になってから注意することがある。問題行動・不登校などが予想されることがあるからである。子どもの行動の背景となるものを見極めずに注意はできない。
- ・20代：保健室は子どもにとっていつも来る場所ではないため、一度傷つけてしまうと取り返すのに時間がかかる。子どもとの関係をいい方に持っていかないと、例えば相談したいことがあっても、話してくれなくなってしまうこともある。頭ごなし、開口一番に注意すると、その行為は陰に入ってしまう。保健室では「集団対先生」ではなく、「個対先生」なので、ある程度何事もその子の個性として認めてあげてもいいと思う。
- ・50代：ほとんどの子どもは愛情不足で、保健室へ来てだだをこねたり、走り回ったり、人の嫌がることをしたり、身

体の不調を訴えたりするので、注意だけでもほとんど効果はなく、ますますひどいことをしたり、何回も保健室に來たりする。ある程度気持ちを聞いたりスキンシップをとって、人間関係ができてからでないと、注意をしても、厳しく言っても、効果はない。

- ・30代：本人の気持ちが落ち着き、冷静に考えることができるきっかけとなる行為であれば、どんな望ましくない行為も、ある程度は認める。その方が後でしっかり話せる。
- ・20代：基本的には1対1で話をしているときは、養護教諭としての姿勢や気持ちをはっきり示すようにしている。集団で話をしているときは、個人の思いは、そのまま現れるとは思えないこともあるので、何をしてもたしなめる程度。

- ・40代：言葉遣いなどについては、その子の状態を表していることなので許していることが多い。
- ・20代：担任や友人の悪口は“しっかり注意する”が、不平や不満の内容は“じっくり話を聞く”。いじめや非行は、はじめはじっくり理由を聞いて、その内容から“注意”でなく話し合う。机に足を上げれば厳しく注意するが、保健室は寝転んだり、うろうろするスペースもあるので、具合の悪い子の邪魔をしない限りは注意しない。
- ・30代：子どもたちもおとなの反応をうかがい、試している面もあるので、次のステップへつなげるために、注意せず経過をみていることが多い。度を越してくると、その行為に関してどう考えるのかを尋ねる（話す）機会を持つよう努力する。

②子どもの行動の背景にあるものを大事にしたい

- ・30代：ふつうなら注意される行動をあえてとる、その子の意識の方を大事にしたいので、まず叱らずに観察してから、どう対応するか考えたい。
- ・40代：時には注意だけではすまされないことがあるので、しっかりと話を聞いたり、こちらの考え・気持ちを伝える。ただし強制はしない。本人がどうするかは本人が決めること。本人の自立を考えている。
- ・30代：表面だけ注意して改善できる内容かどうかを見極めて対処していくようにしている。長いスパンでかかわるかどうかの対応をする。
- ・30代：悪い行動をして気を引こうとする子がときどき来ている。何人かで来ているときは軽く注意し、後で1人1人を呼んでじっくり話を聞いて、それからしっかり注意する。

③情報収集のため

- ・30代：態度や言葉で表現する自由を与え、子どもの内面に近づき理解する。そこで得た情報は職員間で交流させ、指導に生かす。

このようにできるだけ＜カウンセラーであろう＞とする養護教諭がいる一方、むしろ一般教諭に近くありたいと考えている養護教諭もいて、次のように理由づけをしている。

2) 教室とあまり変わらない態度で接している理由

①担任と異なった役割をとると、子どもが混乱する、指導の効果が上がらない

◆役割を超えた行為そのものへの指導

- ・50代：教室ならとか、保健室ならとかいう区別ではなく、「行為」そのものに

ついて校内教師でよく話し合い、共通理解のもとに同様の扱いをしている。特定の子どもについて、担任と養護教諭が違った役割で接すると決めた場合は、扱いが違ってくるときもある。

- ・40代：学校内では、教室・保健室にかかわらず、注意しなければならないことは共通していると思う。教師としては、悪いことへの見てみぬ振りは許されない行為であり、きちんと注意する義務がある。

◆指導の効果を上げるため

- ・40代：校内で指導の偏りがあると子どもは混乱する。指導の方法は人それぞれでよいが、行き着くところは同じであることが大切。

◆同じ歩調をとるべき

- ・30代：教職員が同じ態度で接しなければ、子どもは安きに流れる。担任が注意した内容を養護教諭が許せば、子どもは担任不信となりかねないし、保健室にすれば何でも許されるという考え方は、子どもが教師それぞれに態度を変えることを容認しているように思う。一貫性を持った教職員集団が大切と思う。

②校内で保健室が浮き上がらないように

◆学校内での保健室の立場の難しさ

- ・30代：はじめがないと、担任の先生の保健室への信頼を失うことになる。善悪の判断や指導すべき基準は、学校である程度共通理解が図られるべき。人の顔を見て態度を変える子どもにしたいくない。

- ・30代：学校全体の方針にしたがわなければ、全体の中で保健室だけ浮いてしまう。特別扱いするときは、担任とよく連携する。

◆連携が大事

- ・50代：日常から、担任との話し合いを重視し、人間関係作りをしており、児童の問題行動もいち早くキャッチし、連携プレーで対応している。そのため、教室とあまり変わらない指導ができる。1年生に入学したその日から、子どもとの接触を日々意図的に実施している。そのため、子どもとのかかわりが深まり、こちらが強く言わなければならないことがあっても、素直に受け入れてくれる。

③さらにく来室児が多いと養護の仕事に差し障るから>としている者もいたが、これは保健室を「心のカウンセリングルーム」にすべきでないという立場であろう

◆保健室を「心のカウンセリングルーム」にすべきでない

- ・40代：「わりと自由にさせる」対応を中心にとすると、あまりにも多くの子どもを抱え込み、しいては執務や子どもに対して支障をきたすため。
- ・30代：憩いの場、心の休養として今保健室は注目を浴びているが、人間は一生そんな場所を与えられているわけではない。ある程度までの担任の悪口なら許せるが、集団でのいじめなどの会話などは、いくらその子自身に悩みがあっても許してはいけない。

このように保健室内部の環境は、学校によって、すなわち養護教諭の運営方針によって様々なようである。

●守秘義務とのかかわり)))

こうした両極の養護教諭の構えを、守秘義務の観点からみしてみる。もしカウンセラー的役割を養護教諭が果たそうとすれば、そこで子どもから得た個人的な情報をどう扱うか。守秘義務に忠実か、担任との連携を大事にするかの問題が発生してくる。**表4-4**をみると、子どもから得た情報は担任に「小さなことでも伝える」が36.5%、「参考になりそうなことだけ伝える」が62.8%となっている。担任と養護教諭の場合、守秘義務の観念はあまり介在しないようである。この点からも養護教諭は、カウンセラー的役割を果たしている、カウンセラーそのものではないことがわかる。

このように、いわば守秘義務より担任との連携を選んだ結果、**表4-5**に掲げたように、

「子どもからの情報を担任に伝えた結果、適切でない指導、対応をされて困ったことがあるか」には、3分の1が「よく・ときどきある」としている。連携の失敗である。

このように、多くの養護教諭はカウンセラー的役割を果たそうとしているものの、必ずしも十分にはそれが果たせない状況にある。養護教諭に十分なサポート体制が組まれていないからであろう。

表4-6にみるように「今後学校にスクールカウンセラーの配置を希望するか」の問いには、「ぜひ希望する」が2割、「まあ希望する」を合わせると、半数がスクールカウンセラーの配置の希望を持っている。サポートシステムの不備ともつながる結果であろう。

表4-4 子どもからの情報を担任に伝えるか (%)

小さなことでも伝える	参考になりそうなことだけ伝える	なるべく伝えない	まったく伝えない
36.5	62.8	0.7	0.0

表4-5 子どもからの情報を担任に伝えて困ったこと (%)

よくある	ときどきある	あまりない	1度もない
2.1	31.1	53.3	13.5

表4-6 スクールカウンセラーの配置を希望するか

ぜひ希望する	まあ希望する	どちらでもいい	あまり希望しない	まったく希望しない
20.2	29.3	26.7	16.2	7.6
49.5			23.8	

●スクールカウンセラーの配置の希望)))

現在は主として中学校への配置であるが、スクールカウンセラーは文部省から委託を受けて（児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識・経験を有する）、臨床心理士、大学教員、医師などがパートタイムで（2000年度は全国の公立中学校11,209校全体の10％）勤務している。またその予算的な不足を補うべく「心の教室相談員、さわやか相談員、スクールライフカウンセラー」など各種の名称で、地方自治体が公立中学校に、お兄さんお姉さんのような教育相談員を週2、3日の配置でスタートさせている場合もある。

こうした職種の配置を望むか、望まないかについて、次にみていく。

1) スクールカウンセラーは必要か

先の表4-6「スクールカウンセラーの配置を望むか」をみると、配置を「希望する」者が半数、「どちらでもいい」が26.7％、「希望しない」者は23.8％で、思ったより気乗り薄の印象も受ける。さらに、表は省略したが、経験年数5年目までの養護教諭は、「希望しない」「どちらでもいい」に傾いている。

次に、学校規模との関係では（表4-7）、大規模校の養護教諭ほど希望が高くなっている。教員数11人以下（小規模校）の養護教諭グループと25人以上（大規模校）の養護教諭グループとの間には非常に大きな差がみられる（ $p<0.001$ ）。学校規模が大きくなるにし

表4-7 スクールカウンセラーの配置を希望するか × 学校規模

(%)

	ぜひ希望する	まあ希望する	どちらでもいい	あまり希望しない	まったく希望しない
小規模校	13.3	18.8	28.1	20.3	19.5
	32.1			39.8	
中規模校	17.2	33.5	27.4	16.8	5.1
	50.7			21.9	
大規模校	32.2	31.4	22.1	11.4	2.9
	63.6			14.3	

たがって、養護教諭の負担が大きくなるためであろう。

経験年数、児童数などの要因とは別に、養護教諭自身の意欲や考え方、行動との関連をみたのが表4-8、表4-9である。

表4-8では、保健の授業（性教育・健康などに関すること）に対する意欲との関連で、保健の授業への意欲が強い養護教諭ほど、配置希望も高くなっている。

また先にみた、保健室での子どもの行動の

許容度との関係では表4-9にみるように、子どもに対して教室と変わらない対応をしている養護教諭ほど配置を希望していない。

学校の一部である保健室で教室と同じ規範にしたがって行動させるべきだという考えを、問題を抱えた子どもに対してはまずその子の気持ちを受け入れることから始めたいとする個人的対応の姿勢より優先させ、そのため心理の専門家を学校に迎えることに消極的なのではないか。

表4-8 スクールカウンセラーの配置を希望するか × 保健の授業への意欲

(%)

		ぜひ希望する	まあ希望する	どちらでもいい	あまり希望しない	まったく希望しない
保健の授業	積極的に取り組みたい	23.9	27.4	24.8	15.6	8.3
		51.3			23.9	
	できるだけ取り組みたい	19.4	33.6	27.9	13.8	5.3
		53.0			19.1	
	あまり取り組みたくない	21.1	18.9	26.3	23.2	10.5
		40.0			33.7	
	取り組みたくない	6.0	17.6	17.6	29.4	29.4
		23.6			58.8	

表4-9 スクールカウンセラーの配置を希望するか × 保健室での子どもの扱い

(%)

		ぜひ希望する	まあ希望する	どちらでもいい	あまり希望しない	まったく希望しない
保健室だから注意せずに自由にさせていること	わりと自由にさせている	19.6	34.4	25.6	13.0	7.4
		54.0			20.4	
	教室とあまり変わらない	18.5	27.8	28.7	16.5	8.5
		46.3			25.0	
	教室とまったく同じ扱い	40.5	9.4	18.8	25.0	6.3
		49.9			31.3	

2) どんなスクールカウンセラーを望むか

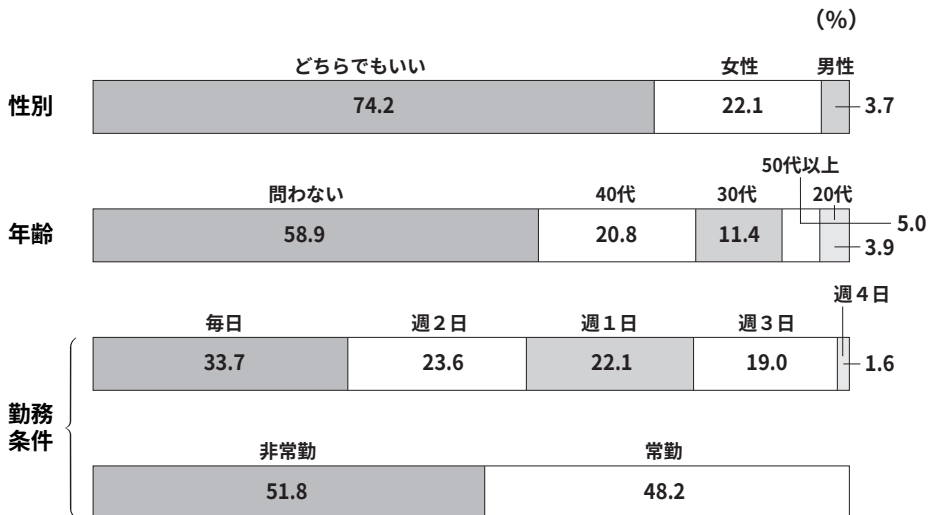
もしスクールカウンセラーが配置される場合に希望する条件（性別・年齢・勤務条件）を尋ねてみた。

図4-1によると、性別に関しては、「どちらでもいい」74.2%、「女性」22.1%、「男性」3.7%で、性別はほとんどの養護教諭が問題にしていない。年齢に関しては、「問わ

ない」が58.9%で、「50代以上」「20代」以外の中間年齢層が希望されている。また勤務条件としては、「毎日」を希望する者が3分の1と予想外に少なく、「週1・2日」を希望する者が約半数を占める。

こうしたパートタイム雇用のスタッフに、養護教諭はどんな役割を求めているのだろうか。この点は「非常勤」51.8%、「常勤」48.2%の数値についても同様である。

図4-1 スクールカウンセラーに対して希望する条件



3) スクールカウンセラーを望む理由・望まない理由 ー自由記述より

このように、スクールカウンセラーの配置の希望に差がでてくるのはなぜだろうか。その理由を聞いてみた。

①スクールカウンセラーの配置を望む理由

◆自分たちのカウンセラー的役割の限界

- ・40代：子どもの行動（暴力、癇癪、いじめ等）を心理的な立場から判断してほしい。また養護教諭の立場としては、子どもに指導しなければならないこともあるので、カウンセラーのようにまったくの受容だけに徹しきれず、完璧にカウンセラーにはなりきれない。
- ・50代：養護教諭のかかわる問題が多岐にわたる。実際に小学校では、相談活動のできる条件が整わないため、相談活動についてはより専門性の高い方に長期にわたってかかわってほしい。

◆学校や教員にとって必要

- ・40代：養護教諭や担任が不安に思っていることを相談したり、指導の方法について聞きたい。
- ・20代：悩みや精神的ストレスを抱える教員の増加のため。
- ・30代：学校や教員には、少なからず閉鎖的な雰囲気がある。教員が非常識とはいえないが、一般社会の中の常識を持ち、なおかつ臨床心理に詳しい人が学校には必要。
- ・40代：前任校で、心の教室相談員との連携がうまくいった。他の教員が、保健室の問題と捉えていた問題を、学校全体の問題として捉えてくれるようになり、養護教諭の存在がプラスにみられるようになった。

- ・30代：相談業務を一任できる体制であれば、もっと子どもたちとのかかわりができる。自分自身の仕事のゆとりが、子どもたちへの対応にもよい影響を与える。

◆子どもにとって必要

- ・40代：子どもと一緒に遊んだり、話したり、お兄さんお姉さん役になれる人がよい。今いちばん子どもに必要なのは、子どもと同じ目線になれるエネルギーあふれる人だと思う。
- ・40代：その子を知っている教師、子どもが自由に話せる教師の数が、少しでも多い方が、いろいろな接し方・見方ができてよい。子どもにとっても、この人とは合うがこの先生はなんとなく苦手というのがあるはずなので、担任以外に接することができる人がいるのはよいこと。若い人を希望するのは、小学校はほとんどの教師が40歳以上なので、若い活力が欲しい。
- ・30代：子どもたちの抱える問題はとても大きく、深くなってきている。個性重視の言葉のもとで、集団になじめない子どもも多く、とても担任だけでは抱えきれない。専門知識と人脈（クリニックへの紹介など）を持った人が学校にも必要。

②スクールカウンセラーの配置を希望しない理由

◆一般教員の増員の方が先

- ・20代：相談員を配置するより、30人学級にしたり、事務処理の職員を増やしたりして、子ども1人1人に対して先生がゆとりを持って対応できれば、問題が減ってくるのでは。
- ・40代：ゆとりのある教育内容や入試、現場教師の人数を増やす方が先。

- 20代：多動傾向の子どもが増えているので、それよりT.T.などの教員の複数配置を希望する。

前の段階でフォローできることが多い。また相談してくる時点では、遅すぎるか、解決の糸口が見えてきているということも多いと感じている。

◆小学生に、スクールカウンセラー配置は適していない

- 50代：子どもは小さいほどあらたまって話すのは難しい。日頃の何気ない会話の端に、困ったことやつらいことをもらすように伝えてくるものなので。
- 50代：小学生では、心の悩みを言葉で表現することが難しく、直接相談に行くことは難しい。カウンセラーは、医療機関で充実させ、学校との連携が取れる形が望ましい。

◆養護教諭との連携の難しさ

- 30代：配置されたとしても、担任とのコミュニケーションが満足に取れないなら意味がない。子どもにとっては、担任との関係がいちばん強いものであるから、他の人に理解してもらっても、そのことだけで終わってしまうように思う(担任にも同じように伝わらなければ意味がない)。
- 50代：常勤で毎日いるのなら希望するが、常勤でない場合、留守の間の出来事の連絡・報告等頻繁な面がある上に、タイムリーに相談できない。
- 20代：ある学校で、相談員と職員の連携がうまく取れていないという事例を耳にしたことがあり、相互のさらなる研修と理解、協力が必要だと感じるから。配置は時期早尚だと思う。

◆人材への不満

- 40代：地域の人では、秘密保持に不安が残る。管理職は、見方・話し方が威圧的・管理的。
- 20代：退職管理職では養護教諭としても気をつかう。偉そうにしていられると、困ってしまう。
- 50代：現在中学校に配置されている相談員の中には、20代であり専門的な心理学を学んだ方でない人が配置されている傾向がある。ただ単に、生徒の話し相手になっている面が強いように聞いている。職員との間の信頼関係がうまくいってないことを耳にしている。
- 50代：地域の方が相談員（専門的な知識や経験がない場合）で、かえって混乱している例などを聞くと、安易に配置してほしくない。
- 40代：スクールカウンセラー制度が、日本の学校の中になじむまでにとっても時間がかかると思うし、人材もないのが現状だと思う。教員だと、相談にのる

◆自分の専門領域への侵入

- 30代：適時相談を受けるが、専門の方の配置があれば養護教諭への相談がなくなるのではないかと、自分の領域に影響が生ずるのではないかと不安を感じる。

◆必要性を感じない

- 40代：今現在、必要性を感じていない。学校全体が休み時間には子どもたちと遊んだり、話をしたり、清掃時には一緒にしたりしているので、話しやすい雰囲気がある。

以上のように、望む理由も望まない理由も養護教諭のおかれた環境、学校条件などによって、それぞれ納得できる理由が感じられる。

これは小学校の養護教諭の意見だが、進捗しつつある中学校のスクールカウンセラーの配置をより有効に機能させるためにも、今後こうした意見を踏えまた全国的な対応が必要であろう。いずれにせよ、学校を全ての子ども

ものの心の居場所にするために、今後小学校においても、学校の中であって担任以外に個別に子どもの心身のケアワークをする人々の存在は、極めて重要な意味を持つと思われる。衰えた現代の家族機能、親機能を補うためにも、「学校のお母さん」としての意味を中心に、そのあり方が議論されるべきであろう。

第Ⅱ部

最近の子どもと保護者について気になること



養護教諭は保健室に集ってくる子どもやその後にいる親たちの中に、今日の子どもの発達の歪みをみている人々である。最近の子どもの発達や親の姿について、養護教諭はどんな印象を持っているのだろうか。本調査ではこうした側面の資料を得るために、最後に大きく自由記述欄をとった。以降「最近の子どもをみていて、気になることをお書きください」に対する書き込みをみていくことにしよう。無記入はほとんどみられず、熱心な書き込みが印象的であった。

養護教諭の自由記述から



●最近の子ども)))

1) 幼稚化した子どもたち

養護教諭は1年生をみていると、彼らが年々幼稚になっていく印象を受けるという。

◆1年生の実態が年々幼稚化

- 40代：1年生の実態が、年々悪くなっている。幼稚化など。教員全体が嘆いている。
- 40代：1年生においては、本校に来てから保健室で「お母さんに会いたい・帰りたい」と大泣きする児童が2～3名いた。今まではなかったこと。
- 50代：話し方がうまくできず、相手に伝えるときに相手の手や服をひっぱってから、話し始める子が目立つ。
- 40代：乱暴な子（パンチや足けり）、成長

に伴っての正常な発育をしていない子など、がまんや落ち着きのない子、毎年新1年生をみていると、年々とても大変。

◆自分の身体の状態などを説明できない

- 40代：単語で話をする。保健室へ来て「先生、手」「頭」と言ったり見せて、しゃべらない。はっきり言いたいこと、してもらいたいことを最後までしゃべらない。
- 30代：保健室に来て、自分のことが伝えられない（こちらからの誘導で状況を把握しなければならない）。頭が痛い、お腹が痛いと言えない。「どうしたの？」と尋ねると、首をかしげる。
- 30代：自分のことをきちんと話せない（どこが痛い、とか…）。

- ・50代：体調が悪いとき、どう悪いのか言えなくて、ただ泣くのみのように、我を忘れる状況になる子どもの様が多い。
- ・30代：自分の身体の様子を自分でうまく言えない、言わない（できるだけ、自分で説明させるようにはしている）。
- ・40代：自分の気持ちを言葉で表現することが下手になってきている。
- ・20代：自分の身体のことをうまく表現できない。
- ・30代：自分のケガや病気を言えない子が増えている（どこをどうしてケガしたかなど、こちらから聞かないと答えられない）。

◆甘えが強い

- ・40代：甘える子、幼い子が多くなっていると感じる。
- ・30代：高学年でも幼い。甘えてくる子が多い。教室でも家でもほっとするところがないのか、保健室でよく暴れまわる。また、人を傷つける言葉や、いやな言葉をよく使う。
- ・年代不明：親と同様、いつも自分の方に目を向けてほしい、という傾向があらゆる場面に感じられる。
- ・20代：甘えたり、自信のない子が、よく保健室に来る。あと、親に「大好きだよ」って言われた子がほとんどいない。まあ昔の親も言わなかったと思うけれど、やはり子どもなりに愛情は感じられていたのだと考えている。今の子は、その「大好きだよ」の一言で、元気を取り戻す子がとても多いことに最近、気がついた。
- ・50代：人に頼りたい気持ちはいっぱい。
- ・40代：とくに男子の幼稚化（自分勝手、乱暴、自分を抑えられない）。人のことを、口汚くののしる（死ぬ）。
- ・40代：聞いてほしい、自分のことを見てほしい、と自分のことばかり。甘えたい子が多い。
- ・40代：保健室に来室したとき、養護教諭が他の児童の対応のために、すぐには声を

かけられないと怒り出す。不満を口にする子が増えてきたように感じる。

- ・50代：子どもの考え方や行動が、以前に比べ幼稚化している。自分の意志を貫こうとする子が少なく感じられ、すぐ他人の意見にのる傾向がある（よい意味での頑固さがなくなってしまっている）。

◆がまんが足りない、がまんできない（すぐキレるなど）

- ・30代：がまんをして何かを時間をかけて最後までやり遂げる、ということができなくなっているように思う。

2) 子どもらしくない＜疲れた子ども＞

生気のない子どもたち

◆表情に乏しい、目を合わせない

- ・50代：目の表情が乏しい。
- ・20代：目を見て話さない。
- ・30代：話をしていても、目が合わない子どもも増えた。

◆とても疲れている

- ・40代：登校するときから、疲れている様子の子がみられる。
- ・30代：朝からだるそうにしている。
- ・50代：身体を動かすことを嫌がり、天気がよい日でも室内でなんとなく過ごしている。
- ・50代：ボーっとしていることを好む子もいる（何もしないでいたいと言う）。
- ・40代：朝からボーっとかの表現は、10年以上から児童の状況として言われてきたが、その状況がさらに重症になってきたのでは…と思っている。

◆体力が低下している

- ・40代：肌の色、つやが悪い。爪が薄くて、すぐにはがれる。
- ・20代：少しのことでも「身体がしんどい」「ここが痛い」という訴えがある。甘えも

あるのかもしれないが、最近の子どもは、身体自体が弱くなっているように思う。

- 30代：身体が弱く、ちょっとしたことで大ケガ、または病気が長引く。
- 50代：小学生でも、「肩がこる」「腰が痛い」と言う。
- 50代：まとまった陸上競技の練習をする、筋肉痛を起こす子が多い。
- 40代：すぐ「疲れた」と言う。遠足などでも歩くことが苦手な子が多い。

◆面倒くさいこと、しんどいことはやらない

- 20代：面倒くさいことは、やりたくない。
- 30代：何かつまらなそう。
- 20代：やりたくないこと、苦手なことがあると、無気力な発言が目立つ（例：「やりたくないから、やらないんです」「嫌だからです」）。
- 30代：あきらめるのが早いようだ。少しでも何かにつまづくと、「もういいよ」「面倒くさい」「かったるい」ですませてしまう傾向が強い。もう少しがんばれば（何事も）と思い声をかけると、「なにあつくなってるの？」なんてかわされちゃったりして。
- 30代：嫌なこと、大変なことに対して、逃げる態度。例えば、マラソン大会など、「急に具合が悪くなった」と言って、参加しない子が増えている。
- 30代：嫌なこと、汚いことはやらない。人のせいにする子が多い。

◆食事に関心が薄い

- 40代：食事への意欲がない。
- 20代：食事に対して、あまり重要とっていない。
- 30代：食の細い子が増えてきた。しっかり食べられないし、嫌いなものでも食べよう（食べられるようになろう）とする努力をまったくしない。

3) 活力の不足した子どもたち

依存的で、ひ弱な子ども

◆指示待ち・依存的・自信がない

- 30代：自己主張はできるが、状況判断ができない。
- 50代：少しのことですぐ訴える（ケガ、病気など）。
- 40代：1つのことを完全にやり遂げる根気がなくなってきている。また、最後までやり遂げたり、責任を持つことが苦手な子が多い。
- 30代：自分のことなのに、自分で他者に状況を伝えられない。「教室に行かれる？」と聞いても「わからない」と言い、判断を他人任せにする。あいさつができない。こちらから「おはよう」と言っても無視する。どうしてよいかわからない様子（低学年に多い）。
- 40代：友だち関係に過敏な子が多いように思う。すぐグループを作って、他を排除するような感じがする。1人1人が自分自身に自信がなく、いつも誰かとつるんでいる子が多い。
- 50代：被害者意識が強い。
- 40代：落とし物が多い。しかもほとんどの子が自分の持ち物がわかっていないので、落としたことすらわからない。したがって、取りに来る子がいらない。
- 30代：おとなの中にいる方が、子ども集団の中にいるより居心地がよく、クラスの仲間となかなかうまくいかない子どももいる。
- 50代：困った場面に遭遇すると、すぐ泣く。
- 50代：消毒を嫌がり、砂、ドロの上から絆創膏をつけたがる。
- 50代：ちょっとしたことで、すぐメソメソしてしまう（がまんできない）。

◆自主性が低い

- 40代：自分は何をしたいのか、どうすればいいのかあまりわからず、周りのおとな

に言われて行動する子が多い。

- 20代：子ども同士のやりとりで感じる前に、おとなから指示されて育つので、自分なりに工夫する術を持てず（おとなに奪われている）気の毒。
- 30代：言われたことしかできない子が増えていると思う。
- 50代：マニュアル通りにしか動けない子が多い。
- 20代：行事の前後に体調を整える手立てを行わない（運動会前夜、12時までテレビ映画など）。
- 30代：気候に合った衣服調節が自分からできない。
- 30代：自分の健康を守ろうという意識が低い。

◆容姿に関心を持ちすぎる

- 20代：とくに女の子。痩せる、キレイになることに意識の高い子が多い。もっと大らかにのびのびしてほしい。
- 40代：外見だけをやたらと飾る。
- 40代：衛生観念のある子は異様な感じがするくらい汚れを気にしている。そうでない子は、ハンカチを持ってこないし、不潔感覚が少ない。貧困からの不潔ではないが、親の怠慢による不潔を感じる。
- 40代：身をかまいすぎる（髪、爪など）。

4) 社会性がない

他人との関係がうまくいかない

◆友だちを作れない、作ろうとしない、つきあえない

- 50代：自分の枠の中に入ってしまう、他の友人との接触をしない子がいる。
- 40代：塾やおけいこ、スポーツクラブに参加している子が多く、管理されたグループに属し、おとなに教わることに慣れてしまっている。そのため、子ども同士で教えたり、教わったりできないでいる。

- 20代：人は人、自分は自分…と妙に冷めている子がいるのも不安。
- 20代：友だちとトラブルを起こすと、自分で仲直りをしたり、その後の関係をつなぐことができない。
- 30代：友だちと関係が作れず、保健室に1人で遊びに来る子がみられる。
- 40代：友人のいない子が多い。
- 30代：人をあざけ笑う場面がみられる。
- 30代：他の子どもに積極的にいかかわらない、知らん顔をしている。困っていても、気がつかない。
- 40代：他人にあまり関心がない。
- 30代：会話が単語調。また、手当てしてもお礼が言えない。やってもらって当たり前、といった風。とても気になっている。

◆集団行動がとれない

- 50代：人間関係の距離のとり方がメチャクチャで、親に遠慮をしたり、気に入られるようよい子を演じたり。反対に、教師や周りの友だちに、ダダっ子のようなわがままを言って愛情を確かめたり、叩いて気を晴らしたり、と集団生活を行わせるには難しい状態の子が増加している。
- 40代：集団行動がとれず、教室の中におれず、廊下や運動場に授業中、ふらっと出て行く子が、年々増えている。マイペースで先生の言うことが聞こえない子が増えている。
- 50代：落ち着きがなく、集中力に欠けてきている。教師の話を聞こうとする気持ちが薄く、おしゃべり、いたずら、立ち歩きが目立つ。
- 30代：ごっこ遊びができない。とくに鬼ごっこの鬼になれない。
- 50代：自分中心的な行動をとる子が多く、仲間と一緒に何かをやるのがとても苦手である。
- 30代：コミュニケーションの取り方が下手である。けんかして、「ごめんね」と言えない。

◆全て他人のせいにする

- 30代：友だちと遊んでいてケガをしたとき、相手がわざとでなくても「叩かれた、蹴られた」と言う子が増えてきた。また、友だちにケガをさせたとき、「わざとじゃない」と知らん顔する子が増えた。
- 30代：委員会の当番活動など地味な仕事ができない子が増えた。朝、「石鹼の点検を放課後にしてね」と頼んでも、点検しないで知らん顔しているような子がいる。指導をしても「暖簾に腕押し」のような感じで困っている。
- 30代：自分の言葉で言わず、誰かに言わせてすます。
- 30代：すぐに他人のせいにし、「僕は関係ない」と逃げる。
- 50代：自分が悪くても、相手を責める子が増えてきている。
- 50代：自分の悪い面は言わず、すぐ「〇〇さんに」と相手の悪口を言う。

◆ジコチュウ・勝手・他人を傷つけても平気

- 40代：一生懸命、まじめに取り組んでいる友だちを「何、一生懸命しとんや！」とけなし、馬鹿にする。これはいちばん、私は腹が立つ!!
- 30代：他の子の痛みがわからない。平気で人の顔を蹴ったり、腹部を蹴ったりする。
- 30代：平気で他人を傷つける言葉を発する。
- 40代：いじめに取れるような行動を行うのだが、本人は気づいていない。
- 40代：人の痛みがわからない。相手を傷つけても平気。
- 30代：すぐふてくされる。
- 40代：注意することが、素直に聞けない。
- 40代：注意されたことに腹を立てる。
- 30代：「ムかつく」「なんでしないといけないの」「いや」「やりたくない」「ほっといて」などの口ごたえが非常にやり難い。
- 30代：鉛筆や箸などの注意をすると「私のことだから関係ないやろ。ほっといて」と口ごたえされる。注意してもらって、素

直に「はい」と言うことが少ない。

- 50代：多動で落ち着きのない子どもが多くなったように思う。人の話を聞く態度も悪く、一方的にしゃべりたいことをしゃべるだけ、というような子どもも目立つ。
- 40代：気に食わないことがあると、授業中でも教室を出てしまう。
- 20代：気持ちを大切にしない。飼育しているものを大切にしない。
- 50代：気の向くままに、人への迷惑を考えられない。世の中は自分のために回っているという思い。
- 40代：自己中心的で、他人の話が聞けない。
- 30代：自分の主張ばかりして、人の話が聞けない。
- 30代：自分をアピールしたがる。
- 40代：やりたくないことは、やらない子が増えているので、いずれ、現在の学校は対応できなくなってしまう。
- 40代：“本人の自由”と思っていることが多い。
- 30代：自分に関係すること以外は、知らぬ存ぜぬ、という所が強いと感じる。
- 40代：冷めていて、あまり感動しない（花や虫など自然のものなど）。
- 50代：つらいことはしたまらない。損得で動く。
- 30代：1人に1つのことを注意しても、周りの子どもたちは、自分のことではないからと聞く耳をもたず、すぐに注意されていることを同じようにしてしまう。そのために、同じことを子どもをかえては注意しなくてはならないことがとても多いように思う。
- 40代：声を出さない（返事も含め）。
- 30代：しんどいことはしない。
- 30代：がまんができない。
- 40代：自分の言うこと、思うことが通らない場合、言葉で伝えようとせず、乱暴な行動や態度に出る。
- 40代：1人では動けない、言えない。自信はないが、集団なら何も怖いものはない。

- 20代：悪いことを友だちがしても、注意しない。注意すると自分がいじめられるという様子がある。
- 30代：他人のことにあまり関心がなく、自分勝手な子が多い。
- 40代：依存心や権利などは強く主張するが、自分のしなければならないことには目を背ける。
- 40代：自分の思い通りにならないと、すぐすねる。
- 40代：相手に「気をつかう」ということすらわからず「迷惑が何か」もわからない子も増えている。

5) 精神内界の不安定さ

◆いらいだち・不安定・爆発

- 30代：すぐカッとなって相手を殴ったり、蹴ったり、口より先に手や足が出てしまう子どもたち、自分の感情を抑制できない子が増えてきている。
- 20代：ストレスを感じている子が多いように思う。そのストレスの解消の仕方が残酷になってきている。
- 30代：瞬間湯沸し器タイプ。
- 40代：“カッ”となると、自分で自分をコントロールできなくなる。
- 30代：言葉遣いが悪い。「殺す」「死ぬ」など。
- 20代：テレビゲームの影響か「死ぬ」「殺してやる」と平気で言ったり、真似をする。
- 40代：子どもたちの下校中の会話の中に多くでてくる言葉は「アホ」「ムカつく」「キレルよね」「きょう遊べる」「塾があるからダメ」。
- 50代：自分に対する他人の目を気にしすぎる。
- 40代：周りの人（親、友だちなど）に気をつかって疲れているように思う。
- 50代：感情の揺れが非常に大きい。
- 40代：感情や情緒が、非常に幼稚。
- 30代：落ち着かない・安心できない子、多動な子が多い。
- 20代：寝つけない、眠りの浅い子が多い。



◆おとなの目を気にして態度の使い分け

- 40代：「よい子ども」を演じる子が増えている。
- 40代：おとなの目を気にして、上手にふるまう子が多くなってきた。
- 40代：外づらがいい。
- 40代：教師に見せる姿と、子ども同士の姿は違う。子ども同士でも、その時は仲良く装っているが、裏へ回ると自分のいいように回れる（平気で今、遊んでいた子の悪口を言う）。とても残酷な一面がある（そこまでするか）。
- 40代：人への評価が厳しい、反面あたっている。指導力のない教師はすぐ見抜いて、反抗する。
- 30代：教師の前と陰での行動が極端すぎる。テレビなどで目で見た知識だけの会話が多い。
- 30代：おとなの前でいい子ぶりっ子が増えてきて、なかなか自分を出さない。
- 30代：親に見せる顔、担任教師に見せる顔、担任以外の教師に見せる顔、友だちに見せる顔とうまく使い分けているように思う。
- 40代：思春期にみられる悩みを小学5、6年で持つ子どもがいる。おとなの心に敏感な子が多い。

6) しつけの問題・家庭の問題

こうした問題の背後から、家庭が子どもの養育にきちんと責任を果たしていない状況がみえてくる。親としての基本的な健康管理すら怠っている。休み明けに体調を崩す子どもなど、子どもを護るのは家庭ではなくて、学校なのだろうか。

◆家庭に問題

- 30代：地域によって、多少異なるように思うが、家庭的なしんどさ(両親の不和など)を抱えている子が多い。
- 30代：休み明けに体調を崩す子が多い。
- 40代：外遊びが少なく、生活能力に欠け

ているので、自分の思うようにならないとすぐカッとなってしまう子、愛情不足からいじわるをしてしまう子、朝食を食べてこなかったり、1人で、または子どもだけで食べている家が増えている。祖父母と同居していても、ほとんど食事は（とくに朝）別々である。

◆食生活の乱れ（朝食抜きなど）

- 30代：野菜をまったく食べない子が増えている。
- 30代：食生活が乱れている（朝食抜き、夕食がコンビニ弁当やレトルト食品など）。

◆睡眠不足（就寝時間が遅い）

- 40代：睡眠不足の子が気になる。低学年も、高学年も。午前中でさえ、ぐっすり寝て、すっきりした顔で教室に戻っていく。

◆しつけができていない

- 50代：基本的な生活習慣が（しっかりと）身につけていない。
- 50代：細かいことだが、鼻がかめない、爪を切ることができない。
- 40代：保健室の本など出しっぱなし。
- 40代：掃除の苦手な子が多い。ほうきなどを使えない。ゴミを集めないで、かえって散らかしている。雑巾がきちんと絞れない。嫌な仕事は（水汲み、水捨てなど）人に押しつける。
- 50代：掃除の仕方が下手。ゴミが落ちていても気にならない。
- 20代：保健室のものを自分のもののようを使う。
- 30代：保健室の机を開け、物を出して使う。メモに使う。シールを勝手に出し、何かに貼る。
- 20代：扉をきちんと閉めない（男女に限らず90%です）。

◆おとなへの態度に問題

- 50代：おとなを同等と思っている。保護者は自分の言いなり、先生も同等。
- 40代：おとなへの尊敬や感謝が薄い。
- 30代：教師に対しても子どもは、友人的な関係を望んでいるように思う。
- 30代：注意しても大声でどならないと感じない。

7) 養護教諭の目からみた身体のおかしさ

下記のような身体上の気がかりを、どの年代の養護教諭も共通して指摘している。

- アレルギー性疾患・アレルギー体質の子が増えた
- すぐ転ぶ、すぐ骨折する
- 転ぶとき、手をつかないので顔面にケガ
- 姿勢が悪い
- 肥満児が多い
- 視力が低下している
- 肩こり・腰痛を訴える

8) 母親を求めて来室するような子どもたち

そうした子どもの背景にあるのは、身体の疲れか、それとも心の疲れか。少なからぬ子どもが保健室に集ってくるが、身体の不調やケガを訴えてというより、まるで養護教諭に＜母親＞を求めているのではないか。

◆ちょっとしたケガや病気でも、手当てをしてもらわないと気がすまない

- 40代：少しのこと（ケガ）でも、薬をつけないと気がすまない。
- 30代：小さなケガでも、絆創膏を貼らないと気がすまない。
- 40代：ちょっとしたケガで大泣きしたり、痛みに弱い。すぐ湿布を貼りたがったり、薬や絆創膏を欲しがる。
- 30代：ほんの少しのすり傷程度でも、が

まんできない。

- 40代：例えば、鼻出血とか、すり傷などの出血に対して、自分で何もしようとしない。誰かにしてもらおうのをじっと待っている。
- 50代：ちょっとしたすり傷などでも、手当て（絆創膏を貼る）をしないと気がすまない。
- 20代：自分で処置ができない。小さな傷でも保健室に来るが、もう少し自分でなんとかしようという力がない。少しのケガなら、洗って放っておくとか、そういうものがあまりない。神経質なのかな？
- 50代：「手が痛い」「足が痛い」「ここが切れている」などと言って、何でもないようなところを見せて、私の関心を引こうとする。本当はどうもなっていないのに、痛いところを捜し出してまで保健室に来る子が多すぎる。教室だと、教師対集団なので、自分ひとりに声をかけてもらいたいのだと思う。子どもはどこか心が満たされていないのだと思う。上記の子を含め、お腹や頭や気持ちが悪いなどと言って、年中来る子もいる。1週間に3～4回。私が話したり聞いてやったり、または少し休ませたりすると、元気に1日勉強する。このような子どもが1学年に5～6人、多い学年では10人前後いる。ここ6～7年頃から始まっていると思う。

◆スキンシップを求めてくる子が多い

- 40代：愛情不足では？と思うことがしばしば。高学年の子が私の膝の上にすわる。手をつなぎたがる。くっつきたがる。
- 20代：週に何日も習い事が入っていて、とてもしんどそうにしている子どもが増えているように思う。「先生、毎日しんどい…ちょっとだけぎゅーって抱きしめてて」と訴えてきた女の子のことが、すごく心に残っている。
- 40代：甘えたい子がいっぱい。スキンシップされると、すごく喜ぶ子が多い（5年生の男子でもハグしてあげると喜ぶ）。

- 40代：高学年になってもスキンシップを喜ぶ子どもが多いことが気になる。

9) 親との間に信頼関係の できていない子

◆親を怖がる、遠慮する

- 50代：親をととても気にしている。怖がっている（心配や迷惑をかけてはいけない）。
- 40代：低学年では、すぐ大きな声（だだっ子）で泣く子がいる。親が来ると興奮する子がいる。
- 40代：病気のときは大騒ぎをするが、本当の病気のときに言えない（自己表現が下手）。
- 30代：自分の悪いことは親に言わずに、親には嘘のことを告げる。
- 50代：親が忙しいと思っているのか、親に言うべきことを学校で先生に言うことが多い（「夕べ眠れなかった」「朝吐いた」など）。
- 50代：親に心配をかけないように、自分のことをはっきり伝えない（学校であったことや、注意されたことなど）。
- 40代：母親が怖いという子が増えてきた。親の前で子どもはありのままでいられない。
- 30代：家の中でよい子にしていた、学校など外で発散している子どもが多い。

◆親に甘えられない子

- 30代：甘えたいという気持ちが強い。

- 40代：親に甘えていない子が多い。
- 30代：親に甘えられない子どもがいる。
- 40代：養護教諭にべったり甘える、離れたがらない子が多くなった（母親に甘えきれずに）。
- 20代：自分の気持ちを抑えることができない子どもが増えてきているように思う。その反面、親の前では非常に“よい子”を演じる子どもも多い。

10) その他

- 40代：ADHDでは？と思われる子どもが急増しているような気がする。注意の持続が困難。話しかけたとき、聞いていないようにみえる。
- 30代：LDやADHDも含めた発達障害関係の子どもたちが目立つ。
- 40代：病気を持つ子や身体虚弱の子も多くなっている、病弱学級、学習障害児学級の新設が早期に望まれる。
- 40代：子どもの「いじめ」のみならず、対教師（担任）へのいじめもあると感じる。
- 40代：私たち養護教諭は、子どもだけでなく教師への精神的なバックアップをしていかなければならない。

子どもたちの中に指摘されたこうした様々の問題を解決するために、われわれはどこから手をつけたらいいのだろうか。

●最近の保護者)))

次は「最近の保護者について気になること」である。5人のうち4人の調査票に様々な書き込みがあるなど、やはり熱をこめた指摘が特徴的であった。しかし前にみた、子どもについての記述は種々の問題を指摘しながらもどこか気遣わしげな教師の目を感じられるのに対して、親についての書き込みは辛口である。自分勝手な親、いい加減な親、オロオロするだけの親、礼儀をわきまえない親たちの姿に、「子どもの教育より親の教育の方が先だ」と指摘する者も多かった。

1) 自由記述で最も多かった指摘である「子どものために自分たちの生活や楽しみを犠牲にしたくない」かのよな親の姿について

おとな中心の子育て

◆子どものことより、おとなの生活を優先

- 30代：子ども中心でなく、保護者中心の考えが強くなっているようなところがある。夜型生活や、まだまだ手をかけてあげなければならないのに放任。1年生なのに、朝食の準備からランドセルなどのチェックなどもされない…など。
- 20代：朝食を準備しない親も多い。共働きが多く、子どもが孤独である。
- 30代：夜の勤務で朝起きられずに、子どもは朝ご飯も食べずに遅刻…など。自分のペースで生活をしており、子どものためという気持ちに欠けている親がいる。
- 30代：自分たちの都合で子どもを欠席させたり、前日の疲れを翌日に残すようなレジャーに行ったり、親の楽しみ中心の生活。
- 20代：本校の地域では、働きに出ている母親がとても多く、忙しい親が多いようにも

思う。そのため生活が子どものリズムに合わせるというよりは、親のリズムに合わせている感じで、子どもの就寝時間が遅くてもあまり気にしていないように感じる。

- 40代：子どものために、自分のプライベートな時間を割きたくないとか、家事などの労働をおろそかにしている家庭もあると思う。

◆夜遅くまで、子どもを連れまわす

- 30代：親の生活が中心となって、自分がカラオケに行きたいからといって、小学1年生を夜遅くまで連れまわしたりするなど…。
- 30代：自分が遊び歩いて、夜、子どもにご飯を食べさせない親も多くなっている（朝食はもちろん与えていない）。
- 30代：とても若い母親などが、連絡会、打ち合わせとPTAの会の延長で、カラオケ、飲食と、自分の自由を主張しすぎる。その間、子どもは家に残されている。親睦のミニバレーも、どこの学校でも行われているが、本当の意味があるかどうか、とても不思議に思う。

◆忙しい親と子どもは話す時間がない

- 50代：共働きの家庭が多いので、子どもの心が満たされないのだと思う。私が「こんな大変なこと、どうして家の人に言わなかったの?」と聞くと、子どもが「だってお母さん、忙しそうにしてたから」とか「お母さん、私より先に会社へ行っちゃうから」とか「お母さんお勤めだから、お夕食作りが忙しくて、私が話してもあまり聞いてくれない」などと言う子が多い。
- 40代：親の忙しい姿と疲れた姿を子どもに見せているように思う。子どもは、その姿に自分を抑えて、甘えることもなくがま

んしているの知らない親。スキンシップのつもりが、お金か好きなものを買って取り繕っていて、本当のものが見えていない親がいるように思う。

- 30代：仕事に忙しく、子どもの面倒を見ていない、放任している。何か問題があっても「知らなかった」。
- 40代：子どもたちと一緒に行動する時間の不足。レジャー、スポーツは一緒でも、生活のなかで共にあることを避ける傾向があるように思う。避けるというよりは、一緒にいることの大切さを知らないのかもしれない。

2) 家庭でやるべきことと学校で受け持つことの区別がつかない親が多い。 子どもの健康管理についても学校に頼りすぎてはいないか

親の役割を果たさず、自分勝手

◆朝、子どもの具合が悪いのに学校に出す

- 40代：子どもを学校へ行かせておいたらよいという考えを持っているのか、朝から熱があっても登校してくる。ずばり、学校で寝かせておいて、と言う。熱が上がったり、調子が悪くて連絡してもいないときがある。
- 30代：熱が朝からあっても、自分が出かける予定がある日は、「学校で寝てろ」と登校させたり。提出物の出し忘れも「救済日でいいです」と最終救済日なのに言われたりする。何度もコンタクトを取っているのに、「早く言ってくれないから」なんて言われてしまったり…。
- 40代：子どもと一緒に、最低限のルールや他人への配慮等が足りない人が多く、親からの指導がいるような親が多い。

◆家でしたケガや湿しんの手当てまで「保健室で診てもらいなさい」と子どもに言う

- 40代：過保護か放任の両極端が多い。子育てを人にゆだねてしまう人がある。例え

ば、家でケガをしたり、湿疹が出ているにもかかわらず、翌日、「保健室で診てもらいなさい」とか、「薬をつけてもらいなさい」と言われたと言ってやってくる。スキンシップのよい場面になるのに、親が自ら放棄している。反面、爪切りまで親が行って自立を遅らせている者もみられる。

- 30代：家庭ですべきこと、学校ですてくれることの区別のつかない親が多くなってきている。例えば家で負傷しても次の日の学校で手当てしてもらおうように子どもに言ったり、基本的なしつけについても学校ですてもらえんと思っているようだ。
- 30代：学校への依存心、大。「保健室で〇〇してもらいなさい」というのが多い。発作時、「吸入してもらいなさい」と吸入器持参。水薬をビンごと持ってきて「1回分飲ませてほしい」→全て親からの連絡なし。突然、子どもから聞く。

◆食生活がでたらめ

- 30代：子どもたちの家での食事メニューを聞くと、ハンバーグ、カレー、ファーストフードなど野菜も少なく、バランスよい食事とはいえない。子どもが食べないからと、あきらめてしまう傾向がある。
- 40代：遠足などのお弁当、料理したもの（手を加えたもの）が少ないことに驚く。
- 50代：朝食を作らない親が多くなってきているようだ（子どもの話→台所のテーブルに菓子パン、またはチン《電子レンジのこと》して摂食）。

◆衛生面への配慮が足りない

- 40代：歯磨き、洗顔をしなくても「困りましたねえ」と書いてくるだけで、どうしてもさせる（習慣づける）という意識が薄い。
- 30代：本来、家庭でされるべき“しつけ”が家庭から学校に依頼されることがある。“耳垢とり”“鼻かみ”。

3) 親の子育ての仕方を見ていると、子どもに無関心で放任するタイプと、過保護で干渉しすぎのタイプの両極端が目につく。今の親は「駄目なものは駄目」と言い切ることができなくなっている

子育ての仕方は両極端

◆子どもが王様、親は家来で子どもの言いなり

- 50代：子どもが王様、親は家来。子どもを勝手にさせすぎて、しつけができていない。1年生は野生動物のよう。自己主張はするが、話は聞けない。親は子どもの世話をしすぎるか、しななさぎのどちらかが多い。どちらにしても子どもはよく育たない。
- 40代：子どもを王子様扱いして、何もさせようとしない。子どもの言いなり。
- 20代：欲しいものをすぐ与える。子どもが言う前に先に何かと口を出す。天気が悪ければ、登下校の送り迎え。
- 50代：通学距離があまりかからないのに

車で送り迎えをし、電話1本で子どもの送迎に出向いている。

◆叱らない、叱れない

- 20代：保護者自身が子どもを叱れない。どうしていいかわからず「先生、どうしたらいいでしょう」と聞いてくる親がいる。
- 40代：子どもに対して、きちんと注意できない人が多くなっている(ただ言うだけ…子どもが聞かなければ、それで終わってしまう)。

◆子どものペット化

- 50代：かわいい格好をさせてきて「服、靴をよごすな」と言って、子どもの遊ぶのを制限したり、子どもの髪を染めたり。子どもをペット化しているようなことが気になる。
- 20代：ロングスカート、茶髪、マニキュアなど、親の価値観を子どもに押しつけているようなところがあるように思う。子どもは「染めてほしくないのに、お母さんが」



といったことを聞くことがある。

- 30代：茶髪、パーマ、細い眉を低学年のうちからさせている。子どもの髪がいたんでいる。
- 20代：おとなと子どもを同じ感覚で育てている（子どもなのに、ピアス、つけ毛、カラフルなピン、髪の色、ファッション→運動しにくい服装、靴）。

◆子どもと友だち感覚

- 40代：以前は親の期待が大きく、おしつぶされそうな子が気になっていたが、最近、友だちのような感覚の親が多いような気がする。
- 40代：子どもと友だち感覚で、親としての頼もしさ、懷に飛び込んだあたたかさのようなものがない。
- 20代：変な仲良し親子（一卵性親子ともいうが…）が多く、子どもの自由を履き違え、自分と対等に扱っているといいながら、注意できない親が多い。子どもに弱い部分を見せすぎて、子どもが甘えられない。しかし、そのような親が、一般的に子どもには受けているので、止めないだろうが…。

◆子育てに自信がなく、不安が強い

- 30代：世間体を気にするあまりか、ハウツーものの読みすぎなのかよくわからないが「こうあるべき」「こうでなくてはいけない」と考えているところから、子どもがずれているとすごく心配をする。例えば1年生の子が入学して間もなく、新しい生活に慣れず、学校で泣いていると聞くとオロオロ。「1年生といえども、まだ親離れしているわけではないですから。そういう子はたくさんいます」と話すと安心する。
- 20代：子どものことを心配するのはわかるが、心配しすぎたり、子どもより親の方がオロオロしてかえって子どもを不安がらせている親が増えている。
- 30代：判断能力に欠けるおとなが多い。ケガをしても、昔だったら「これくらい大

丈夫！」と父母は言ったのに、今は「どうしよう。どうしたらいいですか？」と泣いてしまう母がいたり、ケガをさせられたことを「学校で解決してほしい」と頼む。

- 30代：子育てについて自信のない方が多い。学校での様子を話すと「どうしたらいいんですか」と泣き出す人もいる。
- 40代：子育てについて不安を持っている親が増えている。1年生の保護者の中には連絡帳を使い、担任と交換日記のように記入している人がいる。
- 30代：過剰なほどすぐ医療機関にかかりたがる親が目立つ。軽い打撲など本人が保健室へも来ていないケガで通院し、災害報告を書く羽目になる。
- 40代：簡単なケガでも、家庭で手当てをせず、病院に受診する（保健室での手当てをする）親が増えてきた。

◆親自身のマナーの悪さ・常識のなさ

- 50代：学校の先生は「①親切にしてくれて当たり前②一生懸命で当たり前③やさしくて当たり前」だと考えている保護者がほとんどではないだろうか。自分の子どもが世話をかけても、当たりのことだからあまり感謝もしない。通り一遍の言葉で終わる。コミュニケーションを取りながら子どもを育てるという意識が低いように思う。ある担任が「去年受け持った子の親と道路ですれ違ったけど、ろくにあいさつもしない」と怒って話していた。悪い関係でもなく1年を終わったのに、と残念がっていたことを思い出した。人と人とのかわり方が実に淡泊である（とくに若い保護者ほど、その傾向が強い）。ここ近年、虚しい思いをすることが多くなった。子どものためにすることは、なんとも思わないがやはり寂しく思う。毎日毎日、親切に、一生懸命、やさしくすることがどんなに大変かわかるか、と言いたい！（見返りを要求しているわけではない）。
- 30代：礼儀知らずで、人の迷惑は考えず、

ただ自分のことだけを考え、自分の子どものことしか考えていない。授業参観に来てもしあさつもできず、無駄話ばかりをしている。保護者をみていると、まだ学校に来ている子どもの方がいいなあとも思うし、こんな親では子どもがいい子に育つわけがないなあと思う。

- 30代：学校に対して、気持ちが「いいかげん・適当」な親が増えているように思う。ルールやきまりは、きちっと守ってほしい。学習参観に来てでも私語が多く、まるで井戸端会議のよう。
- 20代：常識がなさすぎる。ガムを噛んで参観に来たり、しゃべっていたり、とてもうるさい。
- 30代：基本的な行動がとれていない。例えば、保健室で熱を出し世話をした場合でも「ありがとうございました」も言えなかったりする。

4) マナーの悪さや常識のなさは、世代間のきしみを起こしているが、その背景には多様化した家族の姿がある。なかでも祖父母が子育ての責任者になっている家族が増えている

◆多様化した家族

- 50代：若いうちに結婚、出産、離婚を経験して母子家庭となっている保護者が年々増加しており、経済的な面や養育面で少なからず問題を抱えているようにみえる家庭が多い。
- 30代：若くして結婚し、子どもを産んでいる親が多い。三世代家族で子どもの面倒を祖父母が親よりよく見ているケースが多い。そのためか親子関係にドライな親が多いような気がする。しかし、子どもは親との関係に非常に敏感に反応している。十分に甘えられない、甘えられなかった子どもたちが、身体や心に問題を抱えていることが多いような気もする。そのことを親が気づいていない。

- 30代：複雑な家庭環境の子どもが多く、祖父母が養育している家庭が多い。
- 20代：若くして子どもを産み、育てている人と、年をとってから結婚して子どもを産んだ人の差が大きく、それが子育て、子どもの性格に影響している。若い親は比較的スキンシップが少なく、保護者会でも私語が多い（全部とは言いません）。
- 30代：PTA活動など、参加する者が少なくなった。仕事を理由に、子育てやPTA活動を祖父母に任せきりのパラサイトペアレンツが増えている。

5) 教師の側は、どのようにしたら子どもが心身共に健康に育っていくかに心を砕いている。親と協力しながら子どもを育てていこうと思っているのに、親の方はどう考えているのだろうか

◆学校からの連絡を読まない。提出物は期限切れ、記入もれ

- 40代：親がすべきことがわかっていないのかしら…と思うことがある。ピカピカの1年生なのに、親が学校の連絡を見てもせず、健康診断等で必要な記入用紙なども忘れる結果となることが年々増えている。うっかりかもしれないが…、そのわりには文句はしっかり言う。お互い様、の気持ちに欠けていると思う。
- 40代：学力以前の基本的な生活習慣等は軽視されていて、検査（尿検査、検便、ぎょう虫等）などの提出物がそろにくい。
- 20代：保健室でケガや病気の手当てをした連絡票を渡しても、連絡のないことが多くなってきた気がする。
- 20代：提出物の記入もれ、期限過ぎが多い。
- 40代：学校で行う健康診断などのアンケートの記入漏れが多くみられるようになった。

◆**具合が悪いときに連絡先が不明**

- 40代：体調が朝から悪いのを知っているが、お迎えをお願いしたくても連絡のつかない保護者がときどきいる。
- 20代：具合が悪いとき、連絡を取りたくても、取れない場合も多い。心配ではないのだろうか。

◆**子どもに無関心**

- 20代：子どもを自分と対等に扱っている（例：ダイエットをさせている）。
- 20代：保健室登校している子どもの様子などを気にして養護教諭と話をしたりすることがない。学校に子どもが登校していれば、それだけでよい…といった感じがあり、学校に任せきりである。
- 30代：学校から子どものことを話しても、「構わないでくれ」とか「放っておいてくれ」などの親。
- 年代不明：自分の楽しみ、遊びが優先で、子どもにあまり関心がなさそう。とくに新入児の若い母親。
- 20代：子に顔を寄せないこと。もっともっと近寄って見てあげてほしい。ケガの絆創膏は何日も貼りっぱなし。ケガを診てくれない。触ってくれない。もっと見て、近寄って、さわって子育てをしてほしいと思う。

◆**わが子しか見えない、わが子はいつも正しい**

- 50代：学校での集団生活、学習をしている間に、いたずらしたり、相手を殴ったりしたときなど、子どもに注意したりすると「なぜ、うちの子だけ叱るんですか？」と学校に対して苦情を言ってくる保護者が多い。自分の子どものことだけしか目に入っていない、他人に迷惑をかけたりしたことに對しての反省の色が年々若い保護者にみら

れない。あまり子どもと同じ自己中心型から抜け出せない、いわゆる親として成長していない保護者が目立ち、子どもより保護者への教育をしないと子どもがよくなるように思われる。

- 50代：わが子だけを見ている。何かトラブルがあるとすべて自分の子は正しい、被害者である、と訴える。

6) 一生懸命に子どもの世話をしているのに、いちばん困るのは子どもの目の前で批判的なことを言われたりすること

◆**学校に対して批判的**

- 50代：学校の責任を指摘する傾向が強い（子ども同士のいさかいなどについて）。ケガ、いじめに過敏に反応する（低学年の子どもたちの親）。子どもはけんかもできにくい状態（担任も、とにかくケガは養護教諭に見せておかないと、責任問題になってはいけないという考えの人が増えてきている）。
- 30代：いちいち、ささいなことでも、すぐ文句を言う。ものの言い方を知らないと思う。小さなすり傷でも「学校は、どう対処したのか！」と、すぐ学校に対して批判的。
- 20代：学校への不信、不満が多いのか、学校への悪口を子どもの前で平然と言う…など。“子どもに何でも話す”ということ間違えてとらえている保護者が多いと感じる。
- 40代：教師批判が多い（教師を育てよう、支えよう、という姿勢が少ない）。

こうした数々の親の問題点を是正する策は、社会的対応として果たしてあるのだろうか。



まとめと提言

養護教諭の果たしている子どもへの役割をめぐる

保健室登校児についての自由記述からみえてくるのは、カウンセラーさながらに、①保健室登校児を保健室に受け入れ、②人格的成長を支援する働きかけをし、さらに③元学級へ復帰させるためのきっかけ作りをしようとして、実にきめ細かい対応をはかっている養護教諭の姿が印象的であった。

過度にカウンセラー的役割に流されることなく、教諭としての姿を残しながら、限りなく「学校のお母さん」的役割をとるべく努力する姿がある。保健室の中にこうした「人」がいることは、保健室登校児に限らず、保健室にも登校できない不登校児や、まだ問題を起こしていない子の心にもどれほどの安心感を与えていることだろう。

しかし、こうした養護教諭の努力に甘えて、家庭で本来親が果たすべき役割までも肩代わりしてほしいと期待するような親の姿もみられる。

養護教諭からみた最近の子どもと親の気になるところ

第Ⅰ部で見いだされたデータは、第Ⅱ部の自由記述によっても事例を通して浮かび上がる。最近の子どもと親の気になることについての自由記述では、「子どもの生活の乱れ」「基本的生活習慣が身についていない」などにみられるように、家庭が子どもを育てる努

力を怠っているかのような指摘があり、関連して「親の生活ペースに子どもを巻き込み、子どものことが後回しになっている」「親自身の基本的生活習慣・基本的マナーができていない」などもあげられている。「親が子どもに対して果たすべき役割」を果たせていなかったり、「親自身が人間として未成熟な様子」が見いだされる。そうした親の下に生まれてくる子どもたちを思うと、現代は子どもの受難時代とでもいえようか。

このような状況の中で、「コミュニケーション能力の未発達な子どもが多い」「対人関係が作れない子どもが多い」「指示待ち、がまんができない、面倒くさがる、表情・感情に乏しい、思いやりがない、幼稚である」「子どもが疲れている」などの気がかりな側面についての指摘が様々な角度からされている。

今回、養護教諭をめぐる調査結果が示唆するものを踏まえながら、最後にいくつかの提言を試みたいと考える。

1. 保護者の養育責任の自覚をうながす手だてがほしい

「学校のお母さん」であろうとするかのような養護教諭の努力は貴重なものだが、本来家庭で親が果たすべき基本的な世話、身体や健康への配慮、生活習慣作り、しつけなどまでを養護教諭に期待してはならない。養護教諭は母的役割を担う存在ではあっても、心と身体のカアの専門家である。母的役割は、それぞれ

の家庭でできるだけ担ってほしい。養護教諭の抱える荷を過剰にしてはならないだろう。本来の養護教諭の役割の遂行のためにも、また保健室登校児の世話や虐待されている子の発見、また今回はとりあげなかったような時代の中での新しい役割を一層的確に担ってもらうためにも、過度の依存をしないようにしたい。

親の考え方は今、多様化しているものの、食事・衣服・身体的な世話、健康面への配慮、健康作りなど、子どもの立場から考えて最低限必要な養育ポイントは共通のはずである。そうである以上、親たちにできる限りそうした役割の実行が伴うように、学校全体で親と地道に対話していくことが望まれる。親子の会話で子どもの気持ちを聞き、心を楽しめてゆったり励ましたりすることの大切さも、親たちに強調してもよい点かもしれない。

「学校のお母さん」である養護教諭だけではない。それぞれの担任や他の教諭も親的役割を果たしてしてくれる人々である。けれども、それに過剰に期待することはできないことを改めて認識させるように、対話を通しての保護者教育が必要かもしれない。

2. 保健室登校児の支援のための連携と協力体制を一層強化してほしい

保健室登校児の指導に関して、養護教諭は担任に対して、次のような意見を持っている。「保健室に任せきりにせず、養護教諭と連携してほしい」「子どもについての情報提供や対応方針についての意志疎通を図りたい」「クラスでも復帰への受け入れ体制を考えてほしい」。むろん保健室登校児がいるクラスの担任と養護教諭の連携だけでなく、学校の職員全体で状況の把握に努め、対応のための役割を考え、それぞれがその立場の中で担える役割について努力し合うことが望まれる。

保健室登校児のいる保健室で、養護教諭が本来の職務との折り合いをつけながら、個人的努力をはかっている。その仕事の支援のために学校全体で何ができるかを考えてほしい。それができないと、せっかく保健室になら登校している子どもに、養護教諭の努力だけでは適切な対応や、成長支援、元学級への復帰などの課題もよく行われないであろう。

養護教諭の役割を最大限に活かすためには、各校に1人または2人しかいない養護教諭の仕事や独自の役割について、教職員全体が理解し協力していくことが不可欠である。

校務分掌や保健活動のうち、養護教諭以外の教員でも引き受けられる部分はないだろうか。学校保健委員会は何をすべきだろうか。また学級担任や養護教諭の負担軽減のシステムの構築や、体制作りへの管理職のリーダーシップも求められるところではないだろうか。

3. 養護教諭により多くの研修機会を設けてほしい

保健室登校児に対する養護教諭の意識をみると、できるだけカウンセラー的役割を果たそうとしている者と、担任と同じく「教諭」として対応をしようとしている者が見いだされた。また、カウンセラー的役割を果たしたくても、学校全体の目を気にしていて、カウンセラー的役割を抑制している場合もみられる。むろん養護教諭の役割に校内の理解が得られている学校もあり、そうした場合は養護教諭は自信を持って、時代の求める新しい役割をしっかりと担っているようである。

カウンセラー的役割と教諭としての対応との使い分けや、被虐待児を発見したときの対応の鉄則について、また一般教員とのコミュニケーションや連携を図って積極的に発言できるようにすることについてなども、養護

教諭の力が高まれば、よりよい結果につながるのではないだろうか。

養護教諭の果たしている役割に学校全体の理解が必要であると同時に、養護教諭自身が力量をつけ、校内での発言権を強くし、周囲に保健室の役割の理解を得ること、その独自の役割をアピールしていくことなども必要である。

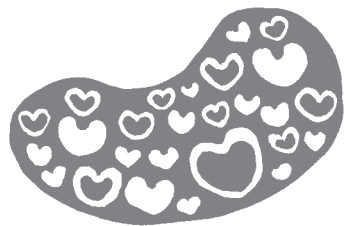
4. 中規模校以上の全ての学校に、 2人の常勤養護教諭の制度の 実現を望みたい

養護教諭が果たしている役割、今後果たすべき役割を考えると、身体と心のケアワーカーとしての専門性の一層の確立と、「学校のお母さん」の役割を2つながら十分に果たしていくためには、筆者らはやはり養護教諭の複数配置こそが必要と考える。小学校にもいずれ文部省がスクールカウンセラーを配置する日が来るかもしれないが、学校に常駐しない心の専門家には、「学校のお母さん」の役割は果たせないのではないか。「学校看護婦」と「心のケアワーカー」という少し専門性の異なる「2人の養護教諭」の配置こそが理想ではないかと思われる。

しかし今、大規模校で複数配置されている学校では、養護教諭同士の連携と協力がうまくいかないとか、中学校ではスクールカウンセラーや心の教室相談員との連携や協力が難航しているという話も聞く。

日本人はもともと対等な立場での連携や協力が苦手な文化の中で育ってきている。連携というより、ともすれば支配―従属という形になりやすいのは、T. T. (チーム・ティーチング) の場合にもしばしばみられることである。そのためには、それぞれが専門家としての力量を備えることであろう。相互の立場が明確であることで、連携も協力もうまくいくことになる。そうした制度についての模索も必要であろうし、専門性を高めるための研修機会も複数配置により一層得られやすくなるとも考えられる。

子どもの成長環境は、おとなたちの努力にもかかわらず一層悪化していく懸念があり、子どもの健康上の配慮だけではなく、心のケアについても様々な対応の必要性が増していくことであろう。その一部としての養護教諭のあり方についても、もっと関心が払われ期待がされるべきではなだろうか。



わいわい・ガヤガヤ —子どもの広場—

東京成徳大学教授	深谷和子
東京成徳大学大学院生	鈴木綾子
東京成徳大学大学院生	森 慶輔
東京成徳大学大学院生	宮園麻里
東京学芸大学大学院生	田中ゆみ
東京学芸大学学生	出水衣絵
東京学芸大学学生	北原令子
東京学芸大学学生	持田恭子



わいわい・ガヤガヤ —子どもの広場—

子どもたちに聞いてみたい。

君たちの中にある時間の流れ、君たちの心の風景、君たちの夢の色。
そして暮らしの四季。

日頃のアンケート調査では拾い上げられない、
子どもたちの心の世界をのぞいてみました。

小学校4・5・6年生の子どもたち、600人との交信をお届けします。

(★印は子どもの声、＜ ＞内はコメントです)



あなたが、まだ一度も食べたことがなくて、
「食べてみたいなあ」と思うものは？



＜男子＞

★なし・無回答(多数)

＜世界中のものはみな食べたのか、
それとも新しい食べ物は苦手？＞

★キャビア、フォアグラ、トリュフ、マツタケ (多数)

＜世界3大珍味ともいうけれど、さすが情報化時代だ＞

★フランス料理のフルコース(多数)

＜そんなにすごいものじゃないんだけど、
あこがれのね＞

★フグ(多数)

＜まずいものじゃないけれど…、子どもの
口においしいかどうか＞

★クジラ(多数)

＜50年前の日本は、肉と言えばクジラ。そ
ういう時代もあったんですって＞

★マンモスの肉(4年)

★サソリのから揚げ(4年)

★ハチの子(6年)

★バッタの佃煮(4年)

＜イナゴの佃煮なら売ってるんだけど、バ
ッタは…＞

★ズッキーニ(4年)

＜この頃は、スーパーでも売ってることが
あるのよ。形がキュウリに似ているね＞

★流しそうめん(4年)

★鯛焼き(4年)

＜純和風＞

★クラブハウスマック、激辛イタリアンカレー (4年)

★キャビア、ビール、お酒、クジラのおさしみ(4年)

★超高級外国ステーキ、フランス料理フルコース、本場インドカレー、イタリアのピザ、韓国焼き肉、特上寿司十人前、大量の毛ガニ、タイのお吸い物(5年)
＜西洋も東洋もちゃんと目配りしてる＞

★ブルーチーズ、キャビア(6年)

★フカヒレ(5年)

★インドカレー、韓国キムチ(5年)

★スパゲッティペペロンチーニ(5年)
＜名前はいいけれど、なんていうことはない、ニンニクと赤唐辛子の入っただけのスパゲッティ。でもこれがパスタの基本！＞

★酒(5年)

＜あと10年のがまん＞

★キムチ鍋(5年)

＜キムチ鍋のモトだってスーパーに売ってる時代。超簡単！＞

★サーロインステーキ(5年)

★ビフテキ、カニグラタン、アユずし(5年)
＜アユとカニは高いけど、肉は安くなったからステーキ用なら500円も出せば買えるんだけど。あとは塩胡椒して、フライパンで焼くだけ。ニンニクをちょっと入れますか。君もやってみて！＞

★ツタンカーメンの食べていた食事、プチセ
ンレス一世の食事(5年)

＜物知り博士だね＞

★雲(5年)

＜山登りすれば雲はどどんふもとから上がってくるよ。口を開いて立ってるだけで君の望みは叶います。1000メートルくらいの山で十分と思うけど＞

★ポケモンのカップ麺、チキンラーメン(6年)

★ポケモンカップ麺、ラ王(6年)

＜お小遣いで十分手が届く範囲。でもお母さんが手作り派で、ダメっていうのかなあ＞

★松屋の焼肉定食(6年)

＜お姉さんは、吉野屋の牛丼。女性1人じゃ行きにくいから、誰か連れてって！＞



＜女子＞

★なし・無回答(多数)

★全て食べたことが(だいたい)あるから特
にない(5年)

＜と思っている、あなたの世界の小ささが心配＞

★キャビア(多数)

★クジラ(多数)

＜どうしてクジラがそんなに食べたいのか＞

★フォアグラ、トリュフ、ブルーチーズ、ビール(4年)

＜最後にビールがついてるところはなかなかね＞

★大トロ、松坂牛のステーキ(4年)

★豚、ダチョウ、フォアグラ、松坂牛、ドリアン、大トロ(6年)

★北京ダック、ピクルス(4年)

★北京ダック(5年)

★まずくてもフォアグラ(5年)

★フグ(5年3人)

＜子どものあなたは、これが？って思うかもしれない＞

★フランス料理(6年)

★高級ステーキ(6年)

★しゃぶしゃぶ(4年)

★神戸松坂牛(5年)

★ライスペーパー、インドカレー、パパイヤ
(4年)

★マンゴプリン、流しそうめん(4年)

★焼き鳥、巨峰、焼き肉、そうめん(スーパーで買うの)、生たまご(4年)

★ビッグマック(大きくて食べられないから)
(5年)

★卵のおすし(4年)

★夕張メロン(4年)

★パパイヤ(4年)
＜手の届く範囲よ＞

★チーズボンデュ(4年)
＜ポンじゃなくてフォンなんだけど、そこ
がいいね。聞きかじってあこがれてるんだ＞

★そばがき(5年)
＜おとなでもそば通でないと、美味とは思
えないかも＞

★さとうきび(6年)
＜昔はその辺の畑でも植えてたんだって＞

★世界一おいしい焼きリンゴ(4年)
＜お母さんの作ってくれた焼きリンゴが、
きっとそれよ＞

★ワニの肉(5年)

★サメの肉(5年)

★サソリ(5年)

★クジラとかカンガルーみたいな珍しい生き
物の肉(5年)

★ヘビ、カエル、ライオン、イグアナ、カメ、
サソリ、ゴキブリ、クモ、キリギリス、ス
ズメ、ハト、メダカ、ウサギ、サンショウ
ウオ(5年)
＜勇気があるんだね＞

★超高級外国産ステーキ、産みたてのイクラ、
人くらいの大きさのカニ(5年)
＜産みたてのイクラって？ そうか、産み
たての卵の連想だね。どっちも卵だもんね＞

★宇宙食(6年)
＜宇宙飛行士になろうよ＞



あなたが「こういうことができるように
なりたいなあ」と思うのは？



＜男子＞

★なし(9人)

★無回答(4人)
＜何もないなんて！＞

★空を飛ぶこと(多数)

★瞬間移動(5年・6年)

★羽が出て飛べる(6年)

★空を飛ぶこと、瞬間移動(6年)

★空を飛びたい、宇宙へ行きたい(6年)
＜昔から人類の夢だった！＞



★重とび、逆立ち歩き、空中逆上がり(4年)

★空中逆上がり(4年)

★鉄棒、なわとび(4年)

★鉄棒(4年)

★逆上がり(4年2人)

★跳び箱23段を跳ぶ(4年)

★鉄棒の逆上がり、空中逆上がり(4年)
＜おとなになってお尻が重くなっちゃうま
でに、どんどん練習！＞

★空中回転(5年)

★てんかい(5年)

★ばくちゅう(5年)

★ばくちゅう、のぞみ、四重とび(5年)

★ばくてん(5年2人)

<苦労してるね>

★ローラーブレードで360度ジャンプ(5年)

★テニスのスマッシュ、ボーイスカウトのきく賞を取れるように(5年)

★クロールを35秒以内になりたい(5年)

★空を飛ぶ、50Mを5秒以内で走る、野球がうくなる、松井・中村紀洋・江藤などを三振にする、家をどこにでも移せる(6年)

★ピッチャーで150km出せて、バッターのとき、ホームランを打てること(6年)

★ゴルフで200Y飛ぶようになりたい(5年)

★ホームランを全打席打つ、ピッチャーで三振を全部取る、空を飛べる(6年)

★バンジージャンプができること、車が運転できること(4年)

★全打席ホームラン(5年)

<その元気がいいね>

★未来がわかるようになりたい、プロ野球選手の読売巨人軍と一緒に練習できるようになりたい、勉強がもっとできるようになりたい(6年)

<オールラウンドプレイヤーってわけだね。僕もそうになりたい>

★サッカー選手(6年)

★もっと泳ぐのが速ければ(6年)

★バスケットのリングでダンクをすること(6年)

★今よりも速く走ったり泳ぎたい(6年)

★水泳(6年)

★水泳、空を飛ぶ(6年)

★なわとび、水泳(6年)

★運動(4年)

<運動なら何でもできるようになりたいね。勉強よりも>

★漢字(4年)

★そろばん、運動(4年)

★いろんな楽器を弾くこと(4年)

★カメラの撮り方がうまくなりたい(4年)

<いろいろあるね>

★勉強(5年・6年)

<意外に少なかったんだけど>

★未来予知(6年)

★超能力(5年・6年)

★超能力、動物と話せる、飛ぶ、走りで世界一(5年)

★魔法が使いたい(5年)

<何に使うか、使いみちは?>

★ゲームの時間をのばす(5年)

<いつもお母さんに「もうおしまいよ」って言われているんだ>

★ショーウィンドーのロゴをとることができるようになりたい(5年)

<?>

★人気者になりたい(6年)

<大勢の人からの人気よりも、たった1人の人から愛される方がムズカシイかも>

★アイスクリーム屋に(4年)

★マッサージ師に(6年)

<具体的でいいね、きつとなれるよ>

★塾を休めるように(6年)

<疲れてるんだね>

★ゴム人間になりたい(6年)

★みんなでいつまでも生きたい(6年)

<かぐや姫の昔からの人間の望みね>

★レザーパンチ、キック、空を飛べる、頭が
よくなる、透明人間(6年)

★いろんなこと(6年)

＜つまり、何もないってことね＞



＜女子＞

★なし(6人)

★わからない(3人)

★無回答(9人)

＜全て満足してる？＞

★空を飛べるようになりたい(多数)

★空を飛ぶ！こと、水中で息ができる！こと
(6年)

★翼がつき空高く飛んでいきたい、雲をさわ
ってみたい、自分の好きな動物を飼いたい
(オコジョ)(4年)

★空を飛べるようになりたい、月に住めるよ
うになりたい(4年)

★宇宙へ行くこと(4年)

＜男の子と同じだ！ みんな、空を飛びた
がってる＞

★鉄棒(4年)

★うんてい(4年)

★うんていを全部やりきれるようになりたい
(4年)

★ばくてん(4年)

★逆上がり(4年)

★鉄棒の足伸ばし運動前まわり(逆上がり)
(5年)

★ばくてん、空中まわり(5年)

★二重とび(15回以上やってみたい)(5年)

★なわとび、オーラーが使えるようになりた
い(5年)

★三重とびができるようになりたい(4年)

★いっぱい泳げること(4年)

★逆立ち(4年・5年)

★逆立ち、高くジャンプ(4年)

＜どっちも世界が変わりそうだね＞

★家でバレエの練習、すしを作る(4年)

★家事(料理など)、ダンス、運動(6年)

★料理・水泳(もっとできるように)、魔法
を使ってみたい(6年)

★お料理(4年)

★料理がうまくなりしたい(5年)

★お母さんくらい裁縫ができるようになりた
い(6年)

＜お母さんは上手なのね＞

★絵を上手に描くこと(4年)

★歌が上手に歌える(4年)

★字をもっときれいに書きたい(4年)

★お手玉、大縄、アイススケート(4年)

★スケート、バレエ、バイオリン、フルート
(4年)

★竹馬、一輪車のアイドリング(4年)

★テニス(6年)

★バレエでうまく踊りたい！(5年)

★ピアノ(6年)

★スコアの書き方(5年)

★もっと速く走りたい(6年)

★速く走ること(6年)

＜いろいろあるね＞

★マンガ家に(5年)

★医者に(6年)

＜がんばろうね、きつとなれるよ＞

★勉強と運動、魔法(5年)

★勉強、運動系、料理(6年)

★勉強、運動関係がよくなりしたい(4年)

★頭がよくなりしたい！(5年)

★勉強しなくてもいい成績が取れるようにな
りたい(5年)

★漢字(4年)

★計算(6年)

★勉強、算数、国語、理科、社会(4年)

＜女の子は、男の子より勉強にこだわってる＞

★魔法を使ってみたい(6年)

★超能力(5年)

★超能力(テレポート)、ドラえもんや友だち(5年)

＜超能力を何に使うの？＞

★器用になること(5年)

＜いつも不器用って言われてるのかな＞

★みんなにやさしくできる、逆立ちが簡単にできる(6年)

＜どっちも難しいね＞



あなたの家にあるもので「いらないなあ、捨てればいいのに」と思うものは？



＜男子＞

★特にない(多数)

★無回答(多数)

★子どものころに使っていたおもちゃ(多数)

★不気味な人形(5年)

★いらないおもちゃと本(5年)

★虫の模型(5年)

★アークザラッドのマンガ(5年)

★僕の勉強を誘惑するプレイステーションとコンピュータゲーム(6年)

＜ワハハ＞

★じゃがいも、肉、ピーマン、セロリ(4年)

★納豆、ナス、ブルーチーズ、卵焼き(4年)

＜あなたには、それほど嫌いな食べ物があるのね。かわいそう＞

★ごみ(5年)

＜ごみ処理もなかなか難しいんだよ＞

★兄(5年)

＜けんかしたばかりね＞

★勉強道具(5年・6年)

＜わかる、わかる＞

★シャツ(4年)

★洋服(4年)

＜いつか役に立つかな、君の子どもの代にでも＞

★ピアノ、塾のプリント(6年)

＜どっちもやめたいんだね。誰でも逃げたものってあるよね＞

★家具(5年)

★包丁とぎ(4年)

＜お母さんは買ったけど使わないんだね。研ぎに出す方が切れ味がいいから＞

★いらない紙(5年)

★使えなくなったペン(6年)

★ビニール袋(6年)

★昔の学校の手紙(5年)

★自分の部屋のダンボール(5年)

＜簡単に捨てられるじゃない？＞

★セロリ、ブロッコリー、カマンベール(4年)

★ワインの入れ物(6年)

★お父さんの昔、読んでいた本200冊くらい(6年)

★お父さんのもう使ってないダンベル(6年)

★お母さんのかばん(バッグ)(6年)

＜両親の思いを理解するには、まだ歳月が必要ね＞

★タバコ(6年)

＜どうして禁煙できないのかな＞

★いっぱいある(6年)

＜どうして人は、モノから自由になれないんだろう＞



＜女子＞

★特にない(多数)

★無回答(多数)

★お父さんの使い終わった携帯電話のコレクション(4年)

★ゴルフクラブ(4年)

★骨董品(5年)

★古い本(6年)

★お母さんが独り占めしているお菓子(4年)

★前の家の家具(4年)

★壊れている時計など(6年)

★ぼろいテレビ(5年)

★ちっちゃいテレビ、がきっぱいの(5年)

★古いステレオ(6年)

★変な置き物(5年)

★二段ベッド(6年)

★掃除機(6年)

＜おとなに大事なモノは、子どもには理解が難しいね＞

★使えない磁石(4年)

★小さい鉛筆、消しゴム(4年)

★いらなくなった粘土、いない洋服(4年)

★お菓子の缶、古い新聞、小さい服、ペットボトル(5年)

★着れなくなった洋服、小さいころのおもちゃ(6年)

★小さいときの服、おもちゃ、塾のもの(5年)

＜昔は宝物だったんだろうね。思い出はそう簡単には捨てられないし。君はできる？＞

★いらなくなった小さいころのおもちゃ・人形(多数)

★小さいころ使っていたもの(6年)

★リカちゃん人形(6年)

★プラレール(4年)

★ポスター(5年)

★絵本(5年)

★ままごとセット(5年)

★マンガ(4年)

★いろいろ(4年)

★こわい話の本(5年)

★ごみ、ゴキブリ、ノミ(5年)

＜がらくたみたいだけど、でも愛着があるでしょ＞

★姉、妹、ホラービデオ(5年)

＜そんなにこわいきょうだいなの？＞

★人にあげたり、古くなっても使っているの
で、いないものはない！(5年)

＜きちんとモノ管理のできるご家族ね＞

★すべて大切なので(いないものは)あり
ません(5年)

＜そうだよ。みな、そのときは命があった
んだよね＞

4 担任の先生のいちばん好きなのところって、どこ？



★おもしろい(多数)

★笑えるところ(6年男子)

★ダジャレレンジャーなところ(6年女子)

★ギャグを言うところ(6年男子)

＜実は必死で毎日考えているのかも。だって、先生は君たちの笑顔が見たいから＞

★明るい(5年男子)

★感じがいい(5年男子)

★元気なところ(5年男子)

＜先生にとって、君たちといることが何よりの元気のモト！＞

★いっしょに漫才したりするところ(6年女子)

★ノリがいいところ(5年男子)

★おしゃべり(5年女子)

★よくしゃべる(6年男子)

＜大好きな君たちといると、先生も楽しくなる＞

★宿題が少ないとき(多数)

★遊ばせてくれる(6年男子)

★早く休み時間にしてくれる(5年男子)

★レクリエーションの時間をとってくれる(5年女子)

★いろんなモノを持ってきてもいいことにしてくれる(6年女子)

★先生の話で、たまに授業をつぶしてくれるところ(6年女子)

＜先生だって、みんなの好きなことは知ってるよ。でも勉強も教えなくちゃならないし、つらいところ＞

★勉強をわかりやすく教えてくれるところ(女子多数)

★いろんなことを教えてくれる(6年女子)

＜わからなかったら、どんどん聞いちゃえ。きっと喜んで教えてくれるよ＞

★困っていると、助けてくれる(5年女子)

★よく話を聞いてくれるからスッパリする(5年女子)

＜先生はみんなのお助けマン。困ったとき、悩んだとき、いつでもお助けマンを呼んじゃえ！＞

★きれいなところ(5年女子)

＜あなたもいつか、先生よりもっときれいになる日が来るんだろうなあ＞

★ひげをさわると気持ちいいところ(5年男子)

＜むむむ、ちょっと危険？＞

★ちゃんとみんなのことを考えてくれる(6年女子)

＜それに気づける君はスゴイよ！ 先生はいつも、君たちのことで頭が一杯＞

★やさしい(5年男子)

＜君も先生にやさしくしてあげてね＞

★悪いことをした人には怒るところ(5年女子)

★必要なことをきっぱりと、回りくどく言わないところがいい(6年男子)

＜君たちと一人の人間として向き合っている証拠。君もそれがわかるんだね＞

5 担任の先生の嫌いなところは？



★やることをたくさん出す(5年女子多数)

★宿題が多い(5年男子)

＜先生は「みんなが賢くなるように」って
思ってるからでしょ、きっと＞

★あまりおもしろくないギャグを連発する
(6年男子多数)

★すぐ人をからかう(6年男子)

★冗談が多いところ(6年女子)

★おやじギャグを言う(6年男子)

＜先生も一生懸命ギャグを考えてるのよ。
みんなの評価が厳しいと、先生のギャグも
どんどん磨かれるでしょう！＞

★タバコを吸う(6年女子多数)

★タバコの匂いがする(6年男子)

＜先生、自覚が足りませんよ。即禁煙＞

★たまにこわい(5年女子)

★こわい顔(5年女子)

＜何か先生を怒らせるようなことしたんで
しょ？ 生まれつきこわい顔の先生じゃな
いはず＞

★勉強のペースが速い(5年女子)

★授業がなかなか進まない(6年男子)

★字が汚い(5年女子)

＜黒板の字が汚いと、子どもは困るんだよ
ね。「もうちょっと読みやすく書いて」って
言ってみたら？＞

★言っていることと違っていることを、黒板
に書く(6年男子)

＜先生も人間だから、まちがいもあると思
うよ＞

★プリント攻撃(5年女子)

＜文句言っちゃダメ＞

★話をすぐそらす(6年女子)

★たまに話を聞かない(6年男子)

＜先生に聞いてほしい話があったら、先生
が忙しくなさそうなときに言ってごらん。
きっと聞いてくれるよ！＞

★いばる(5年女子)

★えこひいきする(6年女子)

＜これはいけないよね＞

★だらしない格好をする(6年女子)

★机のうえの片づけや整理整頓をしない(5
年女子)

＜先生、子どものチェックは厳しいですよ＞

★言葉が悪いときがある(5年女子)

★細かい(5年女子)

★適当なところ(5年女子)

＜どっちでもダメか。中庸は難しい！＞

★体育のときいつもと違っちゃうこと(5年
女子)

＜イキイキしちゃうの？ それともビシビ
シやるの？ 先生は学生時代体育会系だっ
たかもしれない＞

★よくカン違いする(6年男子)

★独り言を言う(5年女子)

★笑うときに唾を飛ばす(5年女子)

＜パッと後ろへ下がろう＞

募集！

「わいわい・ガヤガヤー子どもの広場ー」の調査に
ご参加くださるクラスを募集しています。

1. クラス単位でお申し込みください。記入用紙(B4・2枚程度)はお送りいたします。
2. 書いたお子さんが特定できるような、プライバシーにふれる内容は拾いませので、ご安心ください。
3. 10クラス程度を募集します。はじめにまとめて学校名を下記のように入れさせていただきますが、ご都合で伏せていただいても結構です。
●●小学校、●●小学校、●●小学校……の4年、5年、6年の皆さん
4. ご応募が多いときは、ご希望に添えない場合もありますことをお含みください。

6 最近、あなたがいちばんうれしかったことは？



★ほしいものが手に入った(6年男子)
★ゲームを買ってもらった(5年男子多数)
★文房具を買ってもらった(6年男子)
★お母さんに新しい水着を買ってもらった
(6年女子)
＜お兄さんも子ども時代、そうだったよ＞

★交通博物館に行けたこと(4年男子)
★お誕生日会(5年男子)
＜誕生日がうれしいのは子どもだけ。お兄
さんはもうあまりうれしくない。今のうち
にたくさんお祝いしてもらおうね＞

★カメを買った(6年男子)
★ハムスターが来た(6年女子)
★捨て猫を見つけた。里親探しが楽しい(5
年女子)
★ハムスターがなついてきてくれた(5年女子)
＜今も昔も動物は子どもの友だち、きょう
だいなんだね＞

★おこづかいをもらった(多数)
★おこづかいが増えた(6年男子)
★お金がたまった(6年男子)
＜もらったり、たまったりしたお金は何に
使うのかな？＞

★友だちが増えた(6年女子)
＜そうそう、友だちは世の中で一番の宝だ
よね！＞

★メール友だちができた(6年女子)
＜さすが情報化社会。メールとはすごいね。
でも、直接話せる友だちもたくさんいなく
ちゃ困るけど＞

★好きな友だちと隣になれた！(5年女子)
★○○君と席が近くなった(5年男子)
＜だから席替えは一大事。学校に行く楽しさ
が決まるんだよね。先生も頭の痛いところ＞

★私のいやなこともうれしいこともわかって
くれる人が、お姉ちゃん以外に1人できた
(6年女子)

＜お母さんやお父さんはダメなんだね。親
友？ もしかしてボーイフレンド？＞

★好きな人と話せた(6年女子)

★運動会に自分の好きな人が来た(6年女子)

＜まだあげ初めし前髪の／林檎のもとに見
えしとき／前にさしたる花櫛の／花ある君
と思ひけり…って詩を知ってるかい？＞

★友だちと遊んだ(多数)

★ゲームで遊んだ(6年男子多数)

＜う～ん、昔は当たり前だったけど＞

★友だちがやさしくしてくれる(5年男子)

★骨折したときに歩くのを助けてくれた(6
年男子)

＜本当にうれしいよね。誰にでも、もっと
やさしくしようよ＞

★仲なおりできた！(5年女子)

＜いっそう友情が深まるね。恐れずにけん
かしよう！＞

★サッカーの試合でゴールした(5年男子)

★運動会の組み運動でタワーが成功した(6
年女子)

★このごろテニスの試合に勝ってる(5年女子)

★絵がうまくなった(4年男子)

★塾のクラスが上がった(5年男子)

★歴史が楽しい(6年男子)

＜一生懸命取り組んだ甲斐があったね＞

★父をKO(5年男子)

＜よしよし！ だんだん力がついてきたぞ＞

★お母さんがご機嫌になった(6年女子)

＜お母さん、子どもは親に結構気をつかっ
てるのです！＞

★お母さんにほめられた(6年男子)

＜いつもは怒られてばかり？＞

★妹が1年生になった(5年女子)

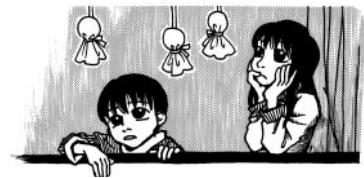
＜やさしいお姉さんだね＞

★「ありがとう」って言われたとき(5年女子)

＜もっともっと言いたい言葉だね＞



7 最近、あなたがいちばんいやだったことは？



★悪口(多数)

★悪口を言われた。近くでコソコソ話をしな
がらこっちを向いてくる(6年女子)

★いじめ(5年男子)

★昔いじめられた一番嫌いな人に、つきまと
われている(6年女子)

★自分のことを「嫌い」って言われた(6年女
子)

★友だちが何かというと暴力を振るって、私
に「ぼうりょく女」と言ってくる(6年
女子)

★へんなあだ名で呼ばれた(6年男子)

★自分の名前で遊ばれたこと(5年男子)

★1年から6年の誰かにバカにされたこと
(6年男子)

＜いじめの中で、みんな傷ついてる＞

★友だちに好きな人ができたので、恋のキューピットをしようとしたらそいつにイジワルされたこと(6年女子)
＜せちがらい世の中ね＞

★勉強(5年女子)

★居残り(5年男子)

★塾(4年男子)

★塾のテストがものすごく悪かった(6年男子)

★宿題をじゃまされた(5年男子)

＜子どもも楽じゃないね＞

★昔のいやなことを夢で見たこと(6年女子)

★タンスに足をぶつけた(5年男子)

★骨折してること(6年男子)

★手を縫った(5年女子)

★カードを盗まれた(6年男子)

★歯の矯正具がまたとれたこと(6年女子)

＜こちらが悪くなくても、災害は降ってくるんだよね＞

★友だちとけんかした(5年女子)

★たたかれた(5年女子)

★妹にたたかれる(6年男子)

★けんかして目をなぐられた(6年男子)

★弟に目つぶしされそうになった(6年男子)

＜まったく、けんかの仕方知らないんだから…気をつけてね＞

★友だちが転校する(5年女子)

★お父さんが単身赴任で行ったこと(5年女子)

＜家族が別れて住むのはつらいね＞

★スズメや飼ってた金魚が死んでしまった(4年女子)

＜悲しいね、人生勉強の1歩なんだけど＞

★都大会1回戦負け(5年男子)

★体育ができない(4年男子)

＜めげずに、またがんばろう＞

★ゲーム。目がつかれるから(6年男子)

＜しなきゃいいのに、したいんだよね＞

★歯医者(4年男子)

＜おとなでもいやだ！＞

★変なおばさんに声をかけられた(6年男子)

★いやな子といっしょのクラスになった(6年女子)

＜人生には、そういうこともあるんだよ＞

★兄ちゃんが怒ること(4年女子)

★近所のおばさんに怒られた(5年男子)

★ゲームのルールをまちがえて、友だちにきつく怒られた(5年女子)

＜そんなに怒ることはないのにね＞

★毎日お風呂に入ること(4年男子)

＜お風呂って、好きか嫌いか2派に分かれるみたいね、子どものときは＞

★遊ぶ相手がなくてヒマだった(4年男子)

＜友だちが好きなんだね＞

★親が貯金をおろしてくれないこと(6年男子)

＜子どもだって、何かとつきあいもあるし、ほしいモノもあるのにね＞

★雨が降りつづく(6年女子)

＜どうにかしてほしいよね＞

★なし。うれしいことばっかし(5年男子)

＜いいなあ、人生はそうありがたいね＞

この「わいわいガヤガヤ—子どもの広場—」は、2000年6・9月、首都圏の小学4・5・6年生600人を対象に行われたオープンアンサー形式の調査の結果に、深谷研究室のゼミ生(現役・OB・OG)がコメントを加えて構成しました。

アンケートのお願い

単位：実数以外はパーセント

I. はじめに、養護教諭としての日常からおたずねします。

- 1 あなたのきのう1日（ただし土・日曜日以外の日）の生活をお教えてください。
（今日がもし月曜日であれば、日曜日ではなく先週の金曜日について、思い出してお答えください）。

<きのうの1日>

1) きのは……（ ）月（ ）日（ ）曜日

2) 学校に着いた時刻は……（ ）時（ ）分ころ

時刻	～7:00	7:01 ～7:15	7:16 ～7:30	7:31 ～7:45	7:46 ～8:00	8:01 ～8:15	8:16 ～8:30	8:31～
(%)	0.2	0.5	4.0	12.5	46.3	27.9	8.3	0.3

3) 学校を出た時刻は……（ ）時（ ）分ころ

時刻	～16:00	16:01 ～16:30	16:31 ～17:00	17:01 ～17:30	17:31 ～18:00	18:01 ～18:30	18:31 ～19:00	19:01 ～19:30	19:31 ～20:00	20:01～
(%)	4.0	3.5	13.2	32.8	21.4	11.7	7.5	2.6	1.6	1.7

4) 保健室にいた時間は……（5）時間（23）分くらい

5) 職員室にいた時間は……（2）時間（41）分くらい

6) きょう1日の間に保健室に来た子どもの人数は何人ですか。

- 平均
1. 病気で（3.5）人 2. ケガで（7.5）人 3. 遊びやただの話だけで（8.2）人
4. 相談で（0.8）人 5. その他（14.4）人 6. 合計（26.4）人

7) きょうは学校で何人くらいの先生と会話をなさいましたか。
（ただし、あいさつのような簡単なものや、会議の討論は除きます）

平均
（8.8）人くらいの先生と話をした

8) きのうは何人くらいの子ともと会話をなさいましたか。

- 平均
1. 保健室の中で… (20.6) 人くらい
2. 保健室の外で… (15.6) 人くらい
- 合計 (35.9) 人くらい

9) 保健室以外の場所で出会ったとき、＜子どもから＞話しかけられることはどのくらいありますか。

しょっちゅう 話しかけられる	わりと 話しかけられる	あまり 話しかけられない	ほとんど 話しかけられない	まったく 話しかけられない
25.2	61.6	11.4	1.6	0.2

2 学校での仕事についておたずねします。

1) 学校で保健関係以外の校務分掌を担当していますか。

1. はい 75.7 → それは何ですか。()
2. いいえ 24.3

2) 教育相談係に所属していますか。

1. はい 66.2 2. いいえ 33.8

3) あなたは職員会議などで、職務以外でもよく発言する方ですか。

よく 発言する	ときどき 発言する	あまり 発言しない	ほとんど 発言しない
7.4	40.5	36.6	15.5

4) あなたは保健の授業（性教育、健康などに関すること）にも積極的に取り組みたいと思いますか。

積極的に 取り組みたい	できるだけ 取り組みたい	あまり 取り組みたくない	取り組みたくない
19.7	60.7	16.6	3.0

5) あなたの学校の「学校保健活動」についておたずねします。

保健委員会の構成メンバーをお書きください。（例：養護教諭、保健体育の教師など）

()

6) 病気やケガで保健室をよく利用する子どもは、主にどの学年ですか。

1. 低学年 65.6 2. 中学年 22.0 3. 高学年 12.4

7) 保健室によく遊びや相談に来る子どもは、主にどの学年ですか。

1. 低学年 17.6 2. 中学年 23.7 3. 高学年 58.7

● 資料 調査票見本および集計結果

8) 現在保健室には、ケガや病気以外にどんな子が来ますか。

	たくさん 来る	少し 来る	あまり 来ない	ほとんど 来たことがない
1. キレやすい子……………	4.2	29.1	30.0	36.7
2. いじめにあっている子……………	3.3	38.2	27.4	31.1
3. 不登校傾向のある子……………	8.6	40.8	18.6	32.0
4. 非行化傾向のある子……………	2.9	21.0	23.0	53.1
5. 授業に耐えられない子……………	13.5	42.7	15.1	28.7
6. 身体の弱い子（虚弱な子）……………	13.2	51.1	15.0	20.7
7. 情緒の不安定な子……………	19.9	52.4	11.0	16.7
8. 親から虐待されている子……………	1.0	13.6	15.2	70.2
9. 学習障害・注意欠陥多動性障害の子……………	7.3	24.6	22.9	45.2
10. 何の問題も持たない子……………	32.2	38.6	14.4	14.8
11. その他で来室する子（……………）				

9) あなたは、子どもから次のような＜悩みや相談＞を受けることがありますか。

	よく ある	ときどき ある	たまに ある	ほとんど ない
1. 勉強のことなど……………	2.5	20.2	34.0	43.3
2. 友だちのことなど……………	23.1	37.1	28.3	11.5
3. 性格のことなど……………	3.3	20.7	32.0	44.0
4. 家族のことなど……………	4.5	25.1	36.5	33.9
5. 先生のことなど……………	14.2	28.5	32.6	24.7
6. 身体のことなど……………	28.6	37.6	25.5	8.3
7. 学校に行きたくないことの悩みや相談……………	6.3	23.3	30.2	40.2

10) あなたは、もし子どもが保健室で次のような話をしたり態度をとったとしたら、どうしますか。

	しっかり 注意する	軽く 注意する	注意しない
1. 担任のことをあなたにとても悪く言う(かなりの悪口)…	14.1	52.2	33.7
2. 担任の悪口を保健室に来た友だちと盛んに話している…	20.4	57.0	22.6
3. 仲間をひどくいじめている様子をあなたに話す……………	65.4	27.8	6.8
4. 仲間をいじめている様子を保健室に来た友だちと 話している……………	64.3	27.4	8.3
5. 親の悪口をあなたに言う……………	10.7	55.3	34.0
6. 保健室にクラスには持ち込んではいけないもの(例えば、 お菓子やゲームなど)を持ってきた……………	64.7	33.9	1.4
7. 「きのう、友だちとタバコをすった(お酒を飲んだ)」 とあなたに話す……………	73.1	22.6	4.3
8. 「この間友だちとスーパーで万引きした」とあなたに 話す……………	78.0	17.0	5.0
9. 保健室でひどく行儀が悪い(床に寝ころんだり、机に 足を上げる、室内をうろうろする)……………	63.2	33.1	3.7

11) 教室なら注意すべき行為も、養護教諭だから注意しないで自由にさせていることがありますか。

まったく 自由に させている	わりと 自由に させている	教室とあまり 変わらない扱い をしている	教室とまったく 同じ扱い をしている
0.4	49.1	44.5	6.0

上記のお答えの理由をお聞かせください。

● 資料 調査票見本および集計結果

3 ふだん学校にいて、次のように感じることはありませんか。

	とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 保健室の仕事が多すぎてゆとりがない……	17.4	26.0	25.4	24.9	6.3
2. 保健室に子どもがおしゃべりなどに来るのを 快く思わない雰囲気が校内にある……………	1.9	8.0	21.5	41.1	27.5
3. 校外での研修の機会がもっとほしい……………	14.6	23.0	37.2	22.4	2.8
4. 今の子どもが何を考えているのかわからない (ついていけない) ……………	1.6	8.3	36.2	47.2	6.7
5. 保健室に来る子が多すぎて1人1人に対応 できない……………	9.0	11.6	20.3	37.1	22.0

4 担任や親と養護教諭の関係についておたずねします。

1) 担任などから子どものことで相談を受けることがありますか。

	よくある	ときどきある	ほとんどない
1. 子どもの身体のことについて……………	38.8	56.7	4.5
2. 子どもの心や問題行動について……………	37.0	54.9	8.1

2) 親から子どものことで相談を受けることがありますか。

	よくある	ときどきある	ほとんどない
1. 子どもの身体のことについて……………	17.5	70.4	12.1
2. 子どもの心や問題行動について……………	10.4	57.4	32.2

3) 子どもから得た情報の中で、指導上参考になると思われることを担任に伝えますか。

小さなことでも 伝える	参考になりそうな ことだけ伝える	なるべく 伝えない	まったく 伝えない
36.5	62.8	0.7	0.0

4) 子どもから得た情報を担任に伝えた結果、適切でない指導をされて困ったことがありますか。

よくある	ときどきある	あまりない	1度もない
2.1	31.1	53.3	13.5

Ⅱ. 保健室登校や虐待など、最近の児童問題についておたずねします。

5 保健室登校についておたずねします。

1) あなたの学校の保健室には、現在「保健室登校児」がいますか。

1. 過去・現在ともいない 55.4 → **6** にお進みください。
2. 過去にいたが、現在はいない 38.9 → 3) にお進みください。
3. 現在 ^{平均}(1.3) 人いる 5.7

2) 現在、「保健室登校児」がいる場合は、以下の質問に具体的にお答えください。

(3人以上いるときは、来室期間の長い子どもからご記入ください)

◆Aさん… () 年生 (1. 男子 2. 女子) ([] 年 [] か月前から)

① 来室状況 (1. 毎日来る 2. 週に [] 日くらい来る)

↓

週に合計 () 時間くらい来る

② 保健室で何をして過ごしていますか。

③ あなたはどう接していますか。

◆Bさん… () 年生 (1. 男子 2. 女子) ([] 年 [] か月前から)

① 来室状況 (1. 毎日来る 2. 週に [] 日くらい来る)

↓

週に合計 () 時間くらい来る

② 保健室で何をして過ごしていますか。

● 資料 調査票見本および集計結果

③ あなたはどう接していますか。

◆Cさん… () 年生 (1. 男子 2. 女子) ([] 年 [] か月前から)

① 来室状況 (1. 毎日来る 2. 週に [] 日くらい来る)

↓

週に合計 () 時間くらい来る

② 保健室で何をして過ごしていますか。

③ あなたはどう接していますか。

3) 保健室登校を経て、普通に登校するようになった子どもは、あなたが今の学校に赴任なさってから、何人くらいいますか。

平均

約 (3.5) 年間に (1.4) 人くらい

4) 不登校だが保健室にも来ない子どもは今、何人くらいいますか。

平均

約 (2.7) 年間に (1.2) 人くらい

5) 「保健室登校児」への対応に追われて、それ以外の保健活動（ケガの処置など）に支障をきたすことがありますか。

とても ある	わりと ある	少し ある	ほとんど ない	まったく ない
13.5	17.9	39.3	22.7	6.6

6) 保健室登校について、学級担任との連携および学校組織としての取り組みに何を望みますか。

6 虐待を受けている子どもについておたずねします。

1) 虐待を受けている子どもが増えているといわれています。この数年間に、あなたは虐待についての相談を受けたことがありますか。

平均

1. 子どもから (0.2) 人
2. 担任から (虐待の疑いなど) (0.6) 人
3. 他の親などから (虐待の疑いなど) (0.1) 人

2) 虐待を疑われる子どもに、あなたご自身が気づかれたことはありますか。

平均

1. ある (1.2) 人 27.3 2. ない 72.7 → **7** にお進みください。

↓

〔「ある」と答えた方におたずねします〕

3) どういうことを手がかりに気がつかれたのですか。

4) 虐待を疑われる子どもに気がついたとき、あなたはどうなさいましたか。

**Ⅲ．スクールカウンセラー(*1)とそれ以外に学校に配置されている
相談員(*2)についておたずねします。**

*1 文部省から委託を受けた、児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識・経験を有する臨床心理士など。

*2 「心の教室相談員」など、公立中学校に週に2、3日配置されている教育相談員。地域によって名称は様々。

7 1) スクールカウンセラーの配置を希望しますか。(すでに配置されている場合でもお答えください)

ぜひ 希望する	まあ 希望する	どちらでも いい	あまり 希望しない	まったく 希望しない
20.2	29.3	26.7	16.2	7.6

● 資料 調査票見本および集計結果

2) もしスクールカウンセラーを配置するとしたら、どんな条件の人が望ましいと思いますか。

- ① 性別… 1. 男性 3.7 2. 女性 22.1 3. どちらでもいい 74.2
- ② 年齢… 1. 20代 3.9 2. 30代 11.4 3. 40代 20.8 4. 50代以上 5.0
5. 年齢は問わない 58.9
- 平均
- ③ 勤務条件… A (1. 毎日 33.7 2. 週に〔 2 〕日くらい 66.3)
B (1. 非常勤 51.8 2. 常勤 48.2)

3) 相談員の配置を希望しますか。(すでに配置されている場合でもお答えください)

ぜひ 希望する	まあ 希望する	どちらでも いい	あまり 希望しない	まったく 希望しない
12.0	23.5	33.1	20.8	10.6

4) もし相談員を配置するとしたら、どんな条件の人が望ましいと思いますか。

- ① 性別… 1. 男性 3.3 2. 女性 19.6 3. どちらでもいい 77.1
- ② 性別… 1. 20代 5.3 2. 30代 7.7 3. 40代 19.2 4. 50代以上 6.0
5. 年齢は問わない 61.8

③ 次の1～7の中から希望する条件2つに○を、希望しない条件2つに×をつけてください。

希望する／希望しない

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. 大学生 () 5.3／16.6 | 2. 大学院生 () 7.8／5.2 |
| 3. 地域の人 () 5.2／23.4 | 4. ボランティア () 16.6／3.6 |
| 5. 臨床心理士 () 49.0／0.2 | 6. 退職教員 () 15.0／15.5 |
| 7. 退職管理職 () 1.1／35.5 | |

平均

- ④ 勤務条件… A (1. 毎日 29.2 2. 週に〔1.9〕日くらい 70.8)
B (1. 非常勤 62.3 2. 常勤 37.7)

⑤ 配置を希望される方も、そうでない方も、その理由は何ですか。

Ⅳ. あなた自身のことについておたずねします。

8

- 1) あなたの学校は… 平均
1. 児童数 約 (268.4) 人
2. 教員数 約 (18.2) 人

- 2) 失礼ですが、あなたの年齢をお教えてください。

20代	30代	40代	50代	60代以上
21.3	32.2	34.4	12.1	0.0

- 3) あなたはどのような経歴をお持ちですか。

1. 短大、専門学校の養護教諭養成課程 50.6
2. 4年制大学の養護教諭養成課程 20.1
3. 看護学校を卒業後、養護教諭養成課程 22.9
4. その他 () 6.4

- 4) あなたは養護教諭になられて何年目ですか。 平均 (16.6) 年目

- 5) 養護教諭以外の職歴がありますか。

1. ある 22.6 → それは何ですか。 ()
2. ない 77.4

- 6) 看護婦免許は… 1. ある 27.4 2. ない 72.6

- 7) 学校の仕事を家に持ち帰ってすることがありますか。

よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない
12.8	30.4	34.6	22.2

- 8) あなたは同じくらいの年齢の＜担任教諭一般＞と比べて、ご自分をどのようなタイプだと思いますか。

	とても そう	どちらかと いえばそう	どちらとも いえない	どちらかと いえば違う	まったく 違う
1. 子どもにやさしい……………	7.3	56.5	30.2	5.8	0.2
2. 悩みなどを話しやすい……………	8.1	57.9	30.1	3.5	0.4
3. 子どもから人気がある……………	3.3	38.2	53.4	4.6	0.5
4. 人間の幅が狭い……………	3.3	18.0	51.1	25.0	2.6
5. 一般的な教育問題への知識が 不足している……………	8.8	31.1	42.4	15.8	1.9

9) あなたは校外の研究会に所属していますか。

1. はい (**平均 1.6**) か所 **46.6** 2. いいえ **53.4** → **10)** にお進みください。

↓

〔「はい」と答えた方におたずねします〕

① その研究会の構成員についてお教えてください。(複数所属しているときは、最も大きなものについて、該当する全てに○をつけてください)

1. 養護教諭 **47.0** 2. 医師 **8.9** 3. 大学関係者 **7.0** 4. 行政関係者 **4.9**
5. 教員 **15.3** 6. 幼稚園教諭・保育 **3.6** 7. 看護婦 **2.6**
8. 保健所関係者 **6.0** 9. その他 () **4.7**

② 合計で、年に何回くらい研究会に参加しますか。

平均
年に (7.7) 回くらい

10) 現在研修を受けているもの、および今後希望される研修がありましたら、該当する全てに○をつけてください。

1. 小児医学 **28.7** 2. 小児保健 **20.5** 3. カウンセリング **59.9**
4. 臨床心理学 **36.1** 5. 児童心理学 **45.3** 6. 看護技術 **20.8**
7. その他（ ） **8.6** （複数回答）

V. 最後に、最近の保護者・子どもについておたずねします。

9 最近の保護者について、気になることをお書きください。

--

10 最近の子どもを見ていて、気になることをお書きください。

--

～これで終わりです。ご協力、どうもありがとうございました。～